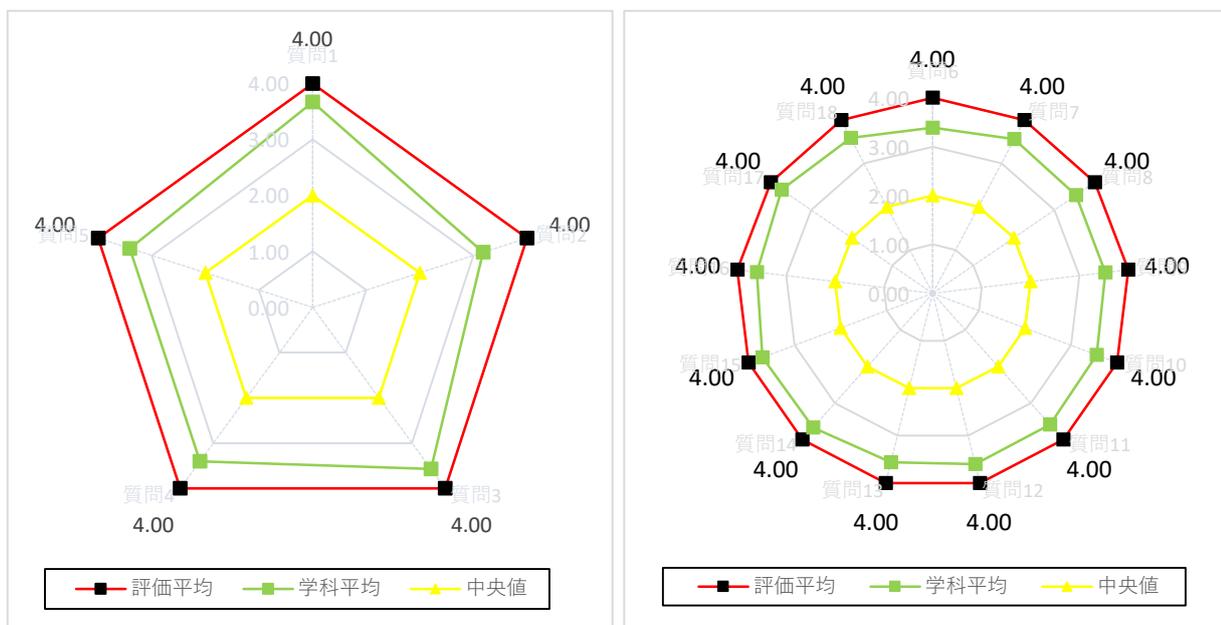


学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう I 基礎 (初 年次教育含)	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

7人中1人が回答した。

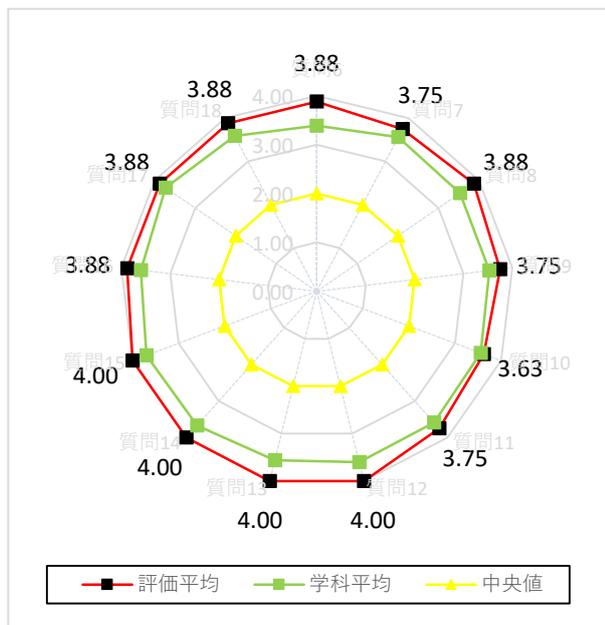
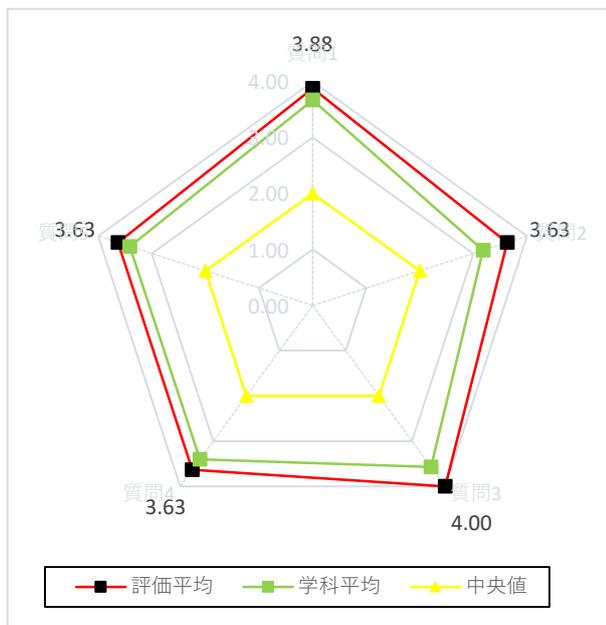
今年度も遠隔授業がほとんどであったが、学生の受講態度は全体に落ち着いており、すべてに協力的で、ほとんど欠席はなかった。Teamsでの授業でもうまく意見交換ができた。学生の中に、よい人間関係もできている。

(3) 次年度に向けての取り組み

2021年度の経験をもとに、学生同士の良い関係を育みながら授業を進めることが大事である。学生相互の理解とよい関係の構築に何が大事か、よく省察して改善していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう I 基礎 (初 年次教育含)	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率100% (8/8)、総合評価3.83

自由記述：中村先生のゼミでよかったです。社会に出て役に立つ敬語やメールなど社会人として当たり前の力を少しは身につけることができ良かったです。1年間、とても楽しい授業でした。さまざまな活動があり、おもしろかった。

本授業の目標は、大学での生活を快適にするための知識習得・環境構築と、大学生としての学びを可能にするためのスタディ・スキルの習得を通して、学士力養成のための学習基礎を定着させることである。

質問12～15の「教員の対応」について、4.0と高かった。

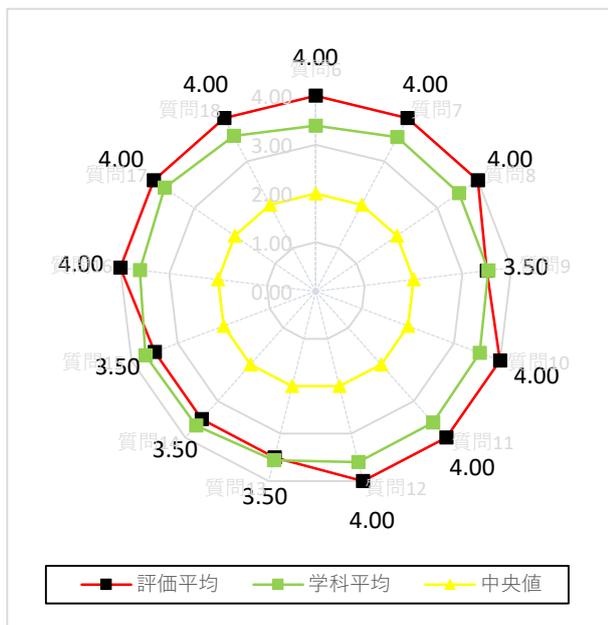
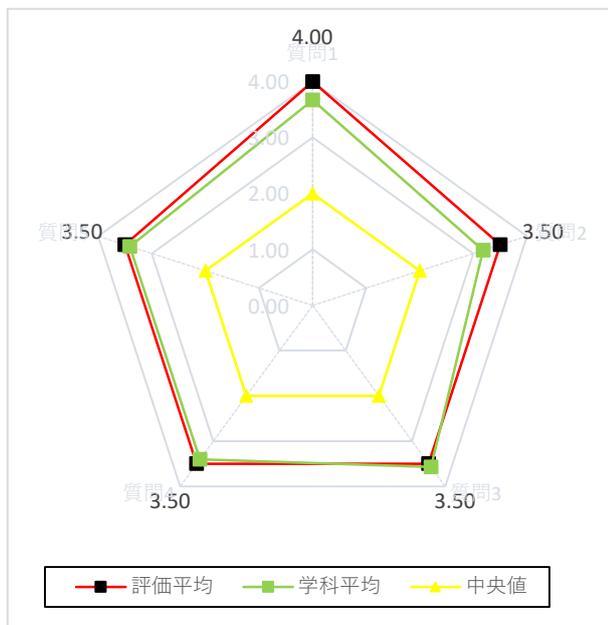
質問6視聴覚機器等の使い方が3.63と低い結果となった。

(3) 次年度に向けての取り組み

視聴覚機器等の使い方や板書の用い方が低かったため、効果的な教材の提供方法について検討したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう I 基礎 (初 年次教育含)	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

「あすなろう I 基礎」については、年度計画において全体で行われるもの、ゼミごとに行われるものに大別される。さらに、全体の中で進められたものであっても、それを踏まえてゼミに持ち帰ってさらに一人ひとりが活発に意見し、メンバーで考えるという討論の機会が設けられており、より発展したものになるよう方向づけがなされている。

本年度も昨年度に引き続き、コロナ禍において状況に応じ対面授業でなければならない授業とオンライン授業でも可能な授業に分けて対応した。パワーポイントを作成し、プレゼンテーションを行う機会も多く、それぞれがしっかりと発表できた。これについては学生間で質問等も積極的に出されて深めることができるよい機会であった。また、対面のみではなく、teamsによるオンライン授業をしっかりと活用することができたことは経験としてプラスであった。

一方、あすなろう体験についてはコロナによってなかなかボランティア活動などする機会が少なかったため、経験不足に終わってしまった。

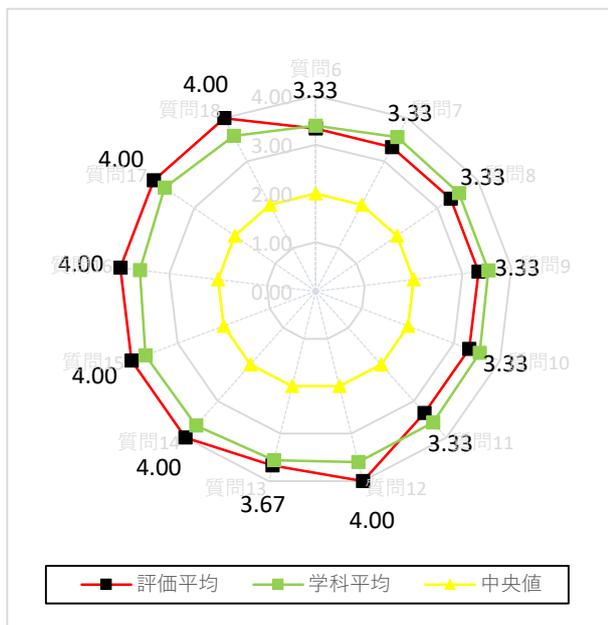
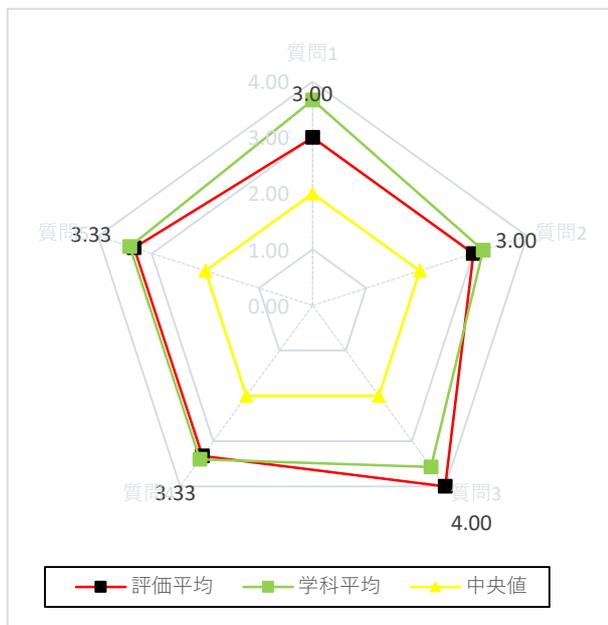
(3) 次年度に向けての取り組み

次年度においては、コロナ収束が課題ではあるが、対面・オンライン授業のそれぞれのメリットを活かし、さらに一人ひとりの学生がより充実した大学生活を送ることができるよう細やかな配慮やサポートが必要であるとする。

また、学生間でもかかわりが深まるような工夫を行い、精神面でもしっかりと学生に寄り添ったかかわりをしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう I 基礎 (初 年次教育含)	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

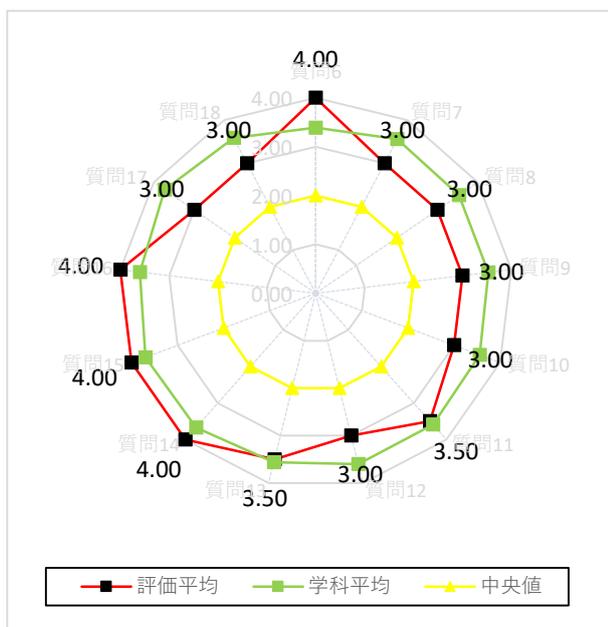
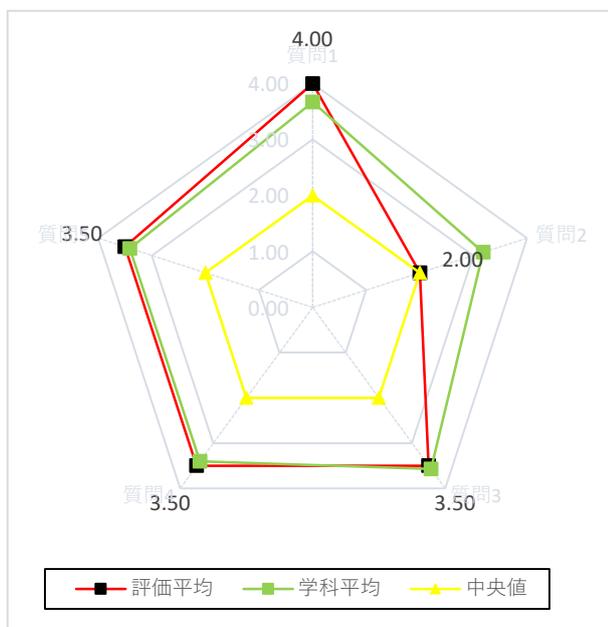
この授業では学習内容によって、学科全員で受講する日とゼミ別に受講する日とが混在する。今年度のゼミ別での授業は、コロナ対策を講じる必要があったため、Teamsを活用して行った。画面越しではあったものの、個別に対応する時間を設けながら授業を進めていった。学生の受講態度は良好で、教員からの指示や質問に対しては、積極的に応えていこうという姿勢が感じられた。各回の授業の到達目標の明確化、授業の分かりやすさについては、次年度以降、より一層の工夫を講じる必要があると思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

令和4年度は、コロナ対策を講じながらも対面で実施できるようになることを願っている。ゼミの学生には、必要に応じて個別に対応することも組み入れながら、一年次生が充実した学生生活を過ごすことができるよう支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう I 基礎 (初 年次教育含)	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

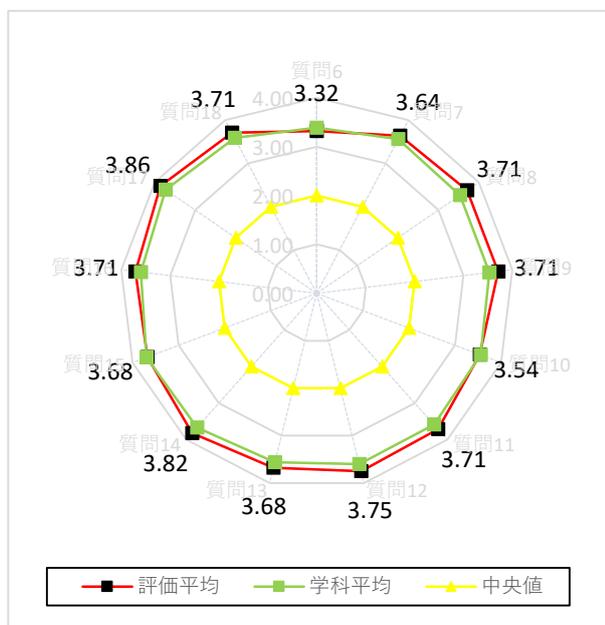
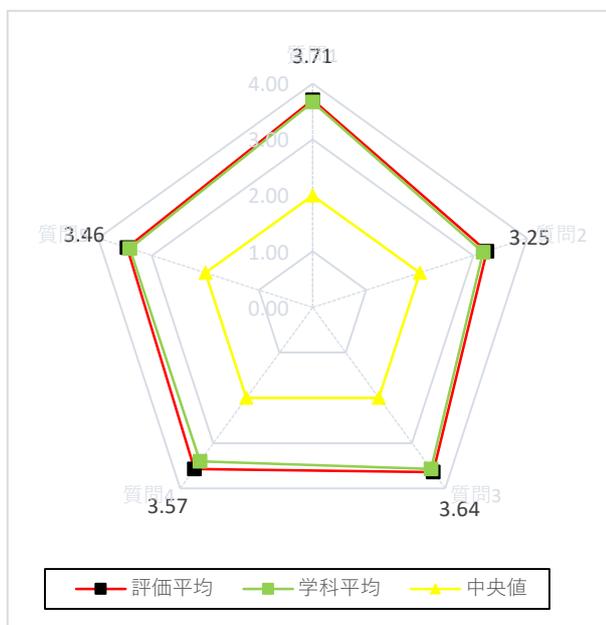
・評価平均は、項目によって学科平均を上回るものとした合わるものが混在している。授業の興味・関心が持てるような工夫、わかりやすくする工夫、視聴覚機器等の使い方の適切さ等で学科平均を下回った。

(3) 次年度に向けての取り組み

・授業の興味・関心が持てるような工夫、わかりやすくする工夫、視聴覚機器等の使い方の工夫を施し、履修生の主体的な学修が定着するようにする。本科目が社会人基礎力の向上を目指していることを折に触れて確認しながら、学生自身が目的を確認しながら取り組むことを習慣化し、社会人としての素養を高める意識の涵養を図る。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		英語コミュニケーション I	47名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

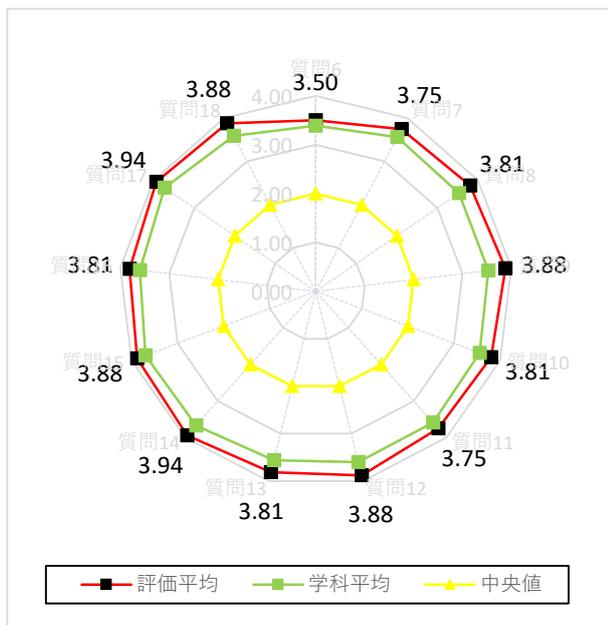
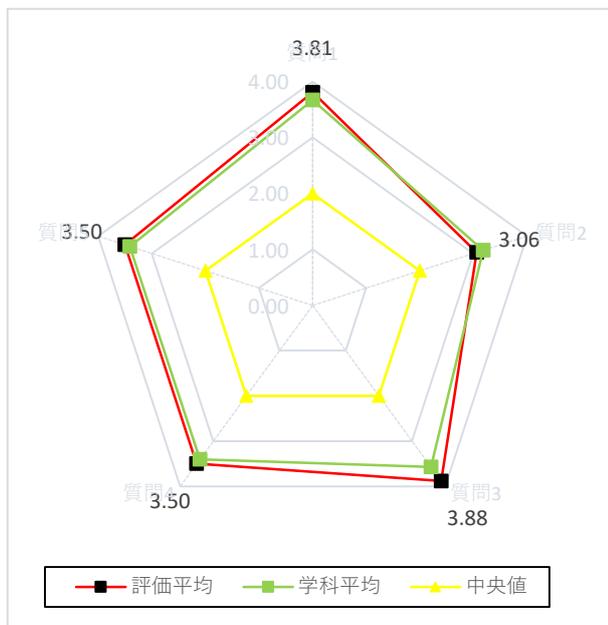
評価の平均は学科の平均より高い。シラバスの説もをきちんと説明しても学生は活用しない傾向がある。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度講開無し

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども心理カウンセリング		英語コミュニケーションⅡ	47名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

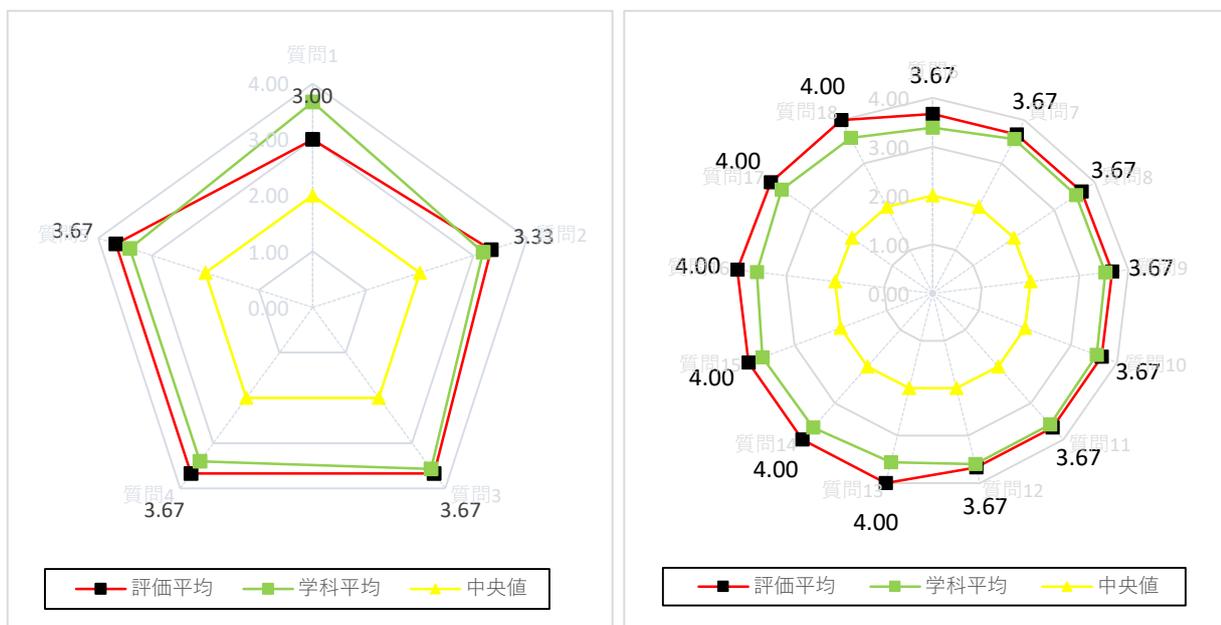
学科平均より高い評価が取れた。オンラインとはいえど学生が頑張った。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度講開無し

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		データサイエンス演習	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

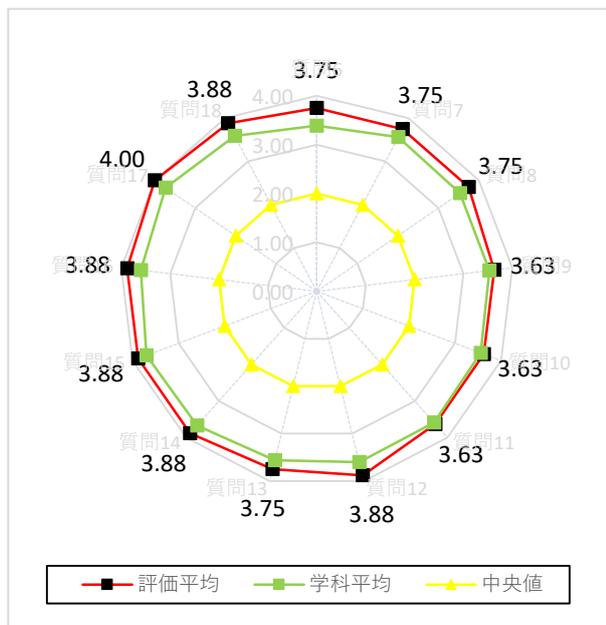
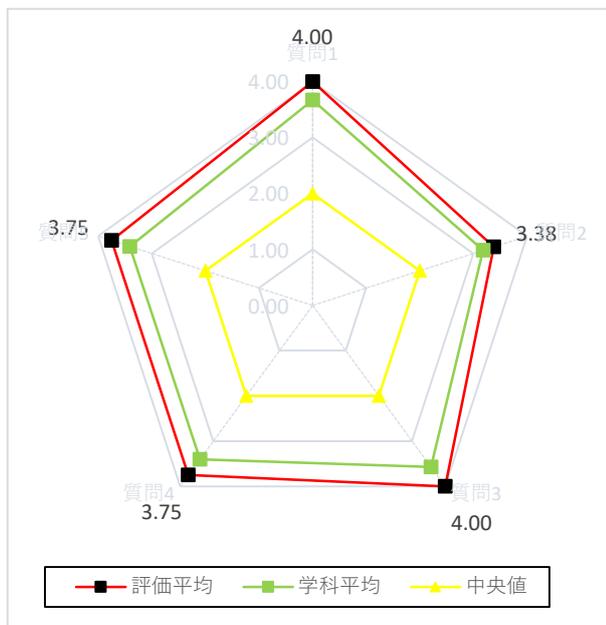
学生の履修態度はたいへん良好で、PC操作が苦手な学生たちも熱心に学習に取り組んでいた。しかしながらデータ分析やPC操作に関する興味や関心に関しては、個人差がかなり見受けられたため、本授業の内容に対する興味・関心が持てるような工夫や、学習課題に関する説明を分かりやすくするための工夫に関しては、今後、さらに検討しなければならないという課題が残った。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度の授業は、コロナ対策の為に遠隔で実施したが、次年度の授業は対面での実施に変更となる予定である。課題に取り組む学生の表情を捉えながら、個々の学生の課題解決に向け、丁寧な指導を心掛けていきたい。特に、苦手意識が強い学生たちにとって分かりやすい説明となるよう努めなければならないと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		データサイエンス演習	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率100% (8/8)、総合評価3.78

自由記述：このゼミがやりやすかったです。

データを集めてグラフを作る活動が充実していた。またパワーポイントを使った発表はいい経験になった。データを活用して様々なことを調べてみて、教育に関わる問題や現状などを知ることができ、これからの学習に活かしていきたいと思います。

Excelを使つての授業で少し早く追いついていけない時があったのでもう少しゆっくりしてもらいたかったです。

いろいろと深い学びを行うことができました。さまざまな活動があり、とても面白い授業でした。

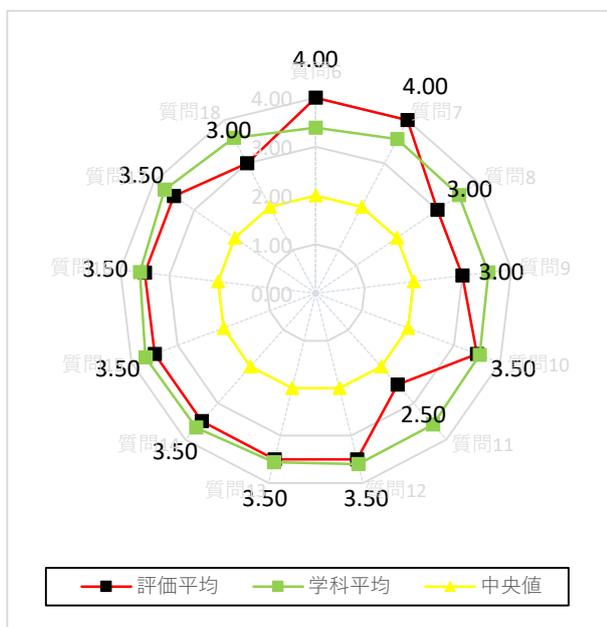
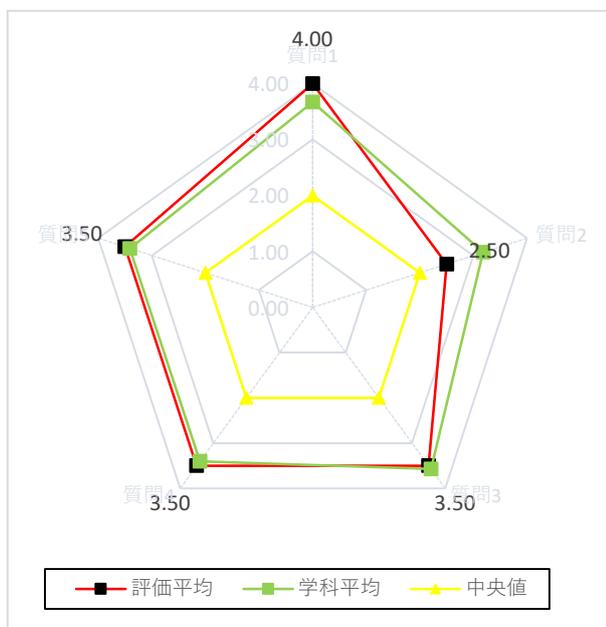
初めての授業で、手探りであったが、受講生が積極的に調査・発表することができていた。

(3) 次年度に向けての取り組み

全体での授業を教員も聴講し、流れを確認する必要がある。また、全体指導とゼミ別指導の評価が別に行けるとよい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		データサイエンス演習	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

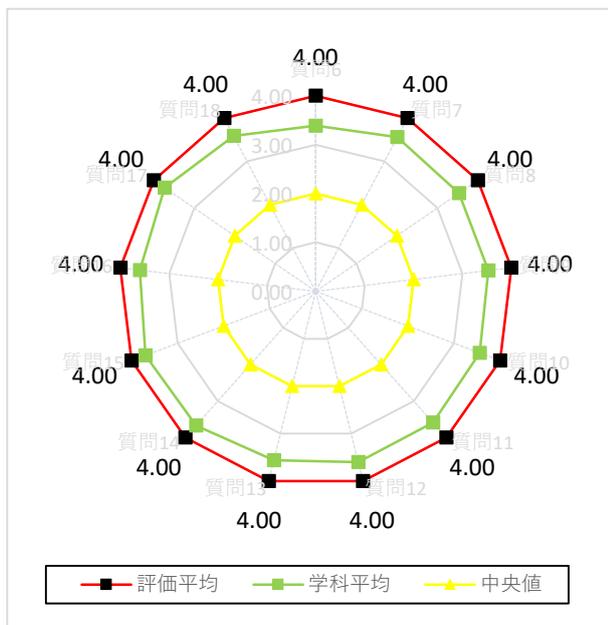
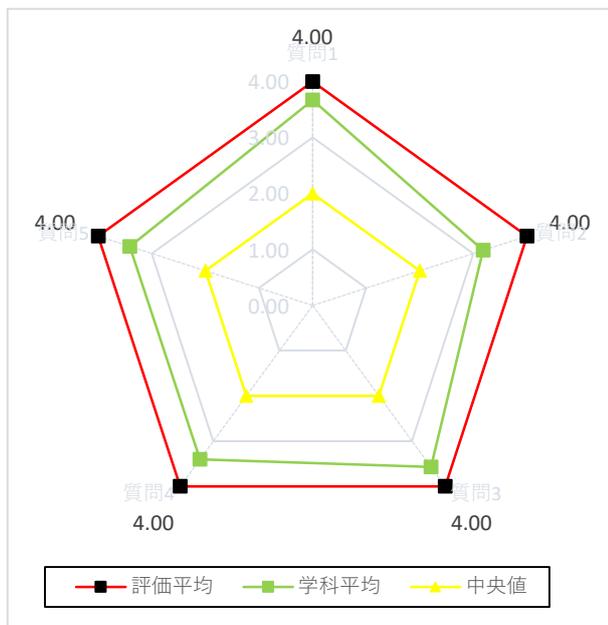
・評価平均は、学科平均程度の項目が多かったが、配布資料等の有用性に関する項目の評価平均の低さが目立っている。

(3) 次年度に向けての取り組み

・授業においては、PowerPointの編集等、パソコンの操作のスキルは向上していたが、データの読み取り、分析、考察の面では今後一層の学修の積み上げが必要と思われた。配布資料等については丁寧な説明に努め、データを活用して自身の考えをまとめたり、課題を見出したりするスキルの向上を図っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		データサイエンス演習	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

この授業は、令和3年度から開始となった授業である。そのため、学科においても検討を重ね、何を目標にどのような形式で行うのかをそれぞれの教員が理解し共有していく形で進められた。内容としては全体で講義が行われるものと、ゼミ単位で行われるものに大別される。特にゼミ単位では、一人ひとりやグループ単位で実際に学んだことや調べたことをもとに、パワーポイントを作成しプレゼンテーションを行い意見交換など積極的に行うことができた。また、最初はwordやExcel、パワーポイントなどあまりやったことがない学生も、授業の後半ではそれぞれが習得し発表まで行うことができた。

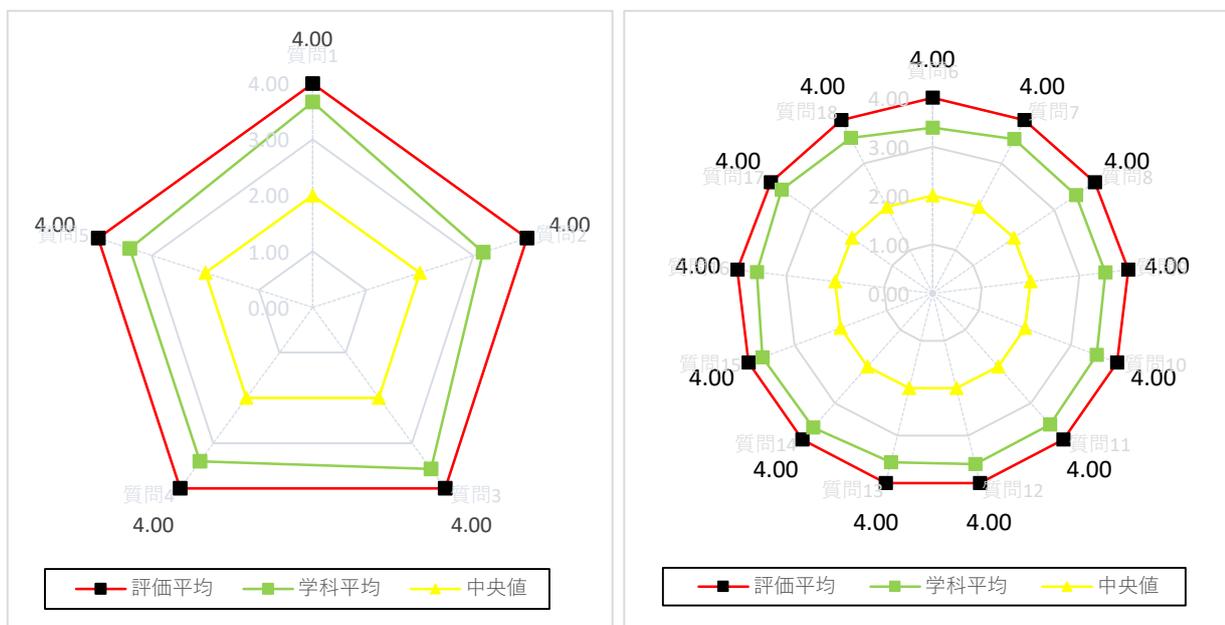
この授業を受講することによって、次の学年に進んでいく過程でレポート作成や卒業研究等でデータを集めたり、分析や考察をするという際に活かされると思料する。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は今年度の取り組みがさらに活かされる方向で、たとえば全体の中で各ゼミの発表なども行うことができれば、さらに学びが深まるのではないかと思料する。また、教員としては学生以上に「データサイエンス」についてしっかりと学び、授業に反映させる必要があるだろう。このことを今後の課題として取り組みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		データサイエンス演習	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

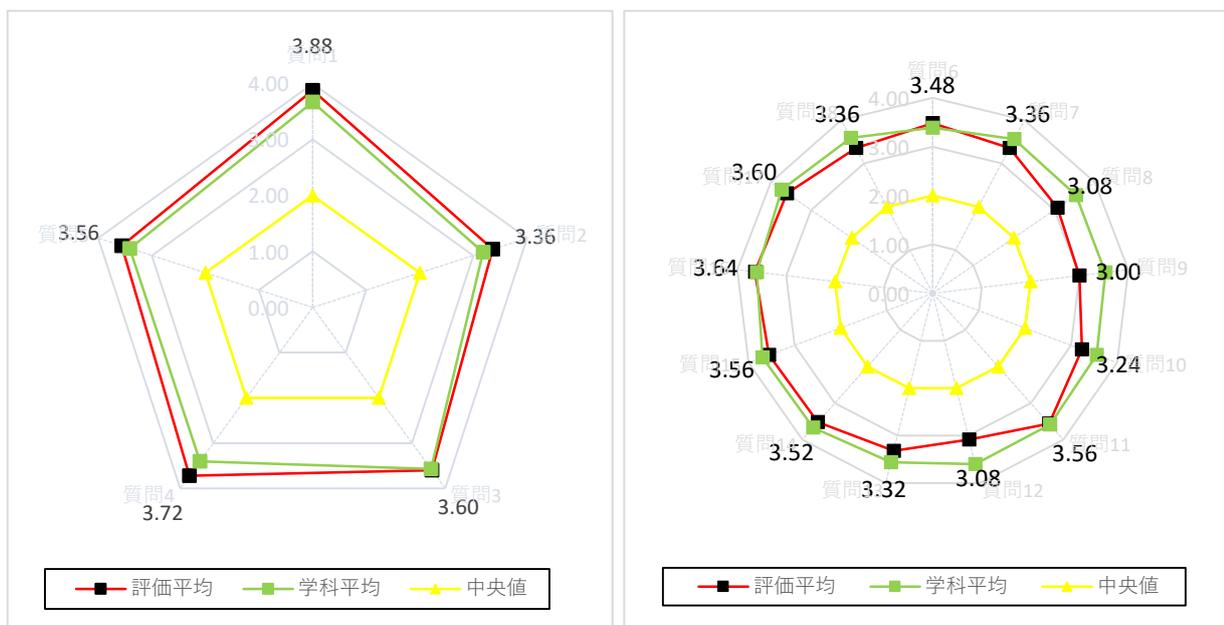
7人中1人が回答した。
 2021年度初めての科目であったが、学生は熱心に授業に臨んだ。また、すべてに協力的で、ほとんど欠席はなかった。Teamsをうまく使って、発表や意見交換ができた。学生間のよい人間関係が授業を円滑に進めた。

(3) 次年度に向けての取り組み

2021年度の経験をもとに、学生同士の良い関係を育みながら授業を進めることが大事である。学生の知識と技能が向上するように教育方法を工夫していきたい。また、学生相互の理解とよい関係の構築について、よく省察して改善していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育原理	98名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

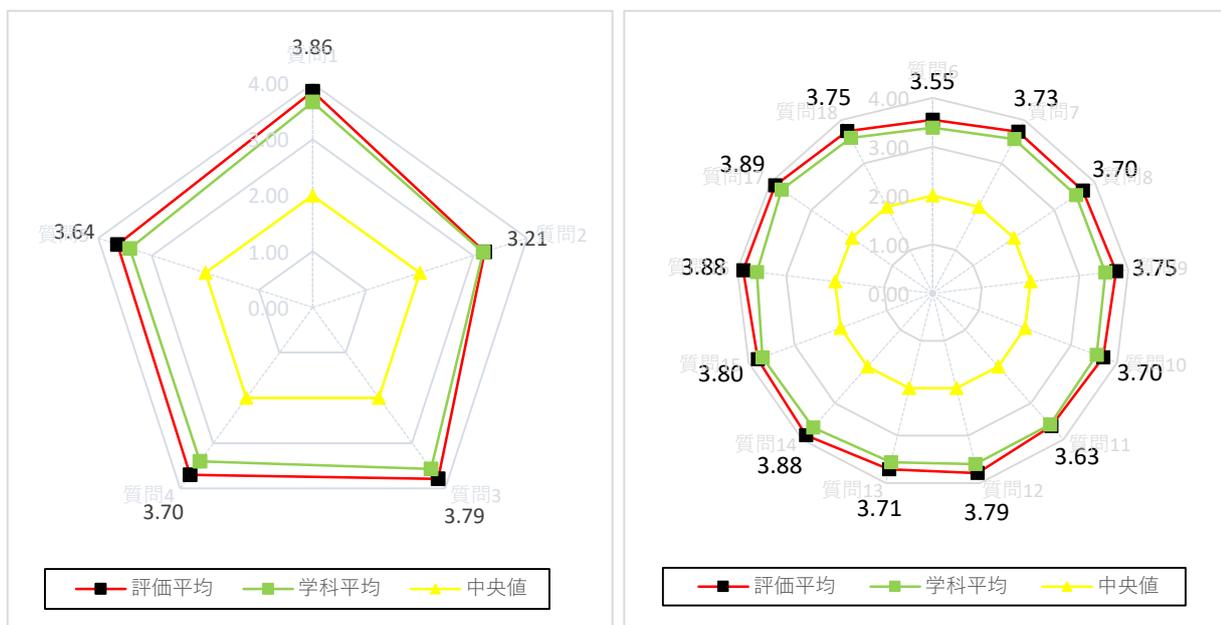
98人中25人が回答した。一方的に教え込む授業を避け、事前学習課題の学習成果を元に授業で学生に返す反転授業に挑戦した。授業後は、事後課題を課した。授業者の解説によって、学生自身の気づきや意見を交流させる疑似討論とし、授業内容のポイントを整理して伝えた。1年生は大学での初めての授業形式ながら、概して、うまく対応できた。学生は、課題を熱心に提出し、その学習態度には目を見張るものがあり、よい学習成果を上げることができた。質問1から5の自己評価の高さが示す通りである。学生からの質問にはすべてTeamsを利用して対応し、もちろん若干のずれ違いなどもあったことも否めないが、だいたいは、丁寧に説明して理解を得ることができた。また、以前から紙媒体で行ってきた自己評価のシステムを、Teamsにより実施した。授業方法や学習観の大きなパラダイム転換を伴うので、オンライン授業という新しい試みの中、学習成果の上がった学生が多い一方、課題が多いことに不満を持つ学生もいたことが分かる。オンラインの場合、授業外でのコミュニケーションがとれないので配慮すべき点が多い。

(3) 次年度に向けての取り組み

2021年度の Teamsが導入された遠隔授業のやり方を踏まえ、一方的に教え込む授業ではなく、反転授業実践への挑戦を進めた。さらに、事前・事後学習や学習の自己評価（形成的アセスメント）を工夫した。前年度に比べ、学生の戸惑いの声はかなり少なくなった。課題提出の期限を厳密にしたが、システム上、うまくいかないこともあった。また、学生の側にもネット環境、システム対応に差がある。授業者の努力ですべて解決するわけではないが、実情を踏まえて、最適な対応に心がけたい。また、学生の受動的な学習姿勢を転換できるように、その重要性を伝えつつ、授業改善に励むことが大事だと思う。次年度は、2年間の遠隔授業の取り組みを振り返り、より良い授業の改革を目指し、多様な観点から深く省察することを心がける。そして、学生の授業に対する意識のイノベーションを起こすことも目指したい。2021年度の反省点をよく検討して次年度に生かしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		発達心理学	102名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

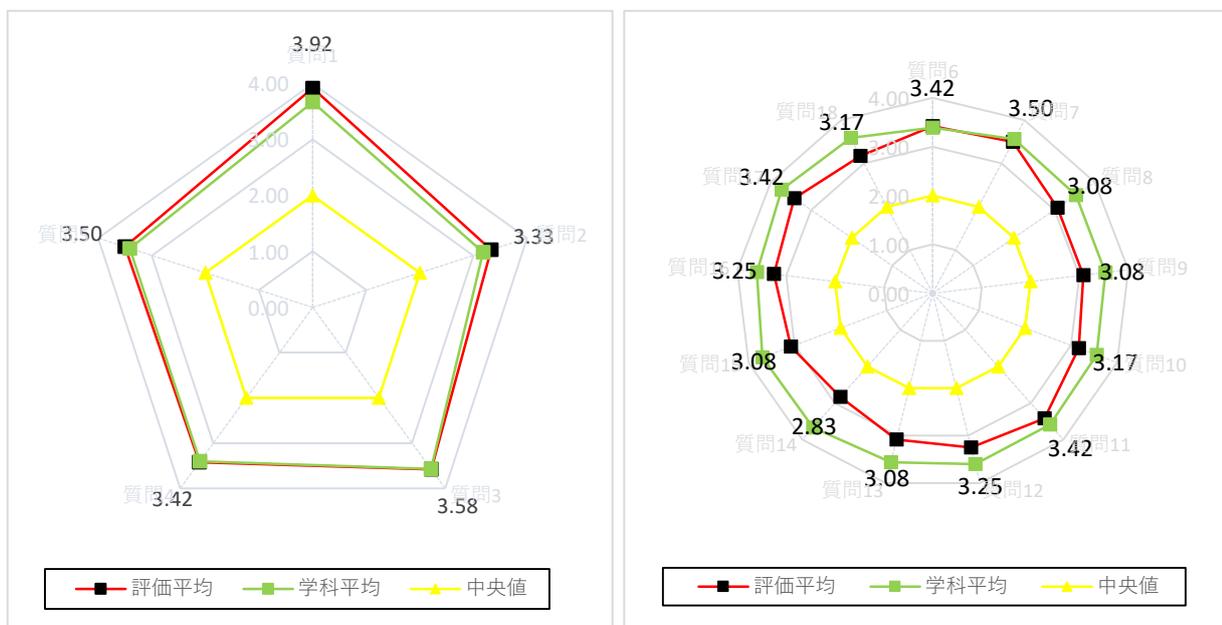
従来の授業評価ではシラバスの説明について低い評価を受けていた。これは常に反省をしてきたところであった。今回の評価では質問6. シラバス（授業計画）について説明がありましたか。この質問に対して、子ども学科平均点3.47であった。私の授業に対しては3.55であった。初めて学科平均を上回った評価を得た。授業初期に心がけてシラバスを説明したことが反映されたものと思われる。今回の授業評価で留意すべき項目は質問11である。質問11. 教科書・配布資料等は役に立ちましたか。この質問に対して学科平均は3.65であった。私の授業には3.63の評価が与えられた。私の授業への評価が低位である。この発達心理学の授業には教科書を使っていない。必要を考えないのでプリントも活用していない。そのための評価と思われる。一方総合評価は、学生の自己評価・総合は学科平均が3.51、対する私の授業には3.64であった。授業評価の総合は学科平均3.61に対して私の授業は3.75であった。両者ともに私の授業の方が高位である。質問11に対する低位の評価は反省すべき事項とは思われない。

(3) 次年度に向けての取り組み

今回の授業評価では敢えて改善を要する事項は見当たらない。一方で質問14. 学生の質問等に誠実に対応しましたか。この質問に対する評価は学科平均が3.65、私の授業への評価は3.88であった。また、質問16. 教員は双方向的なやり取りをしながら授業を行っていましたか。この質問に対する評価は学科平均が3.61、私の授業には3.88の評価がなされている。どちらも0.2を超えて高く評価されている。オンライン授業での学生との相互交流を有する授業の展開にさらなる工夫を凝らしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児教育課程論	63名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

63名中12名が回答した。

2021年度も一方的に教え込む授業を避け、事前学習課題を課し、その学習成果を元に授業で学生に返していく反転授業の形に挑戦した。授業後は、事後課題を提出した。学生同士の討論は、時間的な制約があり、内容の理解が進まないうちは難しすぎると判断し、授業者の解説によって、学生自身の気づきや意見を交錯させる疑似討論とし、授業内容のポイントを整理して伝える形を実践した。しかし、学習の必要性を力説したにもかかわらず、他者の意見を聞くことの意義が理解できない学生がいることを授業評価アンケートで知った。授業者の一方的な話を聞くのが授業だという固定観念、受身の考え方を転換することは思いのほか難しい。

慨して、学生の受講態度は熱心であった。しかし、学生は、事前課題と事後課題をこなさなければならない、それも同日に、「幼児教育方法論」とともに、二つの授業が続くので、かなりの負担感があったことも事実である。授業者としても負担を考えて課題を出したが、こなすことが大変で、課題に追われ続けたという感覚しか残らないようだ。授業アンケートにそれが反映されていた。進度が早いという指摘である。

(3) 次年度に向けての取り組み

2021年度の Teamsが導入された遠隔授業のやり方を踏まえ、一方的に教え込む授業ではなく、反転授業実践への挑戦を進めた。さらに、事前・事後学習や学習の自己評価（形成的アセスメント）を工夫した。

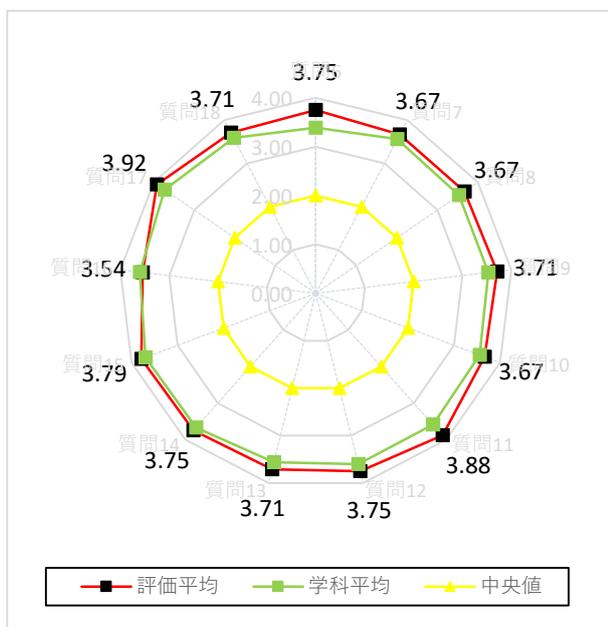
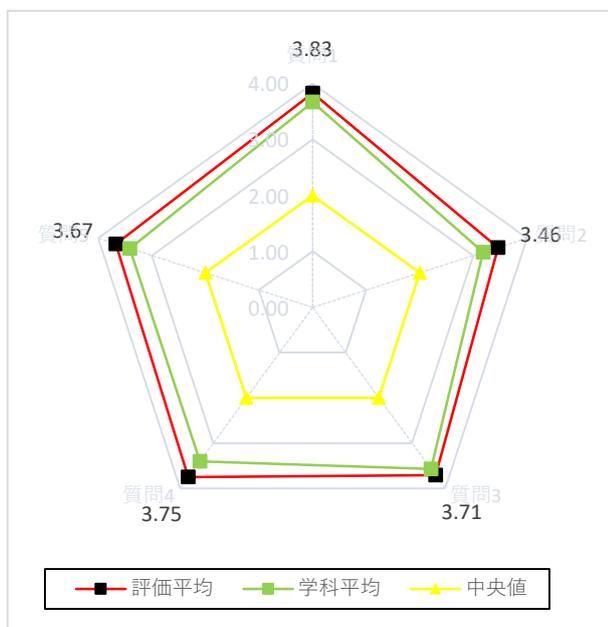
前年度に比べ、学生の戸惑いの声はかなり少なくなった。課題提出の期限を厳密にしたが、システム上、うまくいかないこともあった。また、学生の側にもネット環境、システム対応に差がある。授業者の努力ですべて解決するわけではないが、実情を踏まえて、最適な対応に心がけたい。また、学生の受動的な学習姿勢を転換できるように、その重要性を伝えつつ、授業改善に励むことが大事だと思う。

次年度は、2年間の遠隔授業の取り組みを振り返り、より良い授業の改革を目指し、多様な観点から深く省察することを心がける。そして、学生の授業に対する意識のイノベーションを起こすことも目指したい。

2021年度の反省点をよく検討して次年度に生かしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		特別支援教育総論	98名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

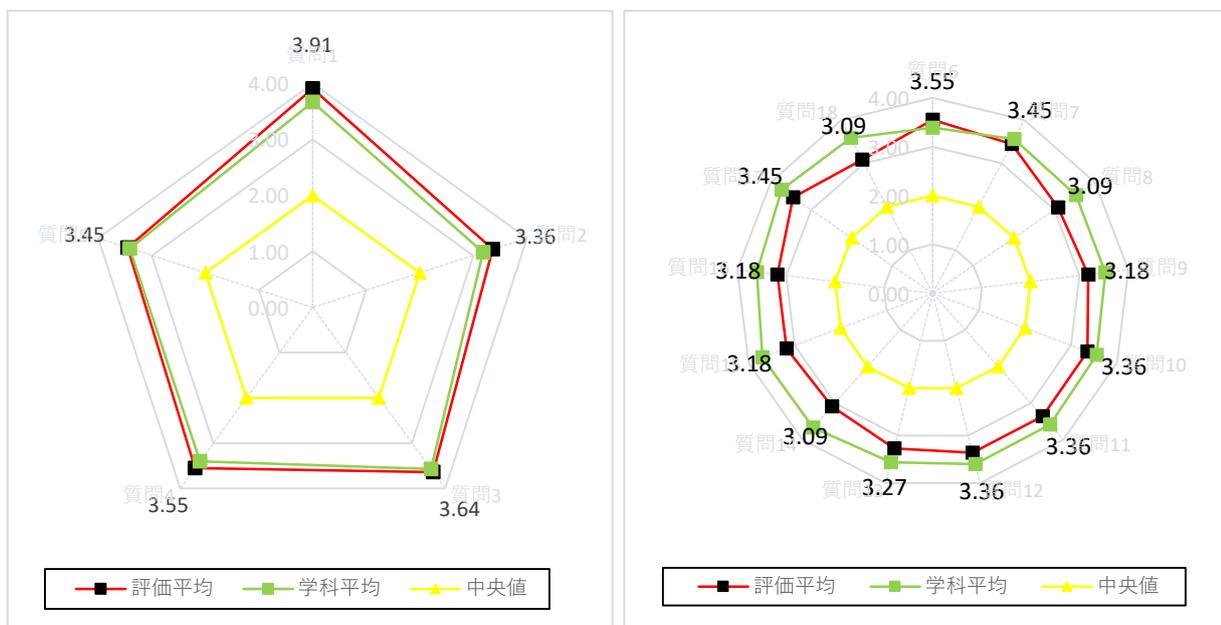
・ほとんどの項目の評価平均が学科平均相当かそれを上回っており、項目間の評価平均のばらつきも非常に少なかった。

(3) 次年度に向けての取り組み

・自由記述には、担当教員の実務家時代の事例の話に興味・関心を持った、わかりやすかった等の意見があった。今後もできるかぎり具体的な事例の提供を行い、できるだけリアリティーのある授業の実施に努めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児教育方法論	62名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

62名中11名が回答した。

幼児教育課程論と同様に、事前学習課題を課し、その学習成果を元に授業で学生に説明して、学習を学生に返して思考をうながす、反転授業に挑戦した。学生同士の討論は、時間的な制約があり、内容の理解が進まないうちは難しすぎると判断し、授業者の解説によって、学生自身の気づきや意見を交錯させる疑似討論とし、授業のポイントを整理して伝える形を実践した。概して、学生の受講態度は熱心であった。しかし、学生は、事前課題と事後課題をこなさなければならず、それも同日に、「幼児教育課程論」とともに、二つの授業が続くので、かなりの負担感があったことも事実である。課題をこなすことに追われ続けたという感覚しか残らないようだ。授業アンケートにそれが反映されていた。進度が早いという指摘である。

なお、アンケートの双方向や質問に答えたなどの設問の意味は学生によりかなり理解が異なる。主体的な学習を促す、授業の意図を伝えることはかなり難しい。授業評価が学生の学びの態度や授業への協力のあり方を問うものになっていないことが残念である。学習者の責任が問題にされる必要がある。

(3) 次年度に向けての取り組み

2021年度の Teamsが導入された遠隔授業のやり方を踏まえ、一方的に教え込む授業ではなく、反転授業実践への挑戦を進めた。さらに、事前・事後学習や学習の自己評価（形成的アセスメント）を工夫した。

前年度に比べ、学生の戸惑いの声はかなり少なくなった。課題提出の期限を厳密にしたが、システム上、うまくいかないこともあった。また、学生の側にもネット環境、システム対応に差がある。授業者の努力ですべて解決するわけではないが、実情を踏まえて、最適な対応に心がけたい。また、学生の受動的な学習姿勢を転換できるように、その重要性を伝えつつ、授業改善に励むことが大事だと思う。

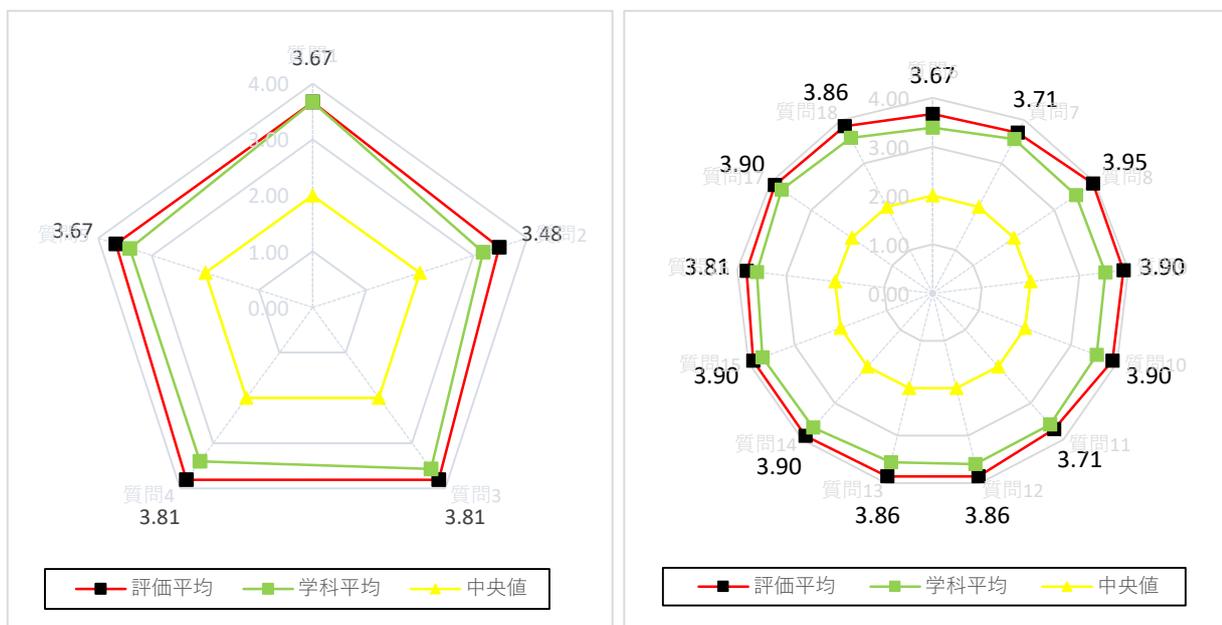
次年度は、2年間の遠隔授業の取り組みを振り返り、より良い授業の改革を目指し、多様な観点から深く省察することを心がける。そして、学生の授業に対する意識のイノベーションを起こすことも目指したい。

2021年度の反省点をよく検討して次年度に生かしたい。

また、幼児教育課程論と同日の二コマ続きの授業での負担感を解消するように時間割を改善するように要望したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児理解の理論と方法	86名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

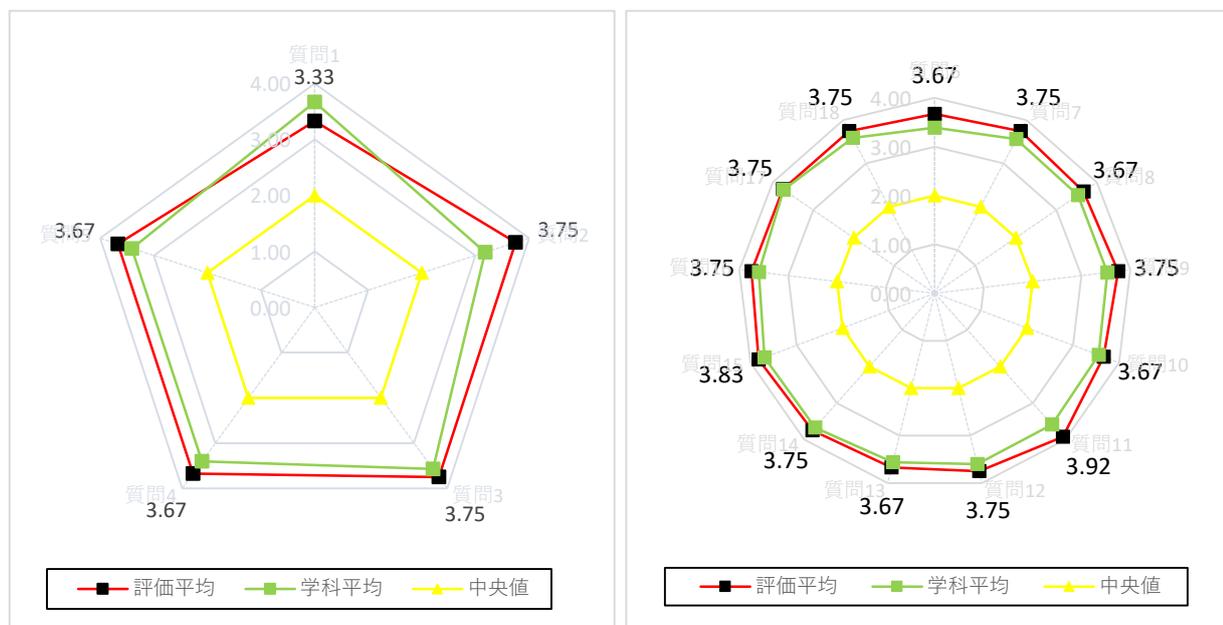
総合評価が3.86である。子ども学科の平均値が3.67である。0.2ポイントほど授業者の評価値が高い。学生の評価は相対的に高いと思われる。各事項の中で6.7の評価が3.67.3.71と他の項目に比べて低い。シラバスと到達目標に関する事項である。授業者としては両者について説明したつもりであるが、学生の記憶に残るほどのものでなかったと思われる。反省すべきである。また、学生の自己評価が相対的に低い。総合評価が3.67である。これについての考察が必要である。このことを否定的にのみとらえることはできない。

(3) 次年度に向けての取り組み

総合評価が学科平均に比し、0.2ポイント高かった。全体的には現状の授業実践でいよいよ考える。シラバスや授業目標についてこれまで以上に留意して、学生に解説することが求められる。また、学生の自己評価について考察を深めることとしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（人間関係）	72名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

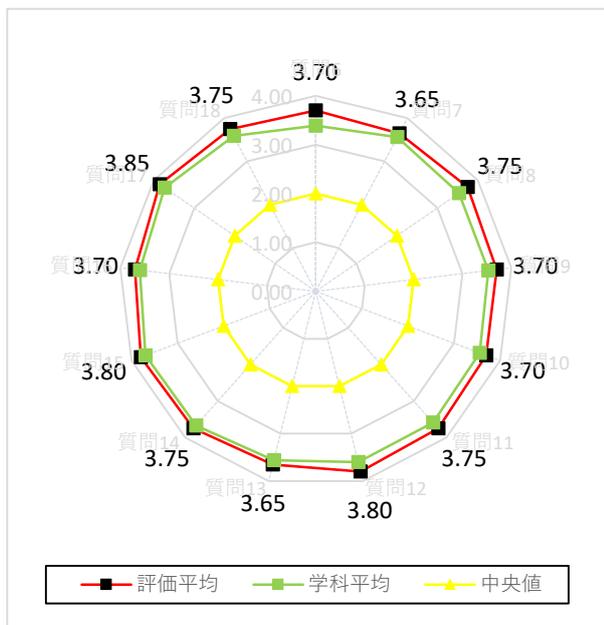
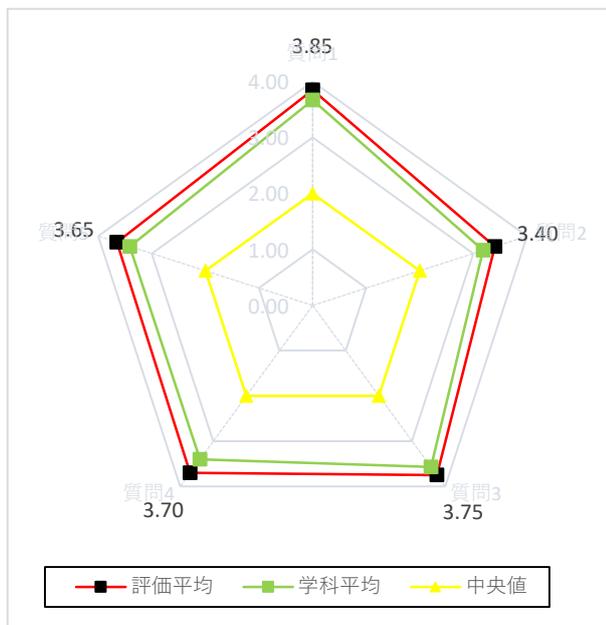
今回は、対面授業を14回、teamsを1回行った。コロナ感染第6波の影響で、最後の学びの集大成の課題を提出するのに現物とデータ可能な方を選択してもらった。実習により3歳児から5歳児までの人とかかわりを実際に学べたので、自己評価が比較的に高かった。自己評価に繋がるのは2点あると考える。①人とかかわりに関する力の保育について自分の考えを深められた事②実習経験エピソードを記述し、仲間で共有し、それをもとに分析した事。授業の分析は、力を入れていた部分の評価が高かった。重要な資料や教科書を活用し、実践的な話を心がけ熱心に問いかけた。授業方法としては学生の参加を重視し、発表する機会や手遊びの発表経験を公平に入れていった。また、授業後に個人の感想を入力したりし、学生の反応を把握していった。ビデオは「人とかかわる力の発達と課題」「子どもを支える保育者の役割」という点で、実際のドキュメンタリーを見ることが出来たが、抽出した場面のみ観ることができた。グラフからは、回答者9名の内、欠席した学生がみられた。授業計画は良く活用し、資料も役に立ったようである。

(3) 次年度に向けての取り組み

内容的なことは毎回の明確な授業到達点を置き、学生の反応を見ながら深める必要がある。伝わるような話術と深まるような問いかけを行い、今後とも授業感想を取りたい。また、人間関係における実習体験を大事にし、子どもの内面をどう捉え、かかわっていくかディスカッションをし、学び合いを深めていきたい。課題は時間の確保である。理解と互いの学びの共有が鍵になるので、毎回発言しやすい雰囲気を作っていく。更には模擬保育における保育実践力の高まりを工夫し、学びのプロセスに繋がるように組み込み、子どもの人との関わりを大事に育てていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容総論	72名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

学生の授業評価については、すべての項目で一定以上の高い評価を得ている。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から対面授業が全く行えず、teamsによるオンライン授業のみの実施となった。teamsの調子が悪く、カメラオンにならなかつたり、出席調査ができなかつたりとトラブルもあったが、teamsのよい面を活かした授業を行うこともできた。

オンライン授業であっても一方通行の授業にならないように一人ひとりからの意見を聴くように努め、カメラオンの状態で手遊びをするなど工夫して行い、学生も積極的に参加することができた。双方向的な授業であるアクティブラーニングを意識して進めたことがこのような評価につながっているのではないだろうか。

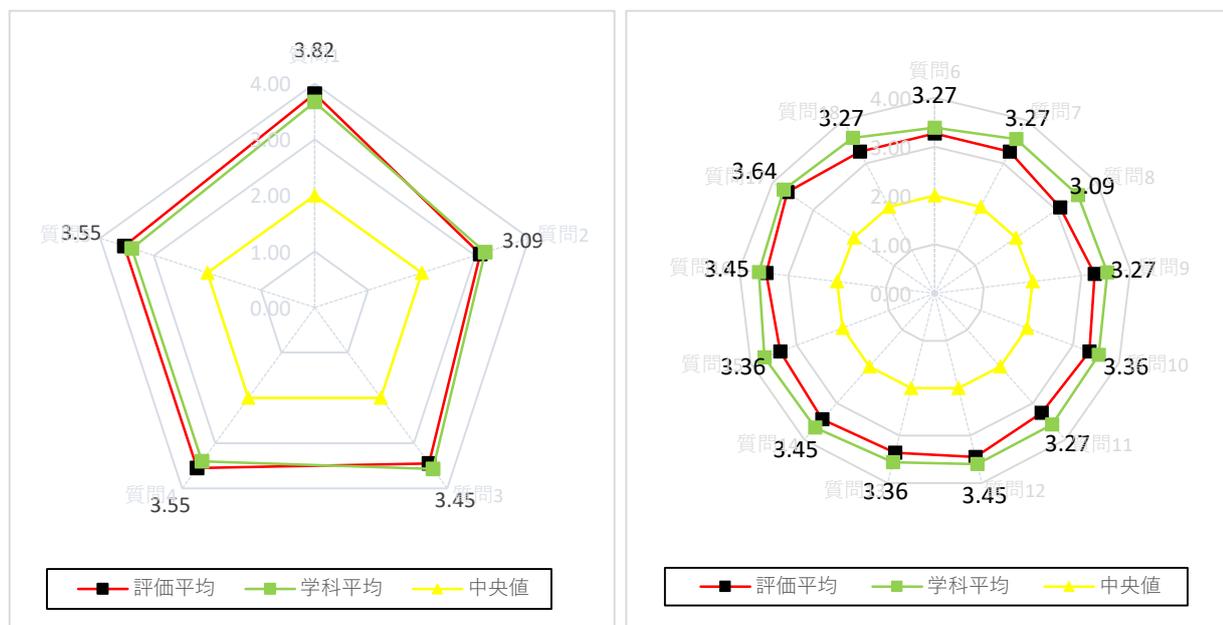
また、本授業は1年次後期の授業である。次年度には初めての実習体験をすることを視野に入れて、学生が子どもの姿や保育所・幼稚園の1日の流れをイメージできるような授業が期待されていると考える。そのため、特に保育現場で求められる「記録」の取り方については実際にワークをとおして重点的に行った。その成果は現場での実習に活かされると期待する。

(3) 次年度に向けての取り組み

令和4年度についても、新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。基本的には今年度と同様の方法で授業を展開したいと考えている。実際に保育現場に実習に出る際に、その成果が発揮されるよう細かくサポートする体制が必要である。今後も、より現場に即した内容の授業ができるよう、teamsの特性を活かし、アクティブラーニングの形で行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育行政学	84名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

84人中11人が回答した。

前期のカリキュラム論に続き、一方的に教え込む授業を避け、事前学習課題を課し、その学習成果を元に授業で学生に返していく反転授業に挑戦した。授業後は、事後課題を提出した。学生同士の討論は、時間的な制約があり、内容の理解を優先したので、授業者の解説によって、学生自身の気づきや意見を交流させる疑似討論とし、授業内容のポイントを整理して伝える形を実践した。全般に、学生の受講態度は熱心であった。前期の授業を経験していることもあり、授業方式にはよくついてきた。順調に流れたと思う。ほとんどの学生が課題をきちんと提出し、よい成績を取ることができた。

授業評価アンケートの結果もまあまあであるが、熱心に授業に参加した学生の評価であったということもできる。本授業は、法規を扱い、理論的な科目なので、実践的な科目よりもずっと精神的に抵抗のある内容である。その観点からすれば、必要な学習を提供できたこと、学生が協力したことに感謝し、喜びを感じる。

(3) 次年度に向けての取り組み

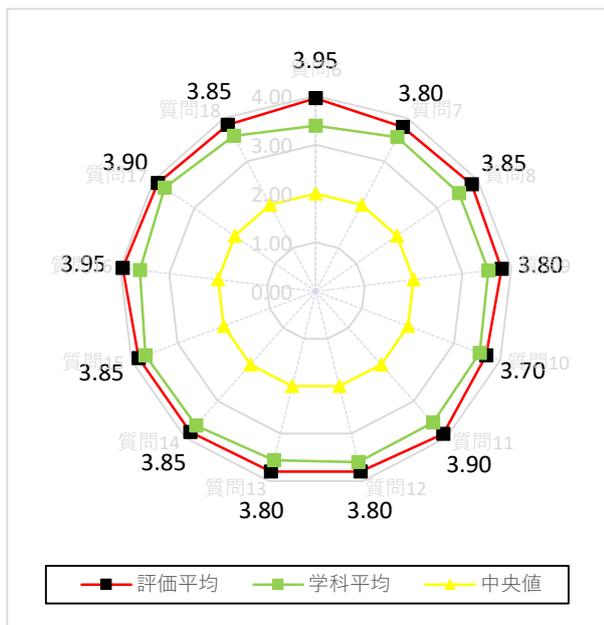
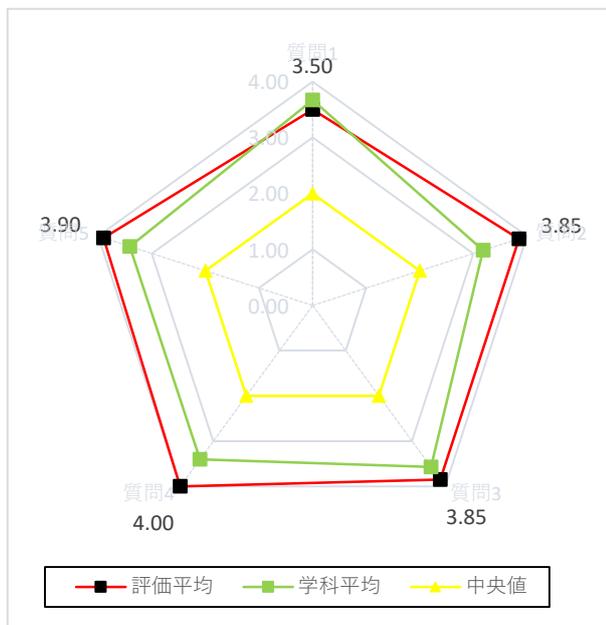
Teamsによる遠隔授業として、一方的に教え込む授業ではなく、反転授業実践への挑戦を進め、事前・事後学習や学習の自己評価（形成的アセスメント）を工夫した。

前年度より学生の戸惑いの声はかなり少なくなった。課題提出の期限を厳密にしたが、システム上うまくいかないこともあった。また、学生の側にもネット環境、システム対応に差がある。授業者の努力ですべて解決するわけではないが、実情を踏まえて、最適な対応に心がけたい。また、学生の受動的な学習姿勢を主体的なものに転換できるように、その重要性を伝えつつ、授業改善に励むことが大事である。

次年度は、2年間の遠隔授業の取り組みを振り返り、より良い授業の改革を目指し、多様な観点から深く省察することを心がける。そして、学生の授業に対する意識のイノベーションを起こすことも目指したい。2021年度の反省点をよく検討して次年度に生かしたい。また、本科目は、上述のように、難解というイメージがつかまとう理論的な科目なので、実践的な科目よりもずっと精神的に抵抗のある内容である。その前提のもとに、学生の学びへの関心が高まるように、より良い授業デザインを求めて再考したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（言葉）	79名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

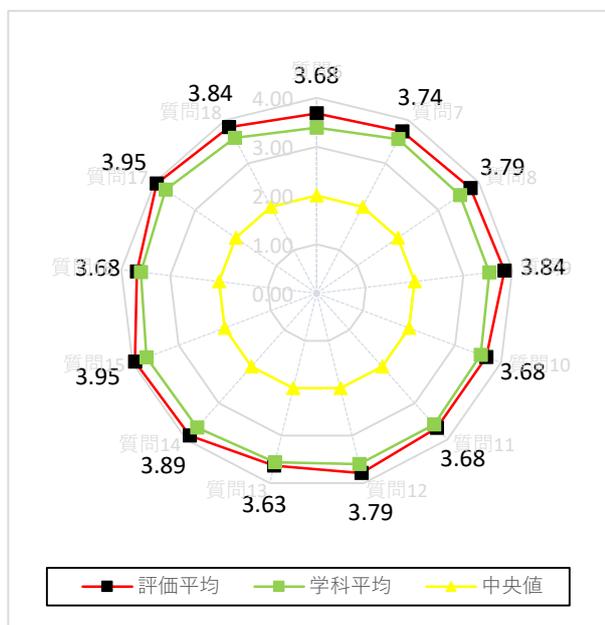
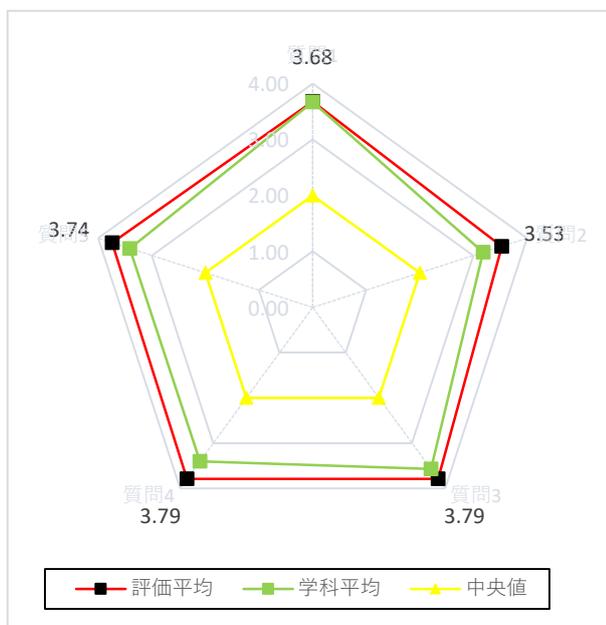
【質問1】以外の全項目において、大変高い評価（因みに、【質問1】は「学生の欠席率である」）が得られた。自分が意図したねらいと受講生のニーズが一致し、効果的な授業が展開できたのではないかと考える。その要因としては、テキストを理解させるために「音読」を取り入れたこと、自分の考えを持たせる場や時間の確保、補助資料の準備、毎時間の自作プリントの作成など、「分かる授業」の実践に努めてきたことが挙げられると思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

本科目は、幼児教育に関する科目であるが、言葉（国語）の力を高めるためには、大変重要な科目であると考えている。小学校及び特別支援学校教諭の免許取得のためにも、是非、必修してほしいものである。次年度は、本科目を担当しないが、受講生のさらなる学びを期待している。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（表現）	70名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

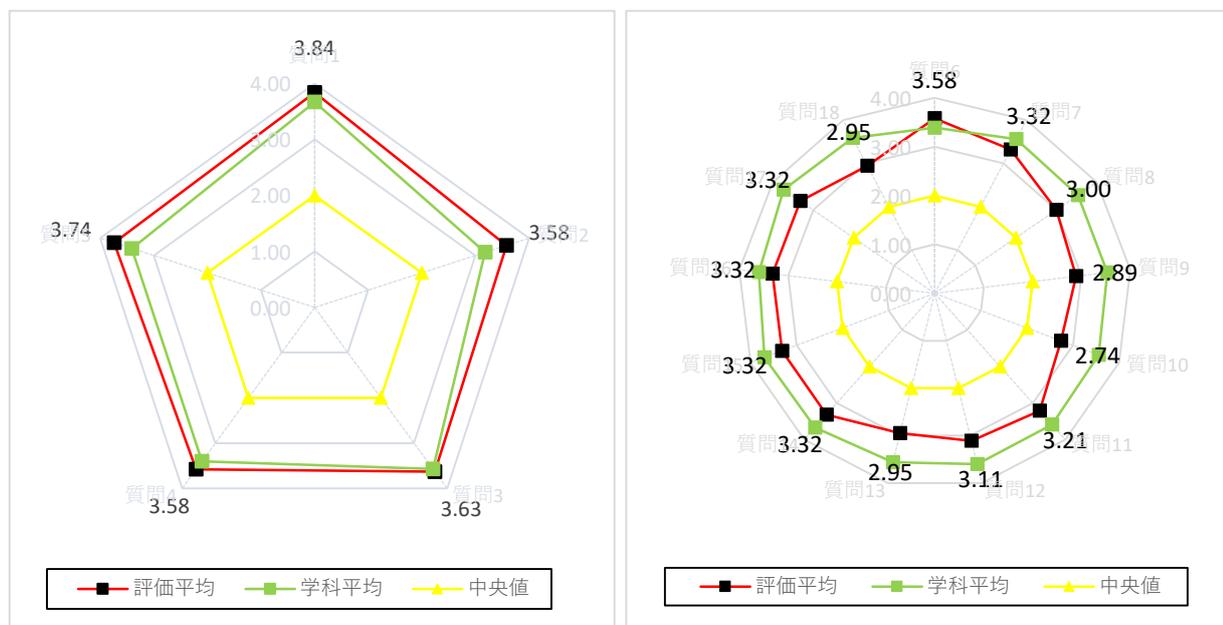
本授業の受講者は保育士や幼稚園教諭を目指している学生たちであることから、保育現場における表現活動に関する意見交換では、毎回かなり活発に発言する姿が見られた。また、本授業では、グループ活動として言語表現、身体表現、音楽表現や造形表現に取り組ませた。それらの課題に取り組む中で、学生たちは他者の考え方や様々な表現があることに目を向ける機会を得ていた。授業の到達目標の明確さ、授業に対する興味や関心、授業内容の分かりやすさといった点における学生たちからの評価は良好であったことから、今年度の授業展開には特段の問題点は無かったと判断できよう。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業開始当初の学生たちの様子を見てみると、他者前で自分が表現体になることに対しては、かなり恥ずかしさを感じてしまう学生たちが多く、それをほねのけて表現していただくことによって得られる気づきがある。次年度も、「実際に様々な表現を試してみる」という体験を通して学習を重ねていくことができるよう、授業の充実を図っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		カリキュラム論	71名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

70人中19人が回答した。

本授業は、一方的に教え込む授業を避け、事前学習課題を課し、その学習成果を元に授業で学生に返していく反転授業に挑戦した。授業後は、事後課題を提出した。学生同士の討論は、時間的な制約があり、内容の理解を優先したため、学生同士の直接的討論の代わりに、授業者の解説によって、学生自身の気づきや意見を交流させる疑似討論とした。またあわせて、授業内容のポイントを整理して伝える形を実践した。全般に、学生の受講態度は熱心であったが、授業方法への戸惑いは当初、かなりあった。自主的な学習の重要性を、授業内容を通して伝えるように工夫し、努力した。その結果、三分の一が過ぎた頃にはある程度理解されたように思う。その後は、授業方式に協力し、よくなっていった。難解な理論的学問の内容にもかかわらず、ほとんどの学生が課題をきちんと提出し、よい成績を取ることができた。

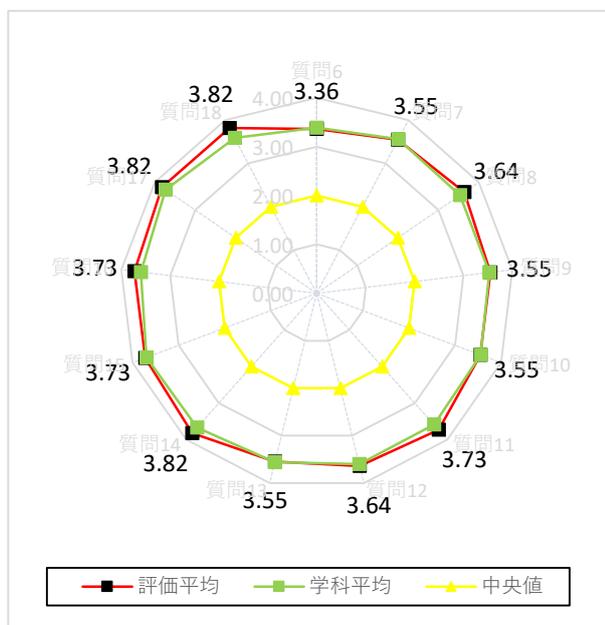
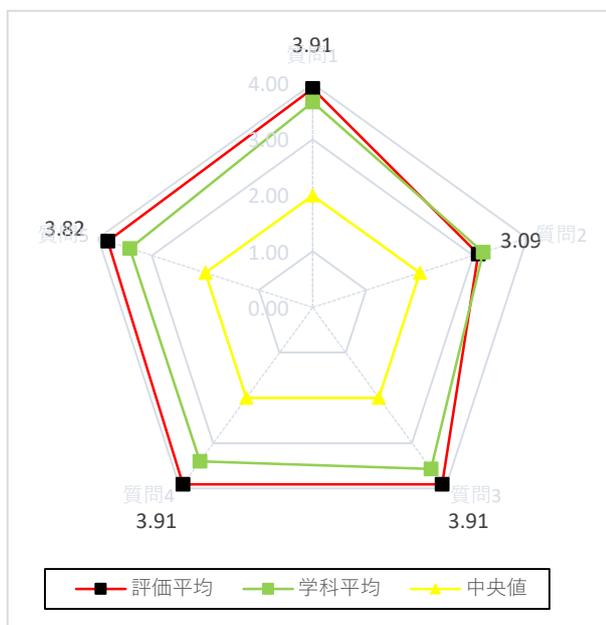
(3) 次年度に向けての取り組み

Teamsによる遠隔授業として、一方的に教え込む授業ではなく、反転授業実践への挑戦を進め、事前・事後学習や学習の自己評価（形成的アセスメント）を工夫した。また、公平性の観点から、課題提出の期限を厳密にしたが、システム上うまくいかないこともあった。学生の側にもネット環境、システム対応に差がある。授業者の努力ですべて解決するわけではないが、実情を踏まえて、最適な対応に心がけたい。さらに、学生の受動的な学習姿勢を主体的なものに転換できるように、その重要性を伝えつつ、授業改善に励むことが大事である。

次年度は、2年間の遠隔授業の取り組みを振り返り、より良い授業の改革を目指し、多様な観点から深く省察することを心がける。2021年度の反省点を次年度に生かしたい。とくに、本科目は、難解というイメージが付きまとう理論科目なので、実践的科目よりも抵抗がある。その前提のもと、学生の学びへの関心が高まるようにより良い授業デザインを求めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育相談の基礎と方法	92名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

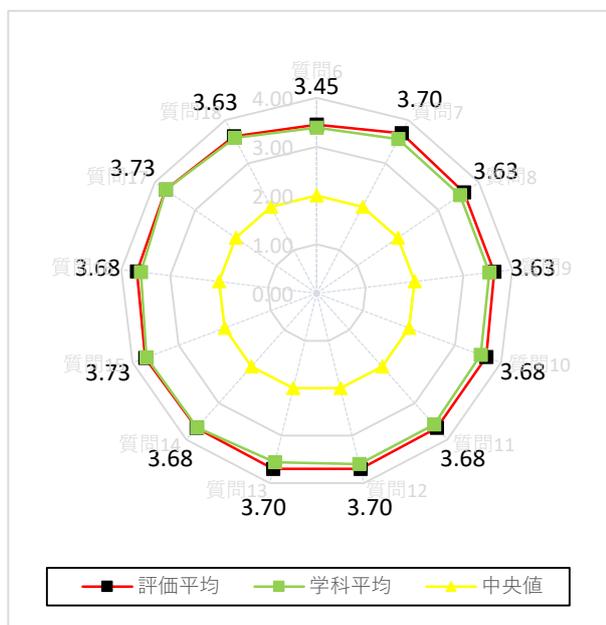
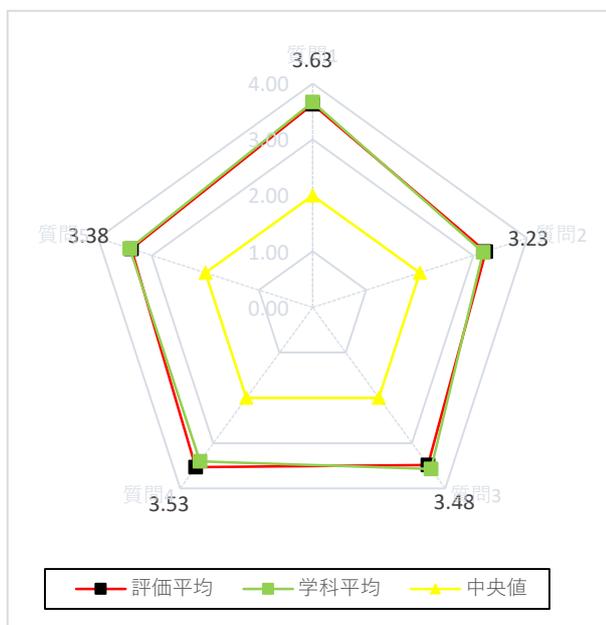
回答者が11名である。受講者92名の12%である。少ない。例年のことである。反省すべきである。1年生の科目は6割を超えた回答率であり、学生の主体的選択が反映された結果と思われる。経年によって回答率が減少している。学生にとっての授業評価の意義を考えるべきか。内容についてである。総合評価が3.82である。学科平均値が3.67であり、これに比べると0.15高い。全体として学生に高く評価されていると考えられる。ただし、6、7、9、10の項目の評価が3.55と低い。シラバスの説明、到達目標の説明に関する事項、授業の分かりやすさ、視聴覚機材、板書の使い方、授業の進む速度に関する事項である。授業者としては、分かりやすさについてかなり工夫をし、速度もかなり考慮し授業を展開してつもりである。しかし、学生からの評価は好ましくない。一層の改善が求められていると考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

回答率の向上を模索すべきである。その前に、学生にとっての授業評価の意味を考察しておく必要がある。シラバス、到達目標の説明については、授業者としては実践しているつもりである。以前よりは評価は高くなったが、より一層のこだわりが求められるということだろう。わかりやすさ、授業の速度、教授すべき内容の精選と合わせてこのことについて考え、改善したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語科指導法	95名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

学生自身の学び方や態度（【質問1】から【質問5】）に関する評価は、全て、学科平均を下回った。一方で、授業者に対する評価は、【質問6】（シラバスの活用）以外の項目で、学科平均を上回った。

本授業は、ほぼ遠隔授業であったので、私自身の授業に対する姿勢や指導技術（とりわけ、ICT機器の操作）について不安であった。しかし、どの項目も昨年度（遠隔授業1年目）よりも伸びており、学生の評価の妥当性・有効性が裏付けられていると考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

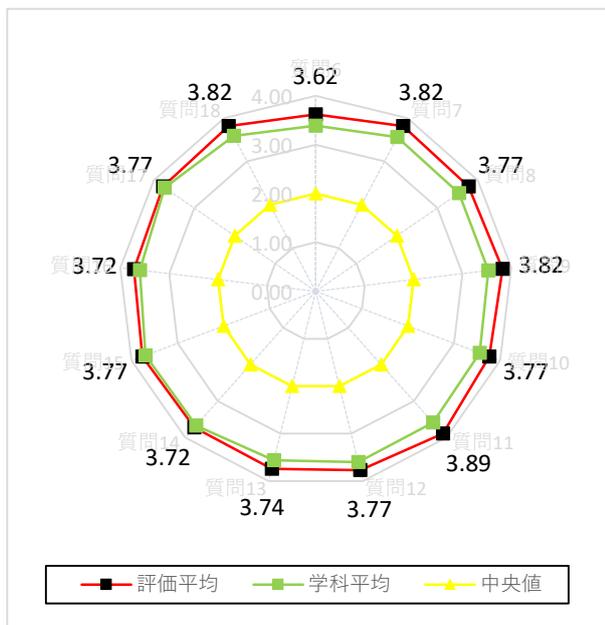
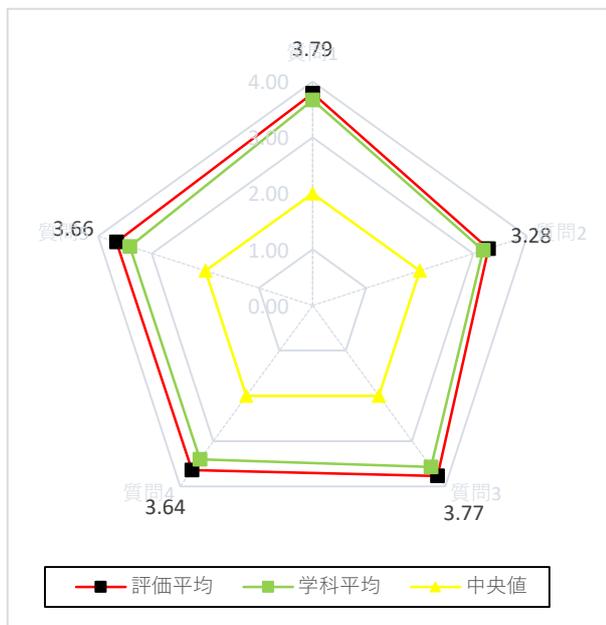
本科目は、この二年間、遠隔授業の形態が主であったが、学生と協力し合いながら、試行錯誤、悪戦苦闘。分かる授業の実践に努めてきた。

個々の学生が私の思いに応じてくれ、私の分からないこと（とりわけ、PCやデジタル機器の使い方など）に対して、数多くの示唆を与えてくれた。今年度で、42年間（小学校37年、大学5年）の教職生活を終えるが、「授業は、教師と学習者が一緒になって作り上げていくものである」ということを、改めて実感することができた。

来年度の本科目受講生の活躍を期待している。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		特別の支援を要する子どもの理解	117名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率52% (61/117)、総合評価3.73

自由記述：

自分自身が体験したことも学べて理解が深くなり、自身にあまりかわりのないことでも丁寧に教えていただき、特別な支援関係のことをより一層学びたいという気持ちが強くなった。

授業だけでは理解できなかったため、資料を残してくれたのは非常に助かりました。

特別支援学級、通級の映像もあったらいいなと思いました。特別支援の先生の経験を色々伝えながら教えてくださって面白かったです！

毎回の資料がとても分かりやすかったです。

この授業は、進むスピードはほかの授業に比べると早かったですが、そのこと以上に資料がしっかりといて内容の細かな説明もしっかりしていたのでとても分かりやすかったです。

本授業の目標は、特別支援教育の理念や課題を踏まえ、特別の支援を要する子どもたちへの支援・指導の在り方についての理解を深めることである。

質問6のシラバスについての説明が3.62と最も低かった。

質問11の教科書・配布資料のわかりやすさが3.82と最も高かった。

(3) 次年度に向けての取り組み

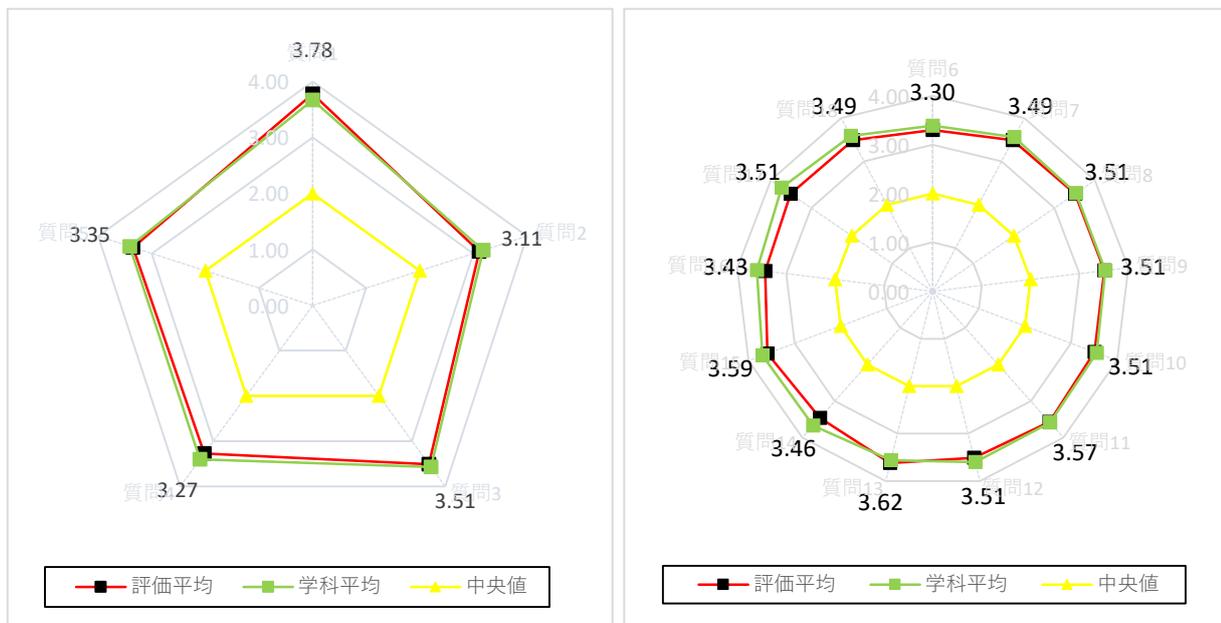
配布資料が分かりやすかったという意見が多く、今後も活用したい。

スピードが速いと感じた学生もいたため、内容を精査する必要がある。

シラバスは授業のはじめのみ提示したため、毎回提示する必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会科指導法	93名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

アンケート回答者が、93名中37名と少ないため、参考程度として理解する必要がある。ほぼ学科平均と変わらない結果であった。

自由記述については、5名しか記入が無かった。肯定3名、否定2名であった。

「資料を上手く活用できていた。」、「社会の授業では佐賀県の現状や過去の状態について知ることができた。まだ自分はどこに就職するのか決めていないが、この講義で学んだことは必ず生かしていきたい。」、「課題に対してしっかりと返答されていたため、何がだめかなどが分かりやすかった」が、肯定的な記述である。

「他県からのサイトも多い中佐賀県で働く教員だけを育てる授業でいいのかと思った。また、シラバスと実際の評価が全く違うため単位を落とした人が多くいた。全員の成績を見直すべきだと思う。」、「授業のほとんどが前回の復習に当てられていたように感じます。そのため今までの授業の内容はしっかり解説があったので理解できていますが、15回目の授業の内容は解説がないのできちんと理解できているのか少し不安になります。」が、否定的な記述（同一学生）である。シラバス変更はコロナによる遠隔授業に伴うものであり批判は当たらない。

(3) 次年度に向けての取り組み

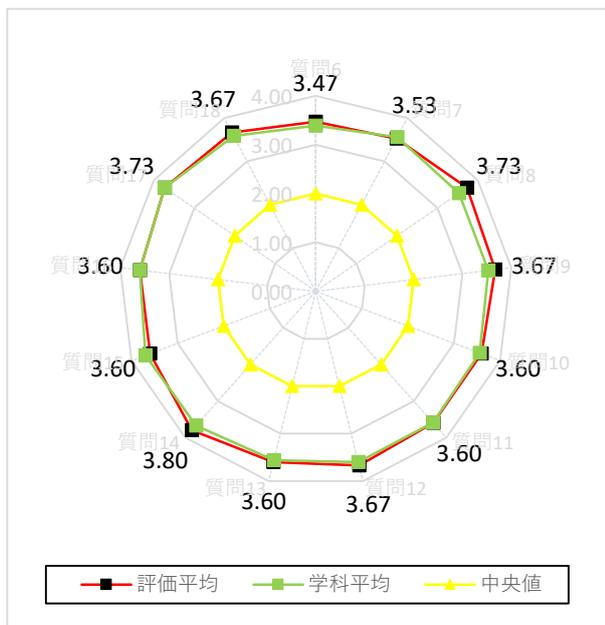
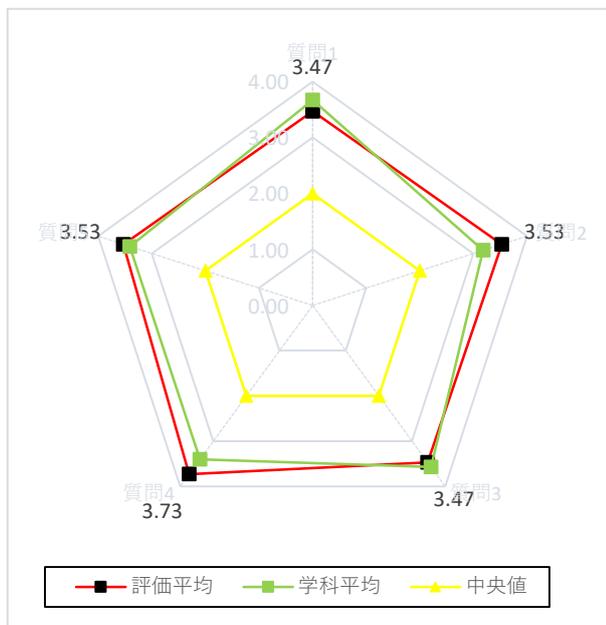
2021年度は、2020年度と同様、コロナにより定期試験ができず、全て遠隔授業となったため、かなり授業内容や資料をシンプルにしつつ、実践論文の読解、指導案の読解、評価過程の読解などに偏った。かなり高度な課題を課し、厳しく評価し、次時において詳細な解説を行なった。

結果的に、理解が不十分な学生は「欠点」となり、再試験（指導案作成）を行なったが、やはり一部の読解力を欠く学生は、改善が見られなかった。Teamsで文章による指導の限界を感じた。

2022年度は、対面授業となったので、再履修の学生に対しては、きめ細かく指導をしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽科指導法	93名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

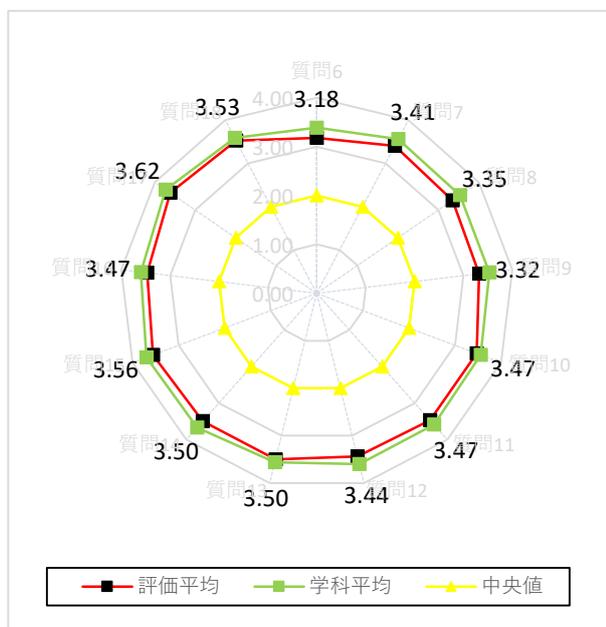
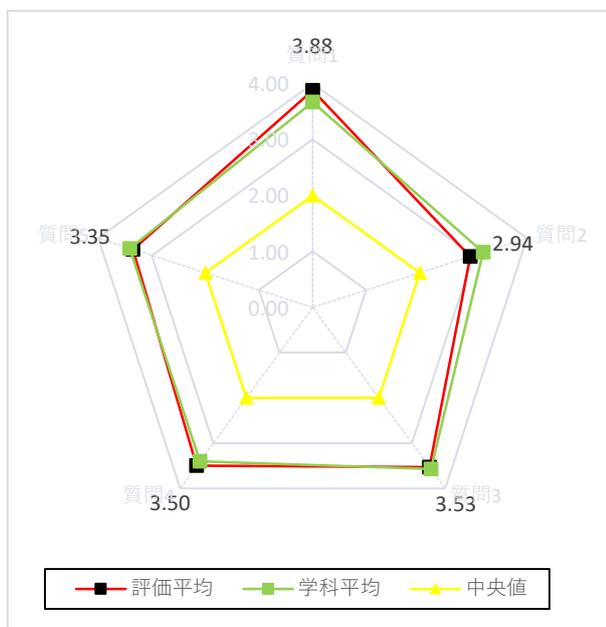
学生たちの授業態度は、おおむね良好であった。授業開始当初は対面で授業を行っていたが、急遽、コロナ対応の為に遠隔での授業に切り替えなければならなくなった。音楽を扱う授業では、実際に歌ったり楽器を奏でたりしながら、他者が奏でる音楽を生で聞くことが欠かせない。その点においては、コロナ禍の中での本授業の実施は、とても困難な状況を乗り越えたものであった。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度の授業は遠隔ではなく、対面で進めることができるようになることを期待している。学生たちには実際に音や音楽に触れさせながら、授業内容の理解の深化を図りたいものである。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		知的障害者の心理・生理・病理	78名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率 43% (34/78)、総合評価 3.45

自由記述：

資料書き込み型にするのはいいですけど、印刷できない人もいることを考えてほしかったです。印刷機がないので、やりずらくて仕方なかったです。学費も払っているわけだし、資料は直接配布にしてほしいです。しかし、最終レポートの提出を郵送でも可能にしてくださって、とてもありがたかったです。知的障害者についての知識を得ることができたのは、免許取得する上でとても大切なことだと思う。また応急処置について学ぶこともできたので、次は実践できるようにしておきたい。

前半・後半とともに支援の必要性や障害になる病気・身体の構造の医療的な知識を学ぶことができた。

一人一人の質問に丁寧に答えていたのでより深く理解することができた。

2人の先生の授業を全部で15回だけでは少ないと感じた。

本授業は、知的障害心理に関する基礎知識や、心理機能と発達支援、知的障害児(者)に対する心理検査やアセスメントについて理解することを目的とした。

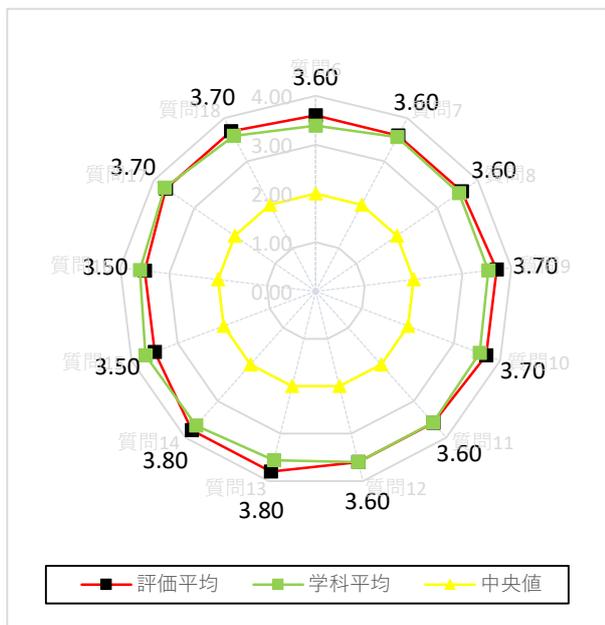
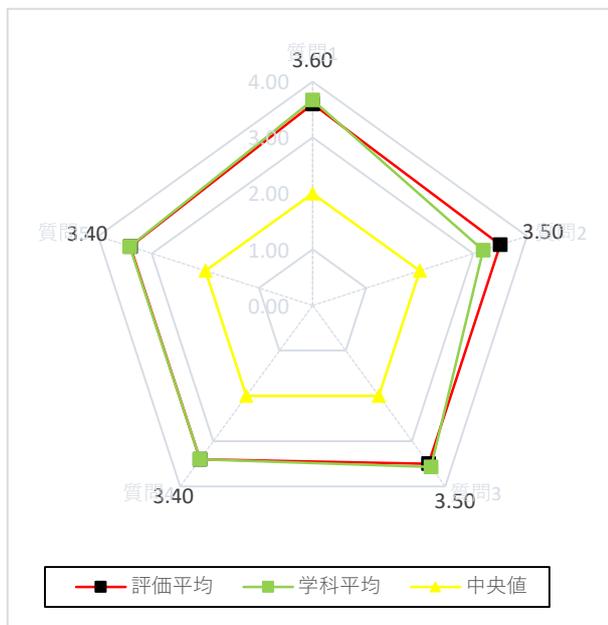
質問6~18の評価については、3.18~3.62の範囲であり、昨年度の評価より低い結果となった。

(3) 次年度に向けての取り組み

オムニバス形式の授業のため、評価についての分析には課題がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		知的障害者教育	68名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

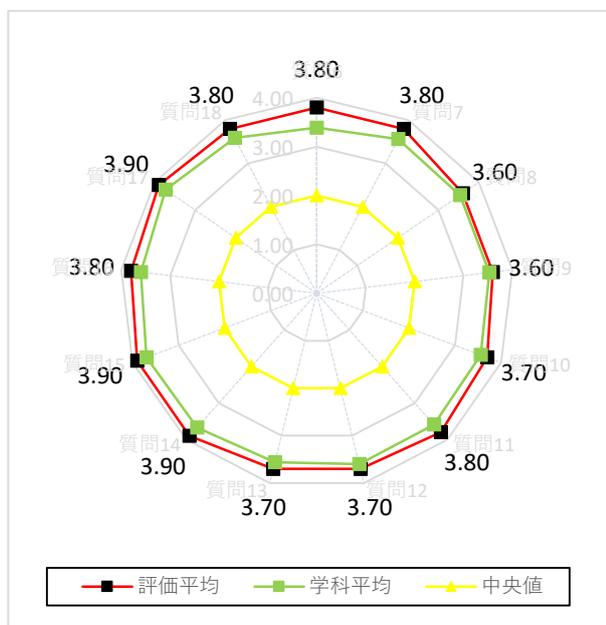
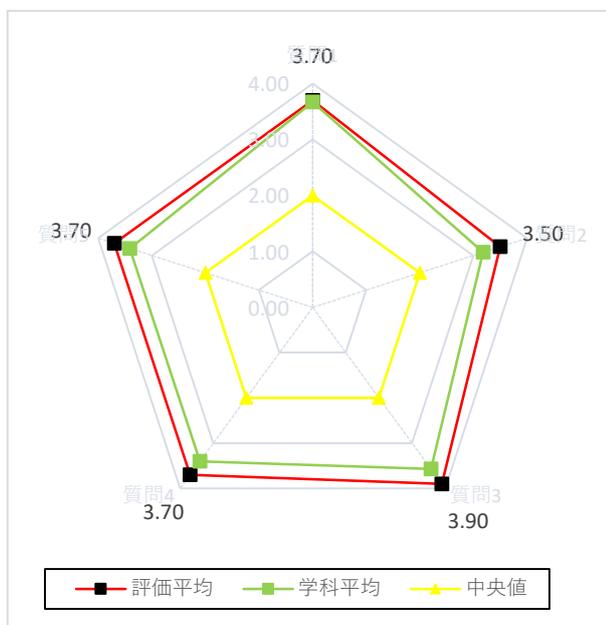
・すべての評価項目で、評価平均が学科平均と同水準であった。評価項目間の値のばらつきもほとんど見られなかった。

(3) 次年度に向けての取り組み

・自由記述の中に配布資料が多くわかりにくかった、授業中のグループ分けを学生主体にした方がよい、といった意見があった。配布資料については必要なものを配布しているので、活用方法についての説明を加えていく。グループ分けの方法についても工夫の余地がないか検討する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		肢体不自由者教育	30名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

評価平均が3.76と学科平均よりすべての項目で高かった。

teamsでの遠隔授業で行ったため、内容が講義形式になってしまった。質問をしながら、授業を進めていったが、グループでの話し合いの時間や学生からのプレゼン等できなかった。

毎回課題を提出させ、次の授業で回答を確認しながら定着を図った。課題は14回すべての授業でだし、最後の授業で、レポート課題としてテスト代わりに提出させた。評価は修行への参加度と課題の提出、レポート課題によって、総合的に評価した。

この科目は、実際の指導場面等を見学させて考えることも必要であるが、コロナの関係で困難であった。

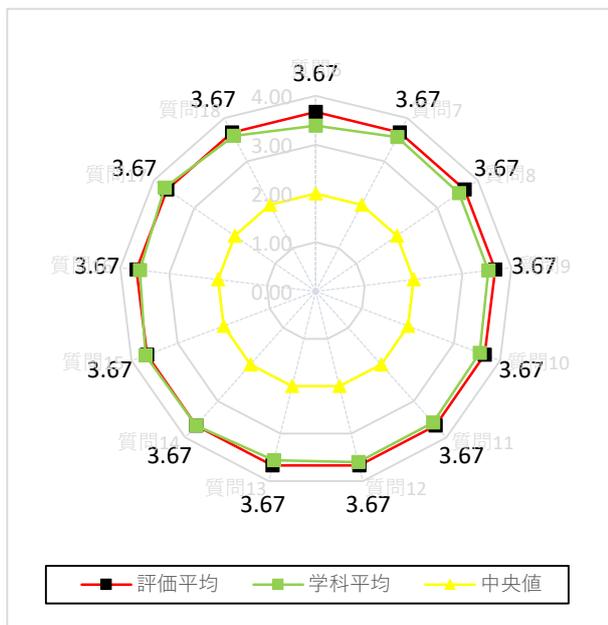
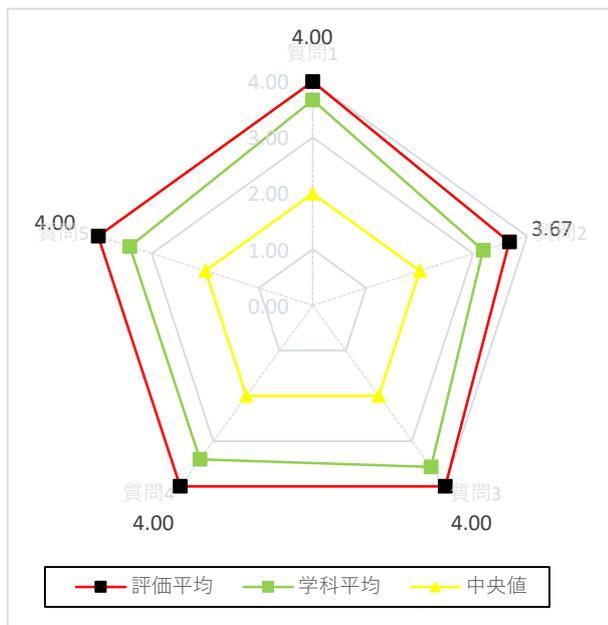
(3) 次年度に向けての取り組み

実際に肢体不自由の特別支援学校での授業場面等を見学して、指導方法等を理解させたいが、コロナの関係で、学校見学等は困難だと考える。

そのため、DVD（肢体不自由の特別支援学校の授業の様子）を視聴させながら、授業を分析的に考えるような指導を検討したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		肢体不自由者教育の理論と実際	29名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

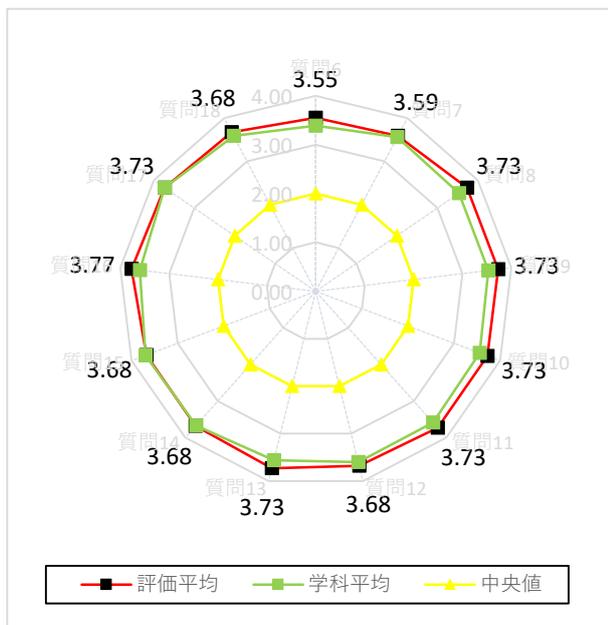
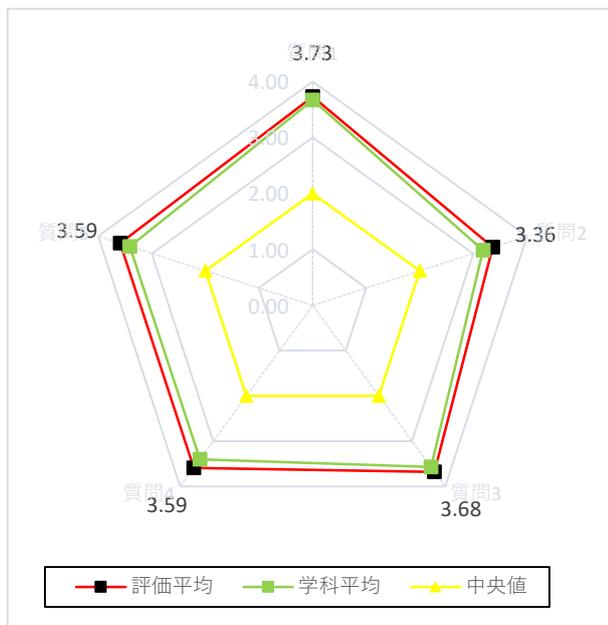
- ・ 29名中3名の回答であり、分析するのは難しい。オムニバスによる授業（後半は夏季休業中の集中講義）の場合、授業評価アンケートをどう徹底させるかが課題である。
- ・ 前半は理論的な内容を対面授業で、後半は実技・実習指導をオンデマンド授業になってしまった。コロナの関係でやむをえないと思うが、ただ、動画を配信していただいたので、その動画を見ながら自分で実技を行っていたようである。

(3) 次年度に向けての取り組み

この授業は実技も含めているので対面での授業が必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子どもの理解と援助	52名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

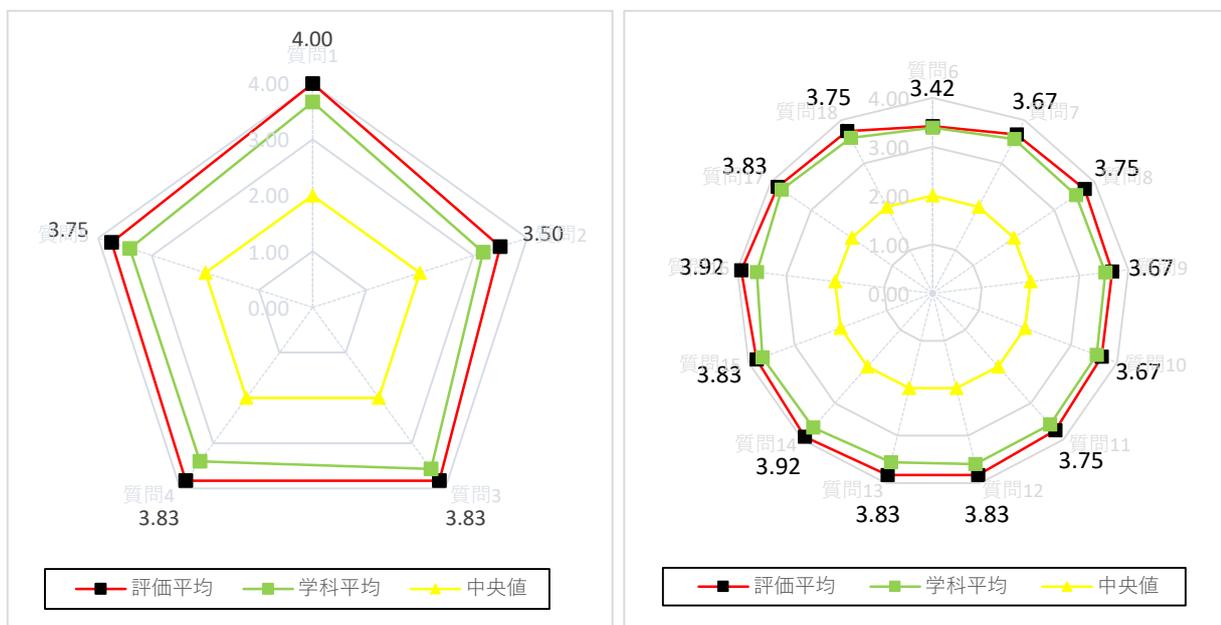
本授業の回答率42%であった。52人受講して、22人が授業評価に回答している。一方別の私の担当科である「発達心理学」は回答率55%であった。102人受講して56人が回答している。回答率に明らかな差が出ている。「子どもの理解と援助」は子ども学科の2年生が主な受講対象である。「発達心理学」は1年生である。学年の違いが回答率に現れてものと思われる。後期には「教育相談の基礎と方法」を担当している。この授業評価の回答率はより低位になると予想される。受講者が3年生だからである。学年を経るに従い、大学から求められる回答に自主的な判断を下していることの反映と思われる。この状況をどうとらえるか。この回答率の低下は授業評価の評価自体にも反映されると理解すべきことのように考えている。今回の「子どもの理解と援助」に対する評価と「発達心理学」への評価は、各項目間の評価傾向は両者は類似している。分析は「発達心理学」と同一となる。学年を経るに従い、大学から求められる回答に自主的な判断を下していることと授業評価の関連、このことへの問題意識を今回の分析と評価に代える。

(3) 次年度に向けての取り組み

質問16の双方向の授業展開への評価は学科平均が3.61に対して、私の授業には3.77との評価を受けている。「発達心理学」同様に、他の項目に比しより高く評価された結果となった。オンライン授業の展開に「双方向の展開」をいかに組み入れ、これにより学生の学習意欲と関心を高め、より良い学びにつなげる工夫を考えていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		乳児保育 I	36名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

近年の保育所等における3歳未満児の子どもの就園率が高くなり、それに伴って乳児保育の重要性が指摘されている。令和3年度から「乳児保育」が「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」に分けられ、Ⅰは主に概論、Ⅱは実践の形式で行われた。Ⅱについては保育現場経験が豊富な教員が担当し、Ⅰの概論について担当した。たまたま4限に「乳児保育Ⅱ」が対面授業の形で行われ、対象学生が同じであったため、5限に「乳児保育Ⅰ」を対面形式で行った。テキストを用いながら、配布資料等も適切に準備し、状況に応じて視聴覚教材も使用しながら進めた。

学生からの授業評価については質問6のシラバスについての説明に関する点がやや低い評価となっているが、他の項目については一定以上の評価を得ている。シラバスについては次年度以降さらにしっかりと押さえ、学生に示していきたい。

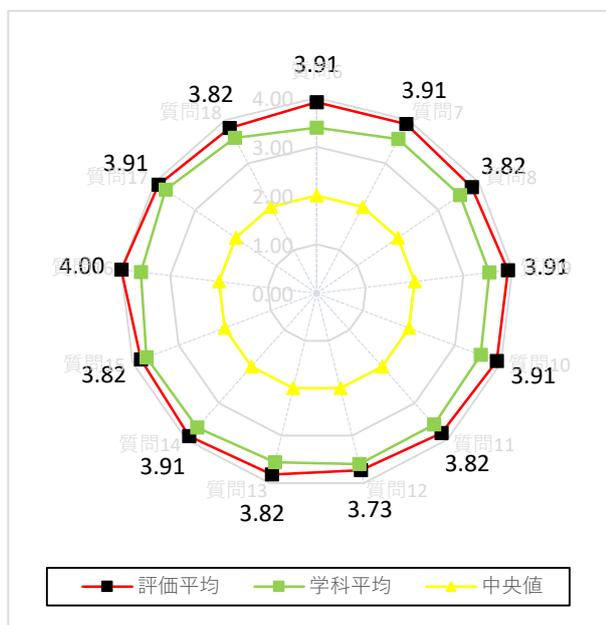
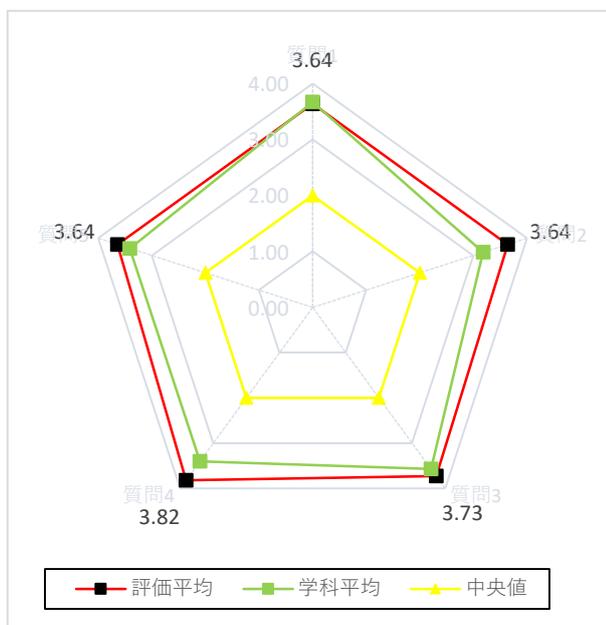
(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は「乳児保育Ⅱ」の授業担当者が保育現場経験が非常に豊富な教員に替わるため、できるだけ情報を共有しながら学ばせていただくつもりである。学生が保育現場の実習等で乳児についてしっかりと学んだ状態で臨めるような深い学びが必要である。

また、シラバスについては今年度の反省点であるため、しっかりと学生に示した上で授業を行うよう努力したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		障害児保育	49名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率22% (11/48)、総合評価3.82

自由記述：

配布資料はもっとまとめて欲しかった。

特に専門的な科目で難しいなと感じることもあったが全授業学ぶことが多くて楽しく受けれたワークシートなどの事例への取り組みで、みんなの考えがすぐにわかるところがとても楽しかった。

みんなが見えるところに送信し、その意見に対して反応が返ってこないときは、自分にあまり自信がない私にとっては少し心がもやもやしました。全員に反応を返すことは時間的にも先生の精神的にも大変だと思いますので、今は思いつかないのですが他の方法はないだろうかと考えました。一個人の感想で、私が自分に自信を持てば解決する話ではありますが、この意見を送信したいと思います。

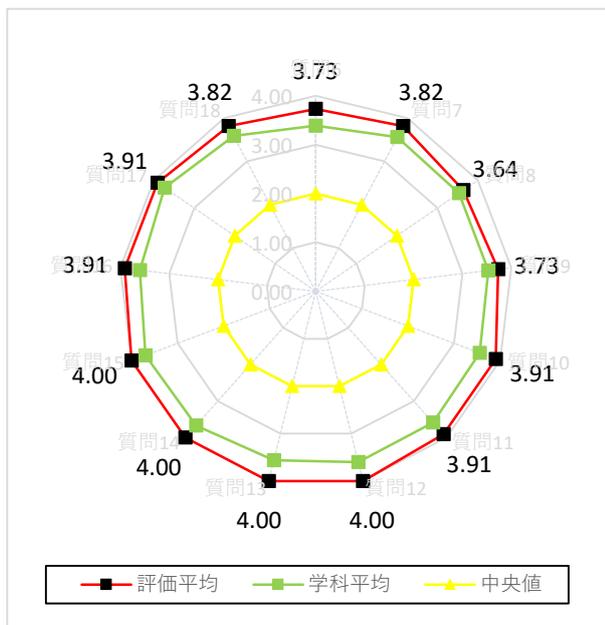
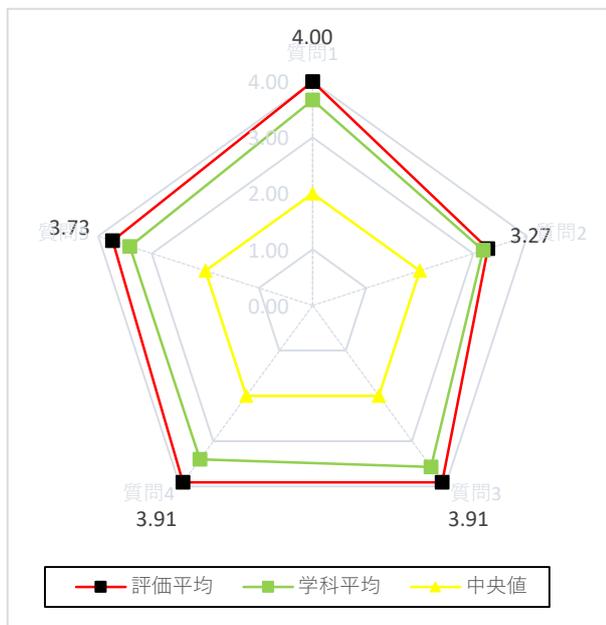
質問6～18について、3.73～4.00と高い評価を得た。特に16の双方向的なやり取りについて4.0であった。やり取りの中で、自分の意見を取り上げられなかった際に不満がある学生がおり、対応の難しさを感じた。

(3) 次年度に向けての取り組み

双方向的なやり取りの評価が高かったものの、自分の意見を紹介されなかった場合の不満感があった。双方向のやり取りの際に、まんべんなく意見を拾うようにしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅱ（保育所）	40名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習Ⅱでは、保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各保育所の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観や倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

本年度は昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、実習を断られるケースは少なかったもののPCR検査やワクチン接種を条件とする受け入れが多かった。また、受け入れ先の保育所でコロナ感染者が発生し、実習時期が大きく変更されるケースも散見された。しかしながら、実習を希望する学生の全員が実習を終了することができた。学生にとっても不安を感じながらの実習であったが、実習をさせていただけることに感謝の気持ちが大きく、その気持ちをもって行動することができた。この評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価をしたものであるが、質問内容が実習そのものにはあまりそぐわない内容ではあるものの、おおむね一定以上の評価をしている。

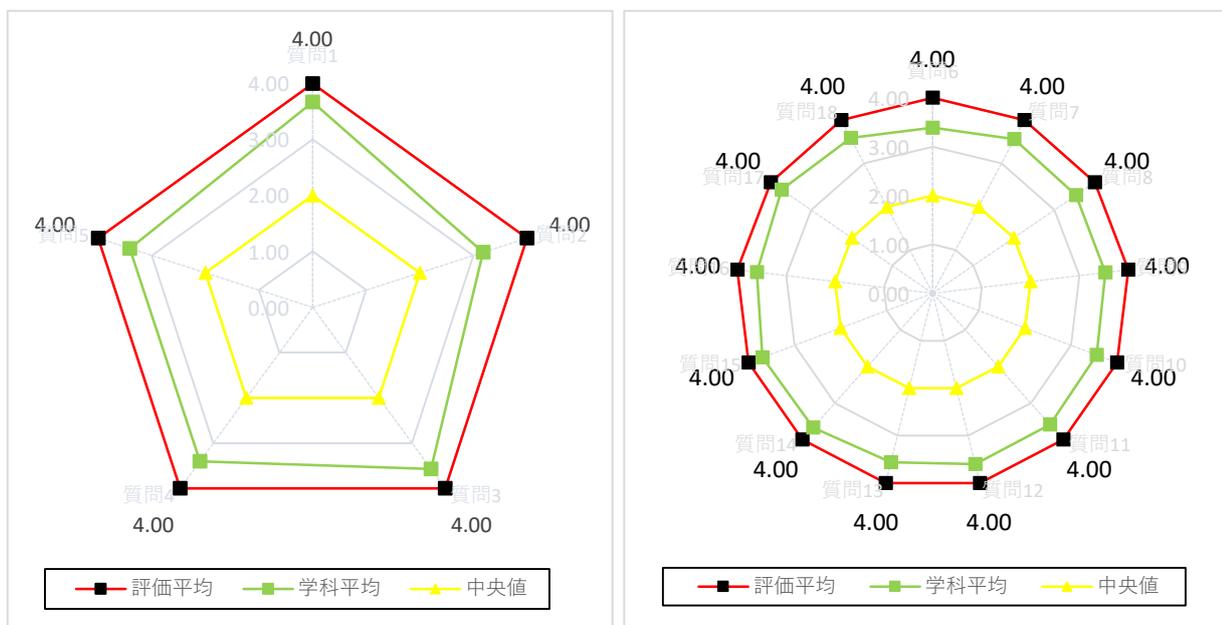
(3) 次年度に向けての取り組み

令和4年度も、新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。実習担当者として臨機応変に対応できるよう心がけたい。保育実習Ⅱは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定めるうえでも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解やその実践についての学習、さらには、さまざまな社会資源との連携の実践などについても学習することが求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、令和4年度は実習園ともさらに連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立して行けるよう、サポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅲ（施設）	2名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習Ⅲでは、保育実習Ⅰ（施設）における経験と自らの課題を踏まえ、各施設の特性や一人ひとりの利用者の実態、保護者の状況、各社会資源との連携等について理解し、利用者に対する適切な支援を行うことが目標になっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観・倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

本年度は昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のため時期の変更やPCR検査、ワクチン接種を求められることに対してなど臨機応変な対応が必要であった。そのような中であつたが、学生は感謝して実習に臨むという気持ちが強く、授業評価が高いことにつながっていると考えられる。

仕上げの実習として、大学において振り返りを行い、課題や問題点を解決し、社会に出ていけるよう各自が努力していくこと、さらには教員としてそれをサポートしていくことが必要であると考えられる。

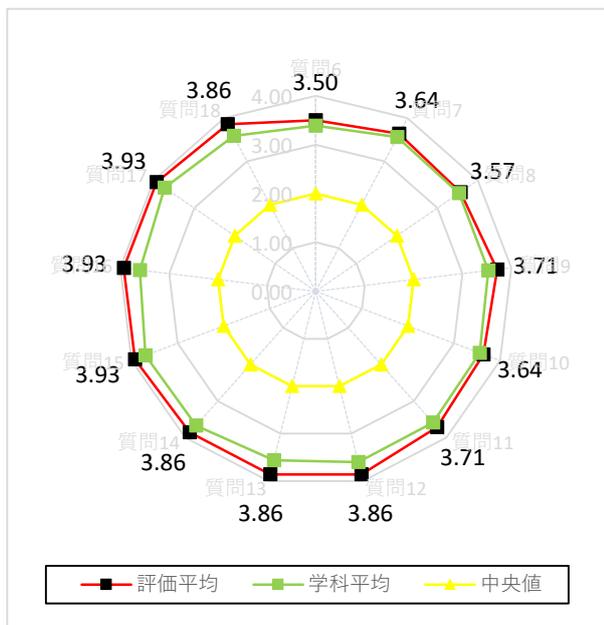
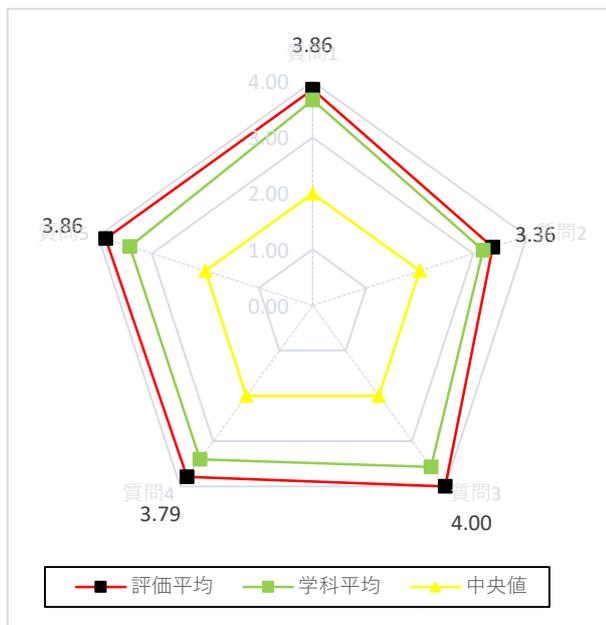
(3) 次年度に向けての取り組み

令和4年度も、新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。実習担当者として臨機応変に対応できるよう心がけたい。保育実習Ⅲは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定める上でも非常に重要な実習であると言える。特に支援を必要とする利用者に対する個別支援や地域社会における支援の現状、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、令和3年度もなお一層実習施設とも連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立していけるようサポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅱ	70名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

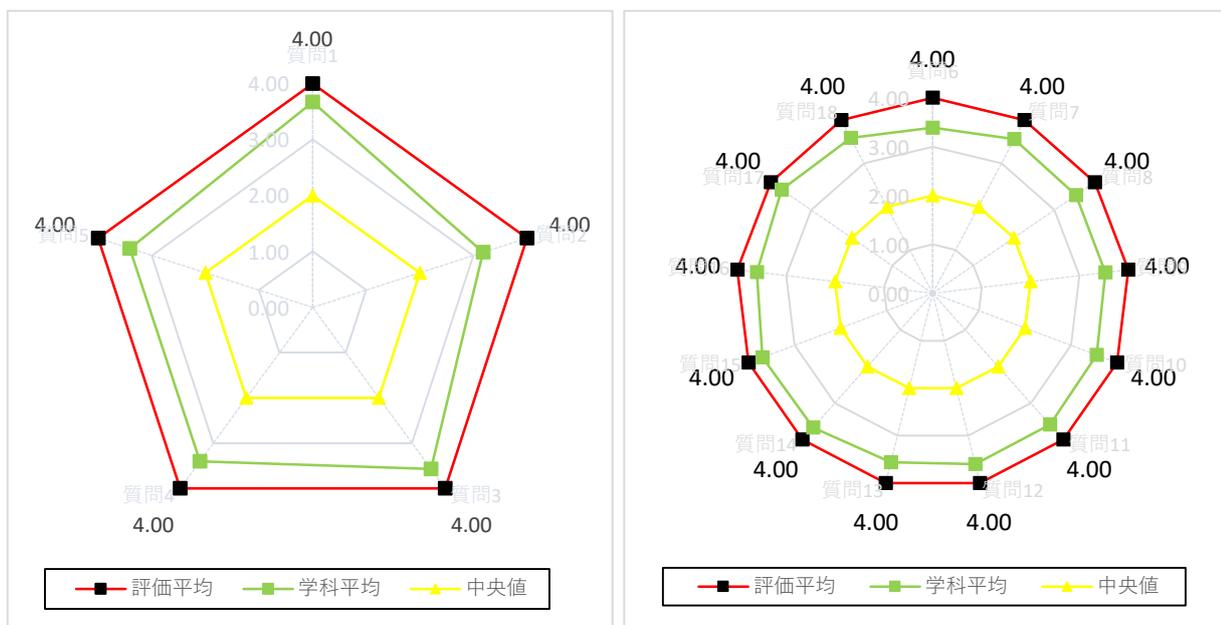
保育実習Ⅱは、保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各保育所の特性や一人一人の子どもの実態、家庭の状況などを理解し適切な援助を行うことが目標となっている。コロナ禍で先の見通しが持てないまま、授業はオンラインで課題提出となった。子どもの発達、実習園の保育方針や特徴、指導案作成、教材研究など個人でできることに取り組んだ。計画通りにはいかなかったが、全員が模擬保育をし、保育技術や保育の展開、教材研究を学べ合えた。グラフでは、授業の目標が明確に打ちだせていなかったのは、そこに理由があると考えられる。コロナ禍で有難いからこそ、学生のどんな授業をしたいのか意識をもつことと教員側の魅力ある取り組みが課題であることが突きつけられている。進む早さや公平性は気をつけていたのでやや高かった。今年度も真剣に取り組む学生が多く、助けられた。今後も専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観・倫理観を深め、新しい学習課題を発見する機会として捉えることが大事である。

(3) 次年度に向けての取り組み

保育実習Ⅱは、保育の実地の学びの集大成になる。自らの今後の進路を決める上でも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。今後も実習の自己評価を行い、実習を振り返ると現場でどのような保育を目指したいかを明確にしている学生も多く見られた。これらを踏まえ、コロナ禍でありながらも臨機応変に授業を組み立て、実習園とも連携を密にし、各自の保育観や倫理観を確立していけるよう支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅲ	5名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習指導Ⅲについては、対象となる学生が少ないため、ゼミ形式で授業を進めている。

本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、対面授業ができず遠隔授業に切り替えざるを得ない時期があったため、教員にも学生自身にも臨機応変な対応が求められた。実習先施設の種別としては、今回の受講生の実習先はいずれも児童養護施設であった。そこで、特に児童養護施設を中心に、その他の種別についても学べるよう配慮して進めた。

授業評価については、自らの学びについての評価も授業についての評価も高い。

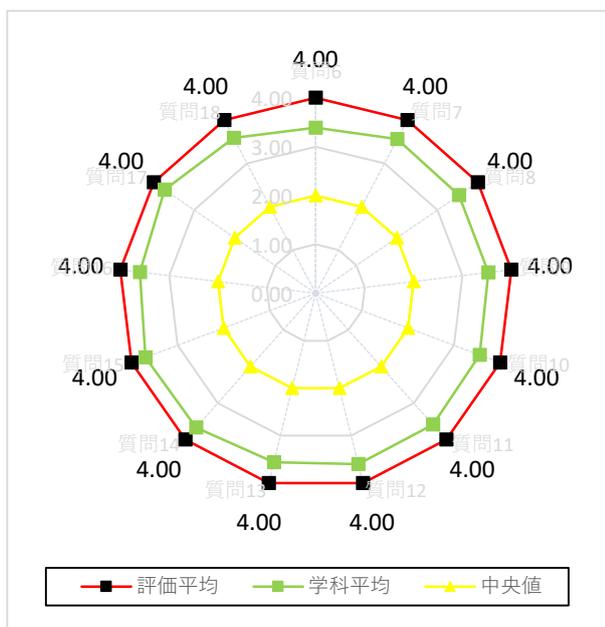
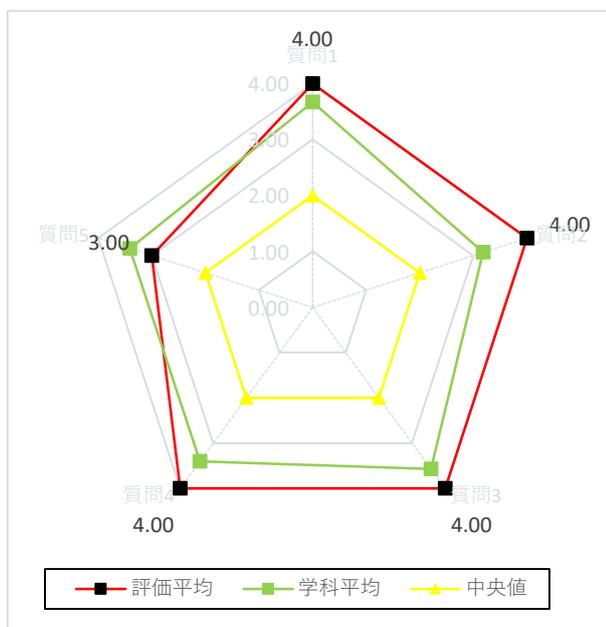
(3) 次年度に向けての取り組み

令和4年度も新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。対象学生は3名であり、基本的にはゼミ形式を進めるとともに、遠隔授業になっても一人ひとりの学生の学びを受講者で共有できるようアクティブラーニングの形で進めていきたいと考える。

そのためには、学生それぞれが実習に臨むうえで事前に調べたことや、実習後に学んだことを報告する機会を設けて、学生間で双方向的に学習できるような環境を整える必要がある。また、教員もその環境の中に存在することによって適切な指導やサポートができるよう努力したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	5名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

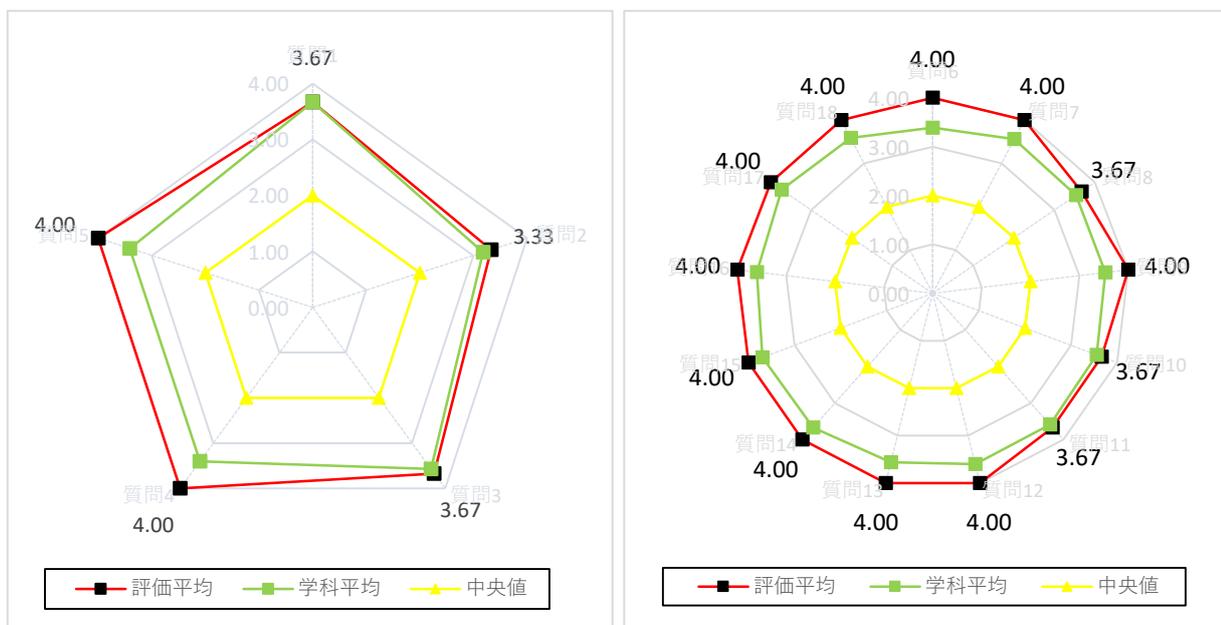
1名だけの解答であるため、分析は控えることとした。

(3) 次年度に向けての取り組み

回答を積極的に働きことが求められる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

「子ども学」領域において、各分野・学問に応じた教育研究や学術研究等を遂行し、その結果を提出・報告することが求められている。本ゼミにおいては「子どもの環境と文化」に視点を置き、さまざまな角度からアプローチして疑問に思ったこと、もっと知りたいと思ったことなど、身近な内容で興味や関心をもった研究テーマを各自選択し、深めている。

集大成である「卒業論文」作成については、昨年度に引き続き、本年度も新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から対面授業が一時期できず遠隔授業に切り替わったこと、例年はアンケート調査を夏休み前に行い余裕をもって分析・考察することができたが、昨年同様にそれも不可能であったためなかなか進めるのが難しかった。その結果、7名の学生の取り組みの姿勢や進度に大きな個人差が見られた。結果としては何とか論文を完成し、発表まで行うことができたことは学生の努力によるものであった。

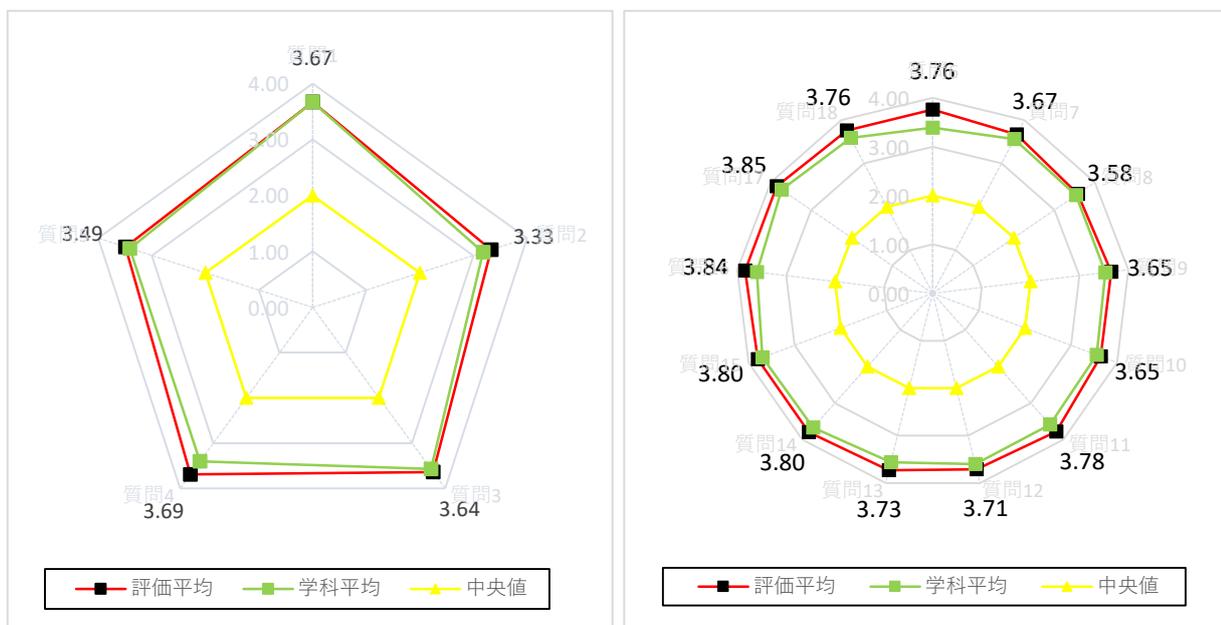
授業評価については、すべての項目について非常に高い評価を得ている。

(3) 次年度に向けての取り組み

令和4年度も新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。オンライン授業も含め、工夫しながら行えるよう臨機応変な対応が求められるであろう。3年生の段階からすでに仮のテーマを設定し、先行研究についてもある程度深め、ゼミ全体で中間的な発表も行っている。今後は、学生が自らの「卒業論文」に対して主体的に取り組み、無理のないスケジュールで完成に至ることができるようしっかりとサポートをしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語	95名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

昨年度に引き続き、どの項目においても学科平均を上回ることができた。コメントの中に、このことを裏付ける意見が多々あった。「国語の面白さに気付くことのできる授業であった」「楽しい授業であり、新しい発見がたくさんあった」「褒められたのが嬉しかった」「たくさん質問ができてよかった」「これからどのようにして子どもたちに教えていけばいいのか、その基盤ができた」などである。

(3) 次年度に向けての取り組み

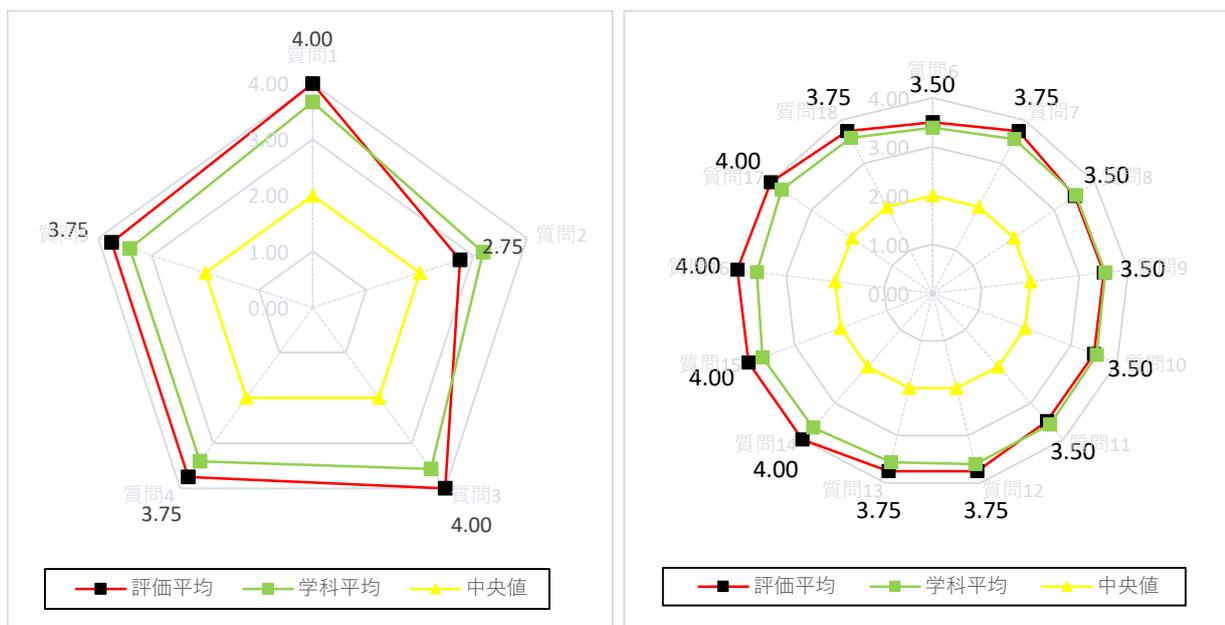
回答率は、57.9%でやや低かった。

本学で5年間、「国語」を担当した。この間、「国語力は人間力である」という理念に立ち、学生の国語力の育成に努めてきた。本学は小規模の大学ゆえ、学生一人一人の伸びをはっきり把握することができる。社会生活を営んでいく上で言葉を大事にすることが重要であることを、毎回の授業を通して理解している学生が増えていることがよく分かった。

しかし、課題もある。その最たるものは、活字に親しむ機会を増やすことである。毎日、新聞を読むこと。読書を習慣化すること。これらのことが語彙力及び読解力の向上につながり、ひいては、表現力の向上になる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

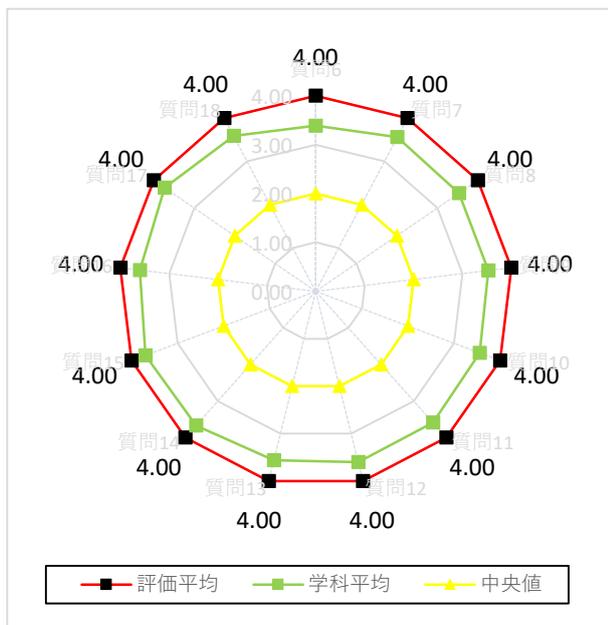
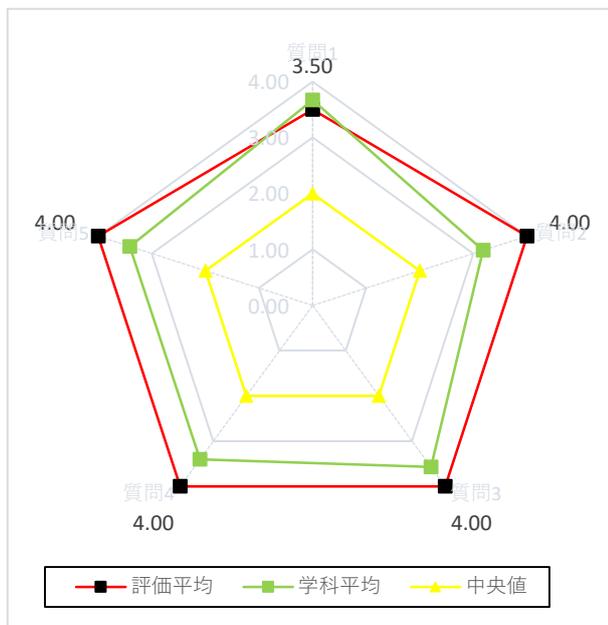
この授業はシラバスに沿った学習というよりも、個々の学生の研究テーマに対して、個々の学生のペースで進めていった。最終的には、いずれの学生も何とか卒業研究としてまとめていくことができた。指導過程においては、個々の学生と教員との双方向なやり取りを行いながら指導を進めていった。指導の在り方としては、学生たちからは、おおむね良好な評価を得ることができた。

(3) 次年度に向けての取り組み

卒業を目前にしながらも進路に悩むや学生もいたが、本授業の中で個別対応をすることができた。この卒業研究では、授業と並行して学生指導をも密に行うことができた。次年度以降も個別対応を心掛けながら、学生一人ひとりが4年間の学びの集大成として卒業研究の発表ができるよう導いていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

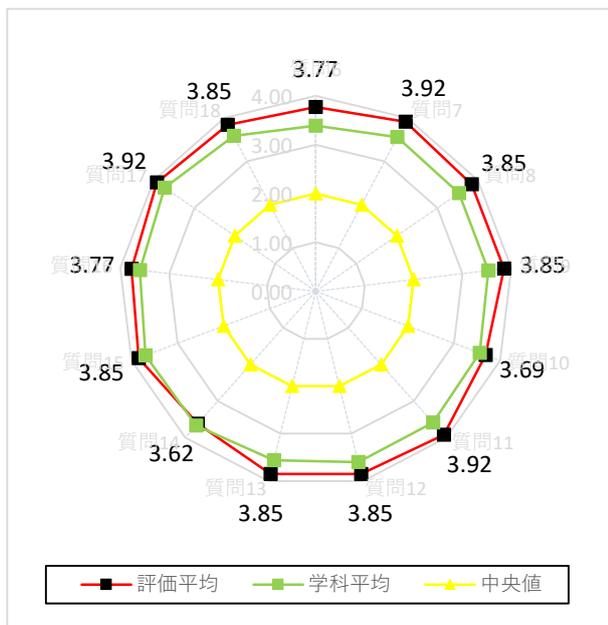
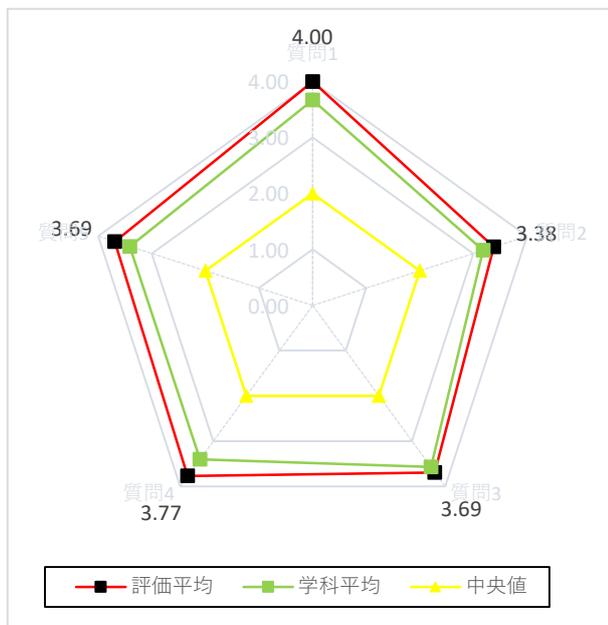
本学最後の卒業研究。男女各3名、計6名で臨んだ。実習（保育園・幼稚園・小学校・特別支援学校）が重なり、一堂に会してゼミを行うことが厳しい状況であったが、個々のスケジュールに合わせて無事に卒業研究発表会までたどり着くことができた。

(3) 次年度に向けての取り組み

「結果の分析と評価」の中でも記したように、卒業研究は基本的には「個人での取り組み」である。しかし、個人の研究をより深めるためには、ゼミ生互いの切磋琢磨が必要である。いかに「全体としての取り組み」を組み入れていくか。担当者とゼミ生全員が集まって協議し学び合う場をどのように確保するか。今後も課題となるであろう。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会	79名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

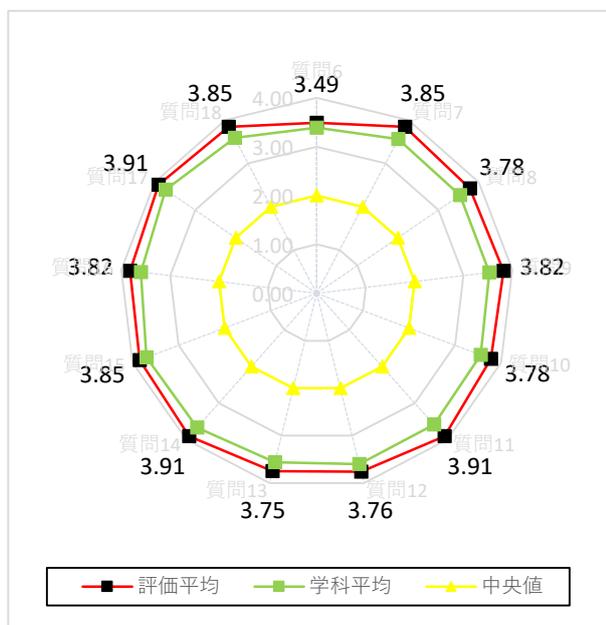
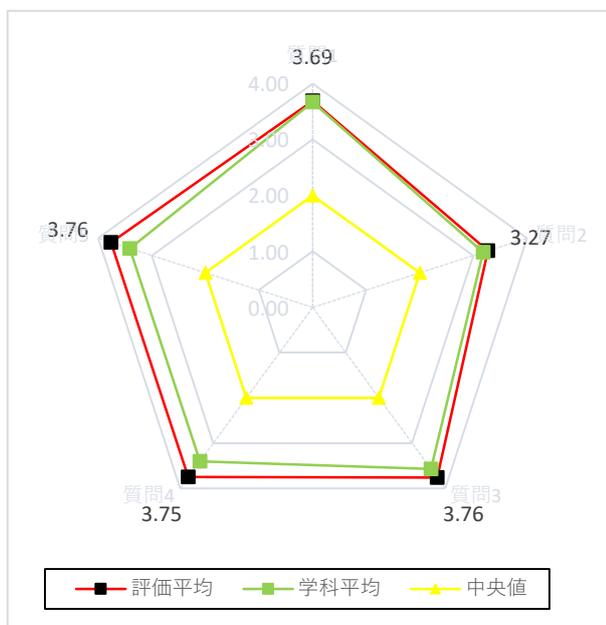
ほとんどの項目が、学科平均を上回っていた。学科平均を下回る項目は無かった。但し、13人/79人という低い回答率であったので、参考程度でしかない。自由記述も「特になし」が1名であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も、高評価を得られるように努力したい。回答率の上昇が課題である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽	101名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

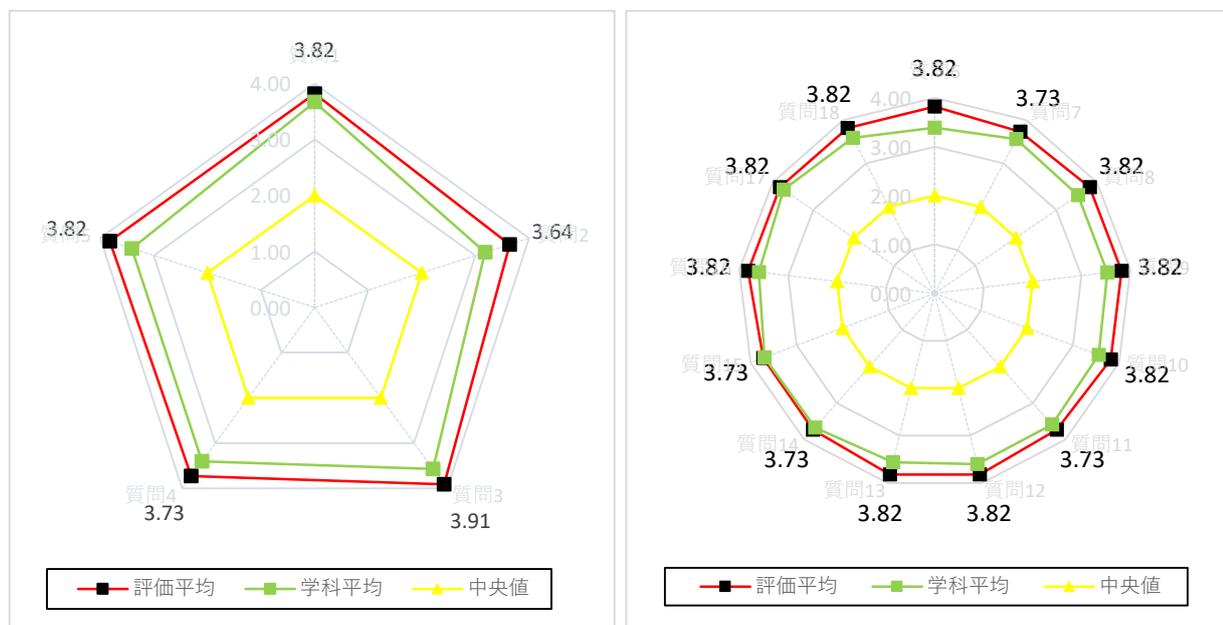
学生たちの受講態度は、私語が少なく極めて良好であった。毎回の授業においては、教員に対して学生たちの方から積極的に質問をしていたことから、授業に対する学生たちの熱心さが伝わってきた。授業の到達目標の明確さ、授業の分かりやすさ、視聴覚教材や板書の用い方、声の大きさや話す速度等の教員に関する評価については、現状のままですべて問題はないと思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

「音楽」で取り扱う内容は、2年次以降の音楽系の科目の基礎となるものであることから、1年次のうちに「音楽」の授業内容を十分に理解しておくことが望まれる。次年度に入学してくる学生に対しても、個々の学生に目を向けながら細やかな配慮をしつつ授業を進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導 I	38名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

昨年度に引き続き、本年度も新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、実習を控えた最も重要な時期である5月に一時対面授業ができず、遠隔授業に変更されることになり対応が求められた。実習指導については遠隔授業では伝えきれない内容も多く、臨機応変な対応を迫られた。初めての外部実習である施設・保育所実習に向けて、実習の意義・目的・心構えを学習するとともに、対象となる子どもや利用者の年齢や状況に応じた保育・支援、また指導計画・支援計画立案等さまざまな内容を習得できる指導を行うよう心がけた。特に学生にとっては、経験のない未満児や障がいをもつ利用者についての理解が非常に難しいため、視聴覚教材等を適切に使用したり、保育現場の保育者や指導員を招へいし、具体的な指導を盛り込むなどの工夫をしている。

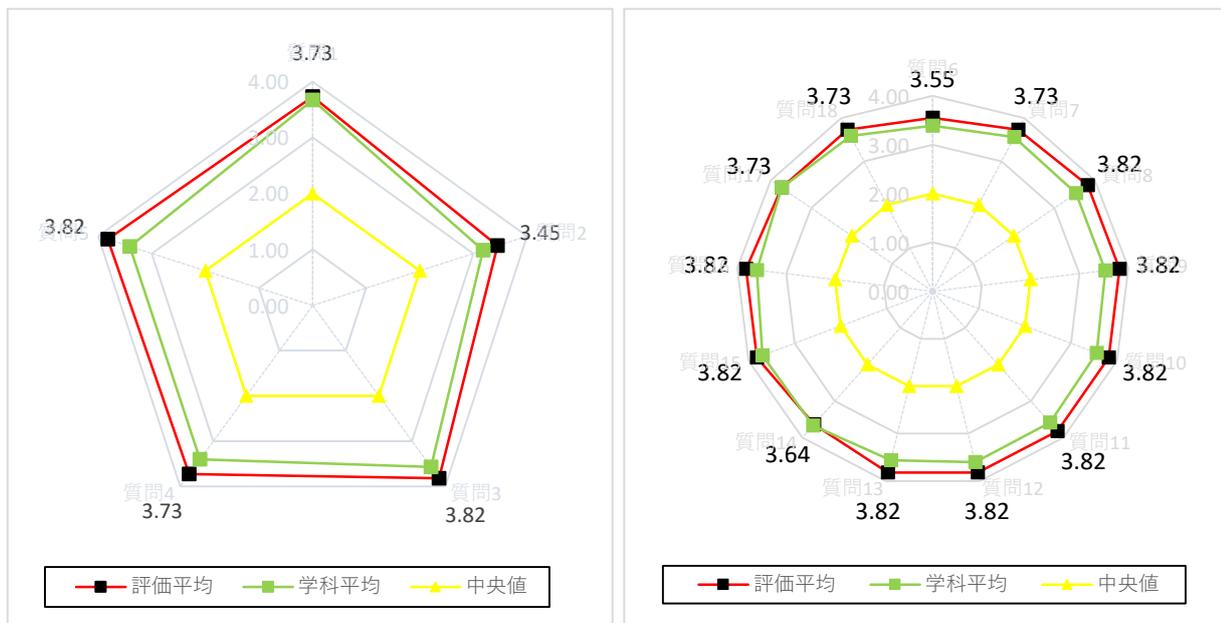
授業評価については一定以上の高い評価を得ている。学生も不安を抱えながらではあったが、より以上に真剣に取り組むことが高い授業評価につながっていると考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

令和4年度も、新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。実習担当者として臨機応変に対応できるよう心がけたい。学生が日頃あまり経験のない未満児や障がいをもつ利用者についてしっかりと理解した上で実習に臨めるような工夫が必要である。また、記録や指導計画・支援計画等の書き物については、書くことが苦手な学生も多くいるため、「書く」というたくさんの経験ができるように視聴覚教材等の適切な使用も含め、工夫して授業を進めていきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習 I (保育所・施設)	35名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習 I では、大学で習得した知識・技能を基礎にして、実際に保育の現場において実践を通してその役割や子どもの発達状況、1日の流れを把握することが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務内容について、実際に保育士の仕事内容を経験しながら理解することが必要とされる。

本年度は昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止に対する学生への指導の徹底が必要であった。一方で昨年度とは異なり、実習を断られるケースは殆どなかった。その代わりにPCR検査やワクチン接種について求められるケースが多かった。また、実習先でコロナ感染者が発生したため時期が大きく変更になることもあった。

そのような中であつたが、逆に学生としては感謝して実習に臨むという気持ちが強く、授業評価が高いことに繋がっていると考えられる。

この体験的な学びを基盤にして、大学において振り返りを行い、抽出された課題や問題点を解決できるよう各自が努力していくこと、さらには教員がそれをサポートしていくことが必要であると考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

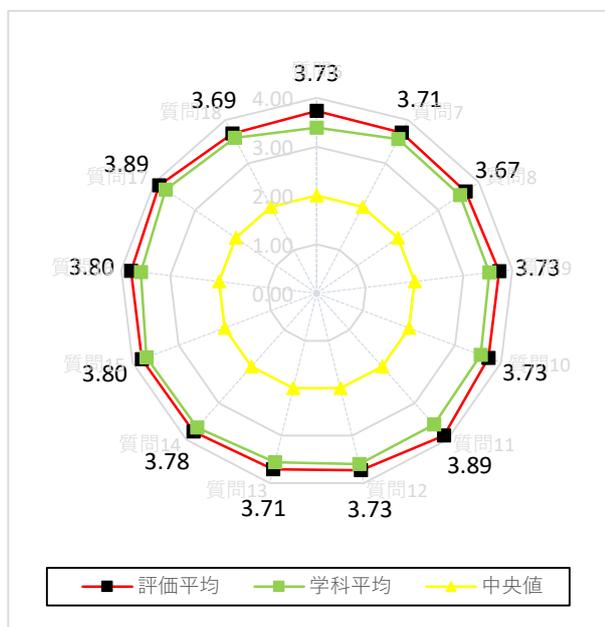
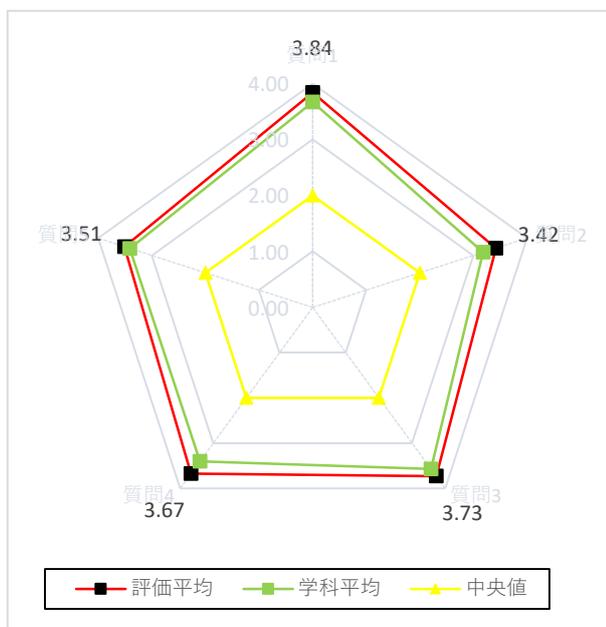
令和4年度についても、新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。実習担当者として臨機応変に対応できるよう心がけたい。保育実習 I (保育所・施設) は、学生にとって初めての外部実習である。それぞれの学生の体調管理をはじめ、実習に臨むにあたっての姿勢をしっかりと確立させたい。保育現場に送り出す必要があると考える。

また、マナーや明るさ、積極性、関心等の人間性が問われる実習でもあることを再度確認させる必要がある。保育者に求められるこの部分が重要であることは言うまでもないことであるため、個別指導を行う必要性もある。

これらを踏まえ、令和4年度は実習園ともさらに緊密な連携を行い、進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児と言葉	77名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

今年度新たに開講された科目であったが、計画通りに授業を展開することができた。受講生の参加意欲も高く、レポートや課題の提出もスムーズであり、シラバスのねらい（目標）を達成することができたと思う。

改めて、「授業は教師と学生との共同作業である」ことを実感することができた。授業者として、実に楽しかった。

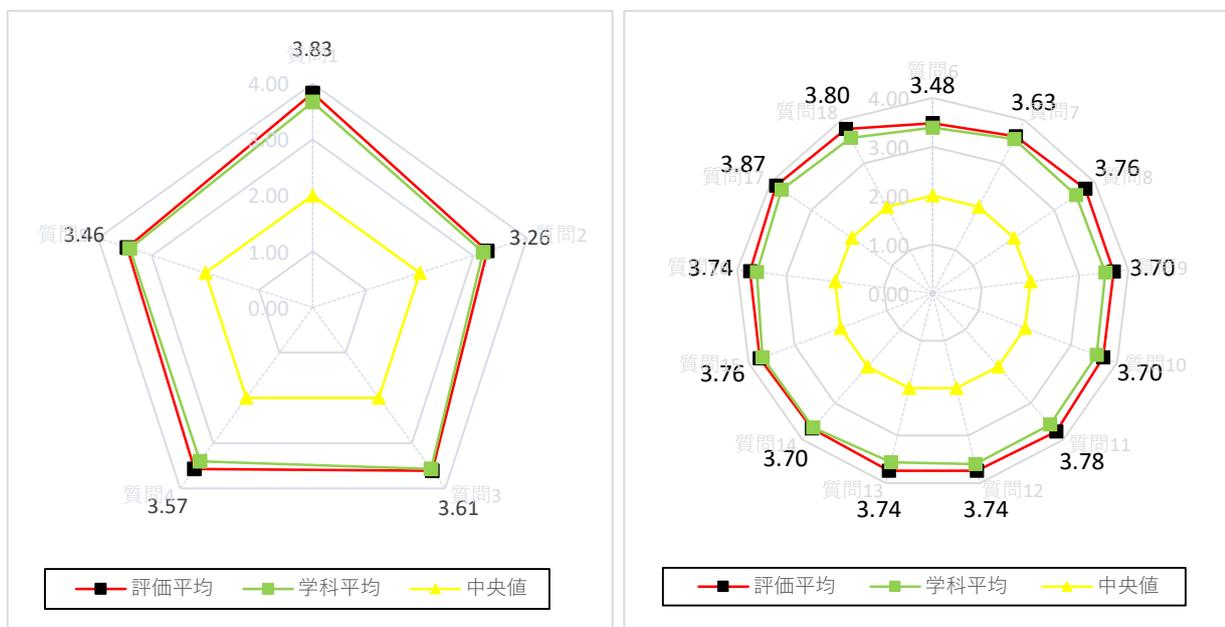
(3) 次年度に向けての取り組み

本科目を教えていく中で様々なことを学ぶことができた。授業を通して、自分自身の世界が広がるのを実感することができた。端的に言えば、言葉の意義であり、人間の成長に係る言葉の役割である。今後の自分の成長の糧にしていきたい。

学生に対しては、普段からもっと本に親しむこと。もう一派踏み込んで考えること。答えを導き出すということ以上に、疑問や課題をもつことを大切にする姿勢をもつこと。こうしたことを大事にして学生生活を送ってほしい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児と表現	77名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

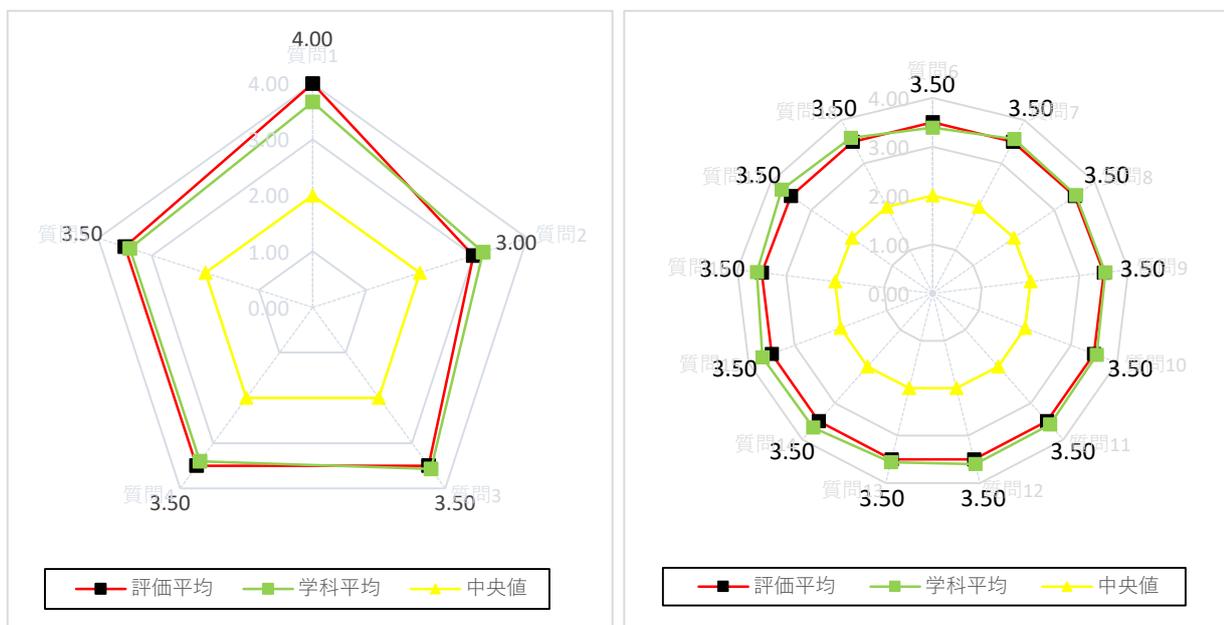
授業は前半を櫻井が担当し、後半を高石が担当した。受講生の出席状況は良好で、1回の授業で取り扱った課題だけでなく、数回の授業にわたって継続して取り組むような課題に対しても熱心に取り組んでいた。担当教員は意見交換の場を設けることを重視し、学生たち同士に加え、学生と教員間での意見交換を行うことも随時組み入れながら授業を進めていった。授業に対する興味・関心が持てるような工夫、授業の分かりやすさ、進む速さ等、授業内容や指導に関する学生評価はいずれの項目も特段の問題はなかったことから、基本的には大幅な見直しは行わなくてよいと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

この科目は、次年度もオムニバスで展開する予定である。事前に担当教員間で共通認識を確認し合い、学生の状況を見ながら共同で進めていきたい。特に、他者の意見を傾聴しつつ、自分の意見を言語化することについては、今年度同様に随時組み込んでいく予定である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習Ⅱ	45名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

幼稚園教育実習Ⅱでは、幼稚園教育実習Ⅰにおける経験と自らの課題を踏まえ、各幼稚園の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての幼稚園教諭の役割や職務内容を理解し、自らの保育観や倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

昨年度に引き続き、コロナ禍における実習はさまざまな制限があり、求められることも多い。

この授業評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価したものであるが、質問内容が実習そのものにはあまりそぐわない内容となっている。しかしながら、一定以上の高い評価をしており、この経験が学生にすばらしい影響を与えていると考えられる。

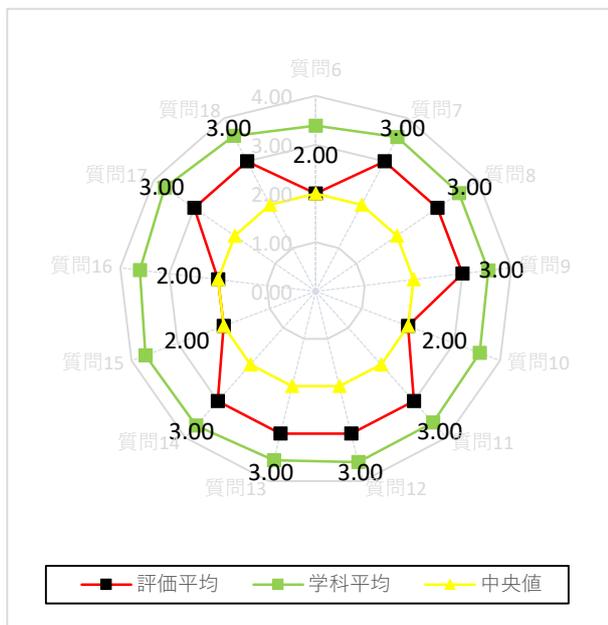
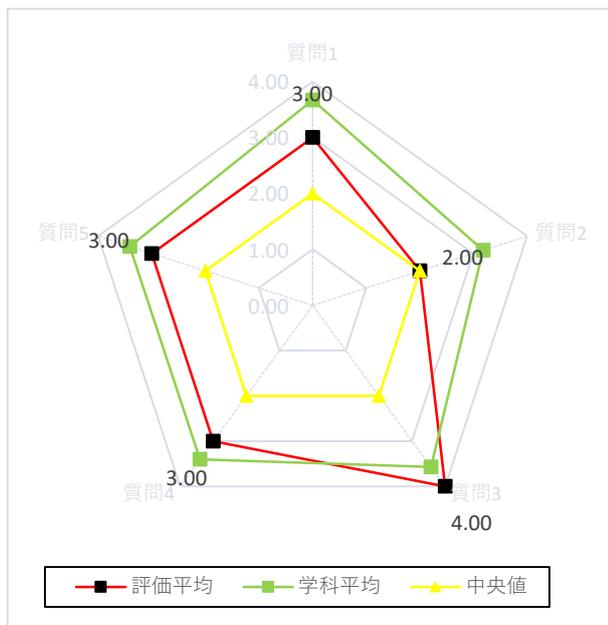
(3) 次年度に向けての取り組み

幼稚園教育実習Ⅱは、3年生で行われる幼稚園教育実習の仕上げの実習である。自らの今後の進路を定めるうえでも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、令和3年度は実習園ともなお一層連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立していけるよう努力しサポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽（応用）	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

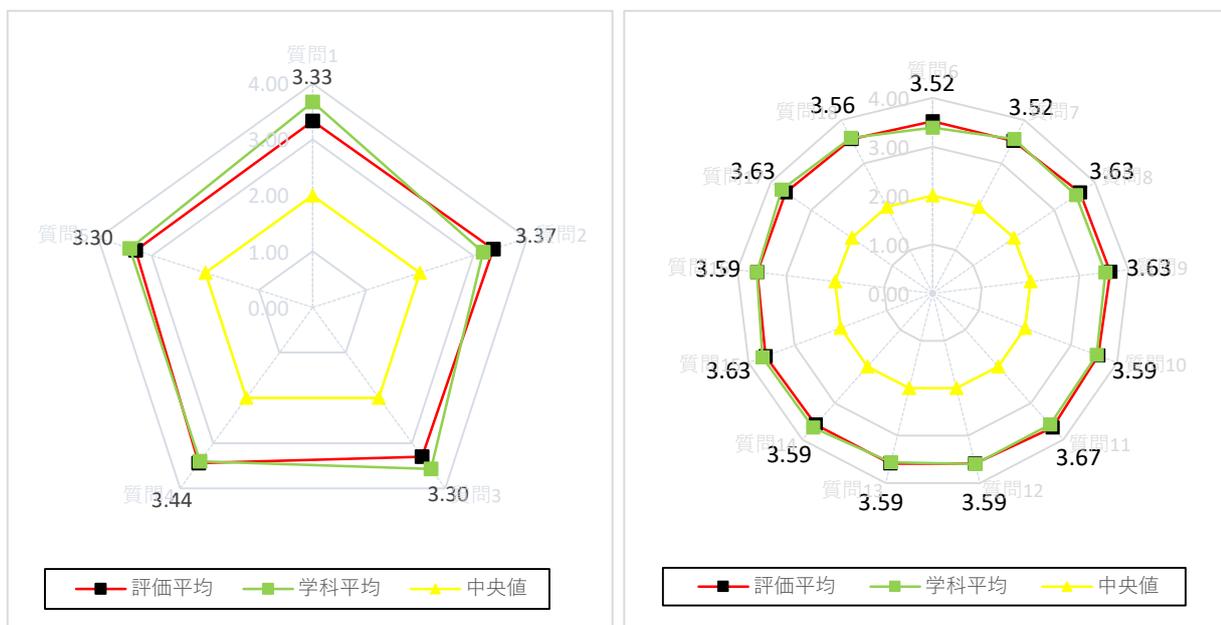
この授業は、非常勤講師の先生方とのオムニバスで実施した。そのため、本データを基に、個々の教員の評価を読み取ることはできない。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、専任教員単独での担当に変更されることとなった。次年度の授業内容は、小学校音楽科の授業の実践的内容を取り扱う予定である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽表現指導法	59名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

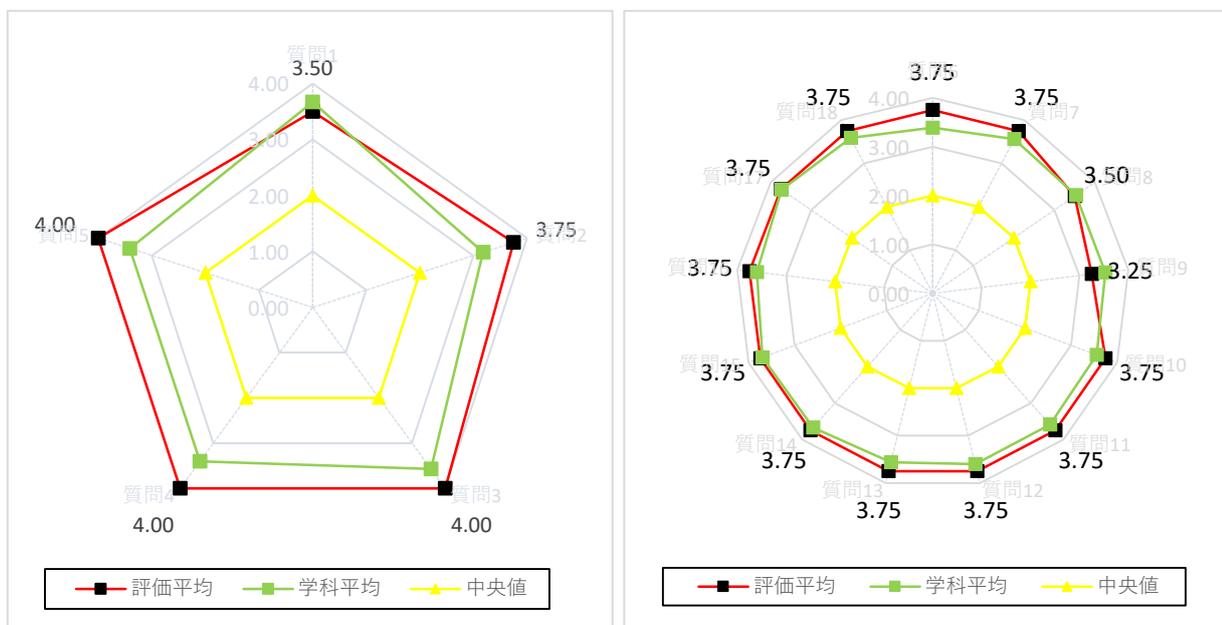
学生たちの受講態度は、おおむね良好であった。この授業の受講者は、保育士や幼稚園教諭を目指している学生たちである。このことを踏まえ、本授業では1年次の時に履修した「音楽」や「ピアノ」での学習内容を踏まえ、乳児期から幼児期までの子どもの心身の発達や音楽的発達に応じた音楽活動の内容や指導上の留意点について取上げ、保育者に求められる実践力育成を図った。質問項目6以降の各項目における評価では、大きなばらつきはなかったことから、基本的には今年度の授業を大きく変更する必要は無いと判断する。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は視聴覚教材の効果的活用によって、より多くの教材の紹介や指導上の工夫について強化していく。また、学生と教員との双方向的な授業の進め方だけでなく、学生同士の意見交換を積極的に組入れながら、受講者がより一層、課題意識をもって受講することができるような工夫を試みることにしている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語科演習	37名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

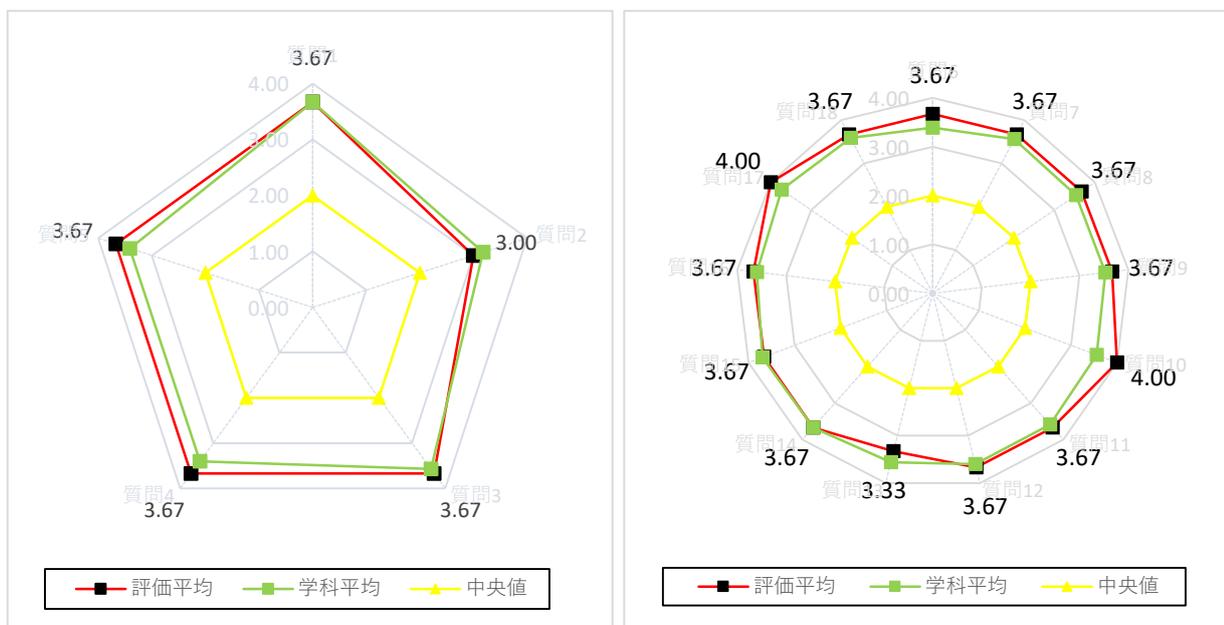
【質問9】の評価がやや低かったが、これは、【質問1】との関連があると考えている。授業者として「分かりやすい工夫」をした一方で、欠席が多い（この時期は例年、実習が複数入るため、出席できない状況があるのは致し方ないと思うが…）のである。本演習は、基礎である『国語科指導法（2年次）』の上に立って行われるものだけに、公欠以外の欠席は避けたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

受講生自身、もっと貪欲に学ぼうとする意欲がほしい。本科目は演習ゆえ、受講生自身の意欲が鍵になる。意欲は教えられない。自分自身で獲得するものである。だからこそ、欠席した場合の受講者の姿勢・心構えが大切である。欠席したら自ら進んで研究室を訪れ、演習・講義の概要を尋ねたり、資料を取りに来たり、友達からノートや資料を借りて補充したりしておくなどの努力、汗をかくという姿勢を見せてほしいものである。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	12名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

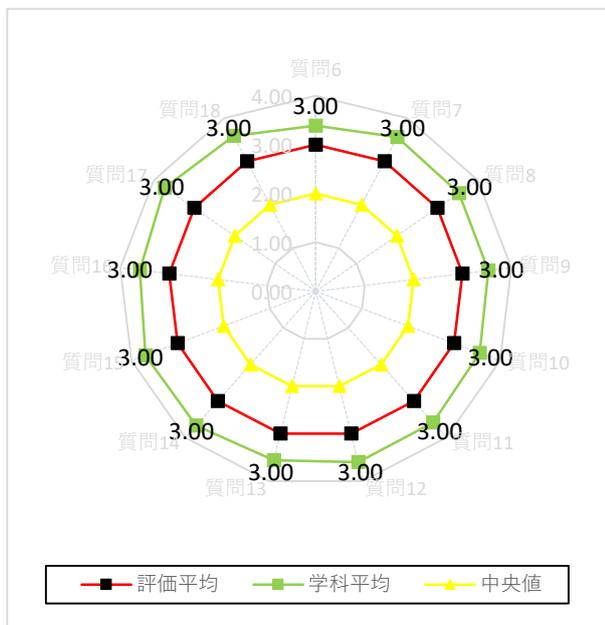
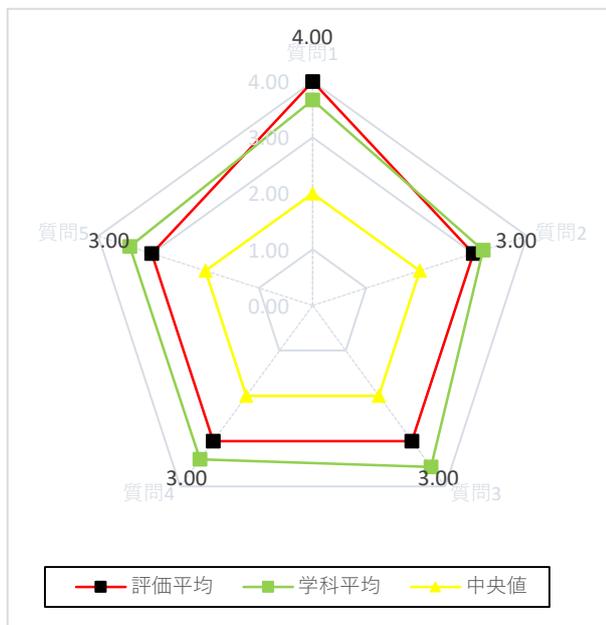
- ・アンケートの回答数が少なかったため、評価平均値に対するコメントは差し控える。
- ・新型コロナの影響で、昨年度自粛した学外交流活動を実施することができた。障害者・保護者の団体の方々との交流活動に、参加学生は非常に興味を持ち、主体的・積極的に取り組むことができた。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・ゼミナール科目であり、授業のスケジュールや取り扱う内容について、柔軟に対応していく。シラバスをよく説明したうえで、学生が見通しをもって学習に取り組めるよう、臨機応変な授業の展開を工夫する。
- ・学生の学びのニーズを常にゼミ全体で共有することにより、授業の目的や学生個人の目標を確認し、主体的な学修につなげるようにする。
- ・新型コロナの状況次第ではあるが、可能な限り障害者・保護者の団体の方々との交流活動の場の確保に努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

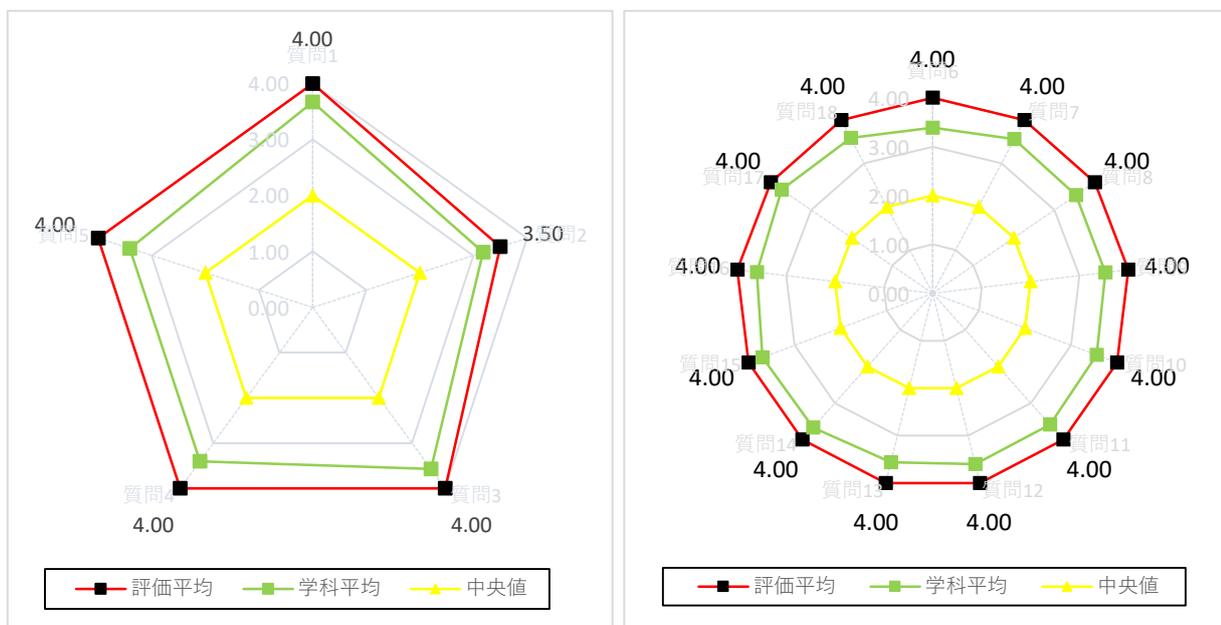
今年度の受講者からは、保育現場に向いて音楽活動を行うためのプログラムを用意し実践してみたいとの強い要望が出ていたが、コロナの状況の状況を考慮した結果、訪問演奏の実施は断念せざるを得なかった。生演奏の場合は、受講者全員が練習の段階から顔を揃え練習を重ねていく必要がある。今年度は、学科の方針により止むを得ず動画配信に切り替えたことにより、学生は不完全燃焼感を抱いた可能性がある。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度、新たに組まれるゼミメンバーの要望を可能な限り反映しながら、授業内容を構成していく予定である。音楽のように実技を伴う活動では、個々の行動が如何に全体に影響を及ぼすものであるのかという点については、丁寧に指導していく必要がある。音楽的な面での学習課題に関する意見交換だけでなく、他者と共同で取組む際の自らの行動についても考えさせることを重視して授業を進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

すべての項目について、一定以上の高い評価を得ている。昨年度に引き続き、本年度も新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、一時期対面授業が行われず、遠隔授業による発表をとおして学生相互でテーマを共有し意見を出し合うなど、できる限り双方向的な授業ができるよう心がけた。「子ども学演習」については、4年次の卒業研究の基礎になるものであり、論文作成に向けてさまざまな工夫をしているところである。現在は仮テーマを設定し、それに基づいた先行研究検索やその内容について検討しレジュメを作成し、中間発表を行った段階である。学生にとっては、自分が興味ある分野において自らテーマを設定し文章を書くという経験があまりないため、かなり細かい部分まで指導する必要があった。

これらのことを踏まえると、一人ひとりの学生の個性や能力に応じた個別対応が不可欠であり、細やかな配慮が求められていると考える。

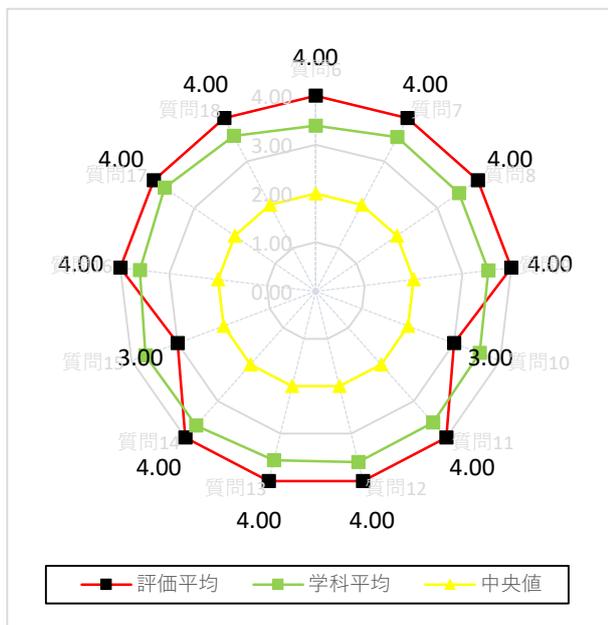
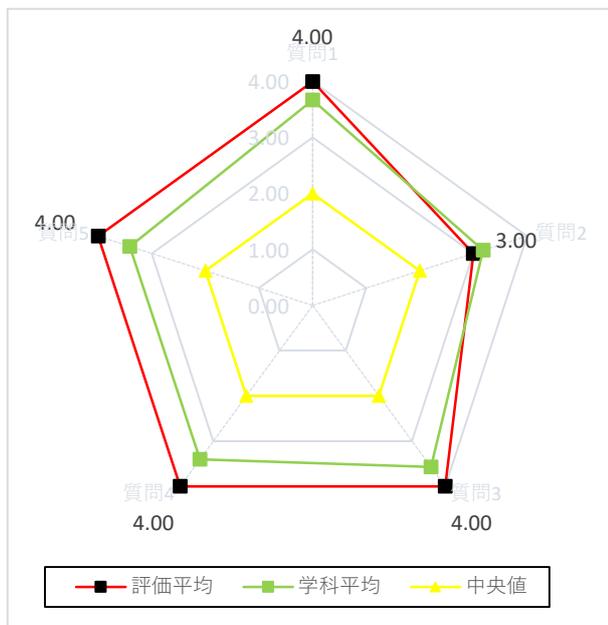
(3) 次年度に向けての取り組み

一人ひとりの学生の状況に応じた細やかな配慮を怠らず、学生が自分の考えをまとめて文章で表現したり、他人に対して自分の意見を発表するスキルを身に着け、4年次の卒業研究にすすむことができるようしっかりと指導をしていきたい。

さらには、それぞれの考え方や研究成果をゼミの学生間で共有できるようにアクティブラーニング的な授業を進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

8名中1名が後期より休学。実質7名中1名の回答である。わずか1名の回答ゆえ参考程度と解さざるを得ない。

質問10と15以外は、学科平均を大きく上回った。

回答学生は、ややルーズであり、欠席、遅刻、課題未提出がたびたびあったので厳しく指導した。それが本人にとっては不公平感が残ったものと思われる。

自由記述の回答は無く、それ以上の分析は困難である。

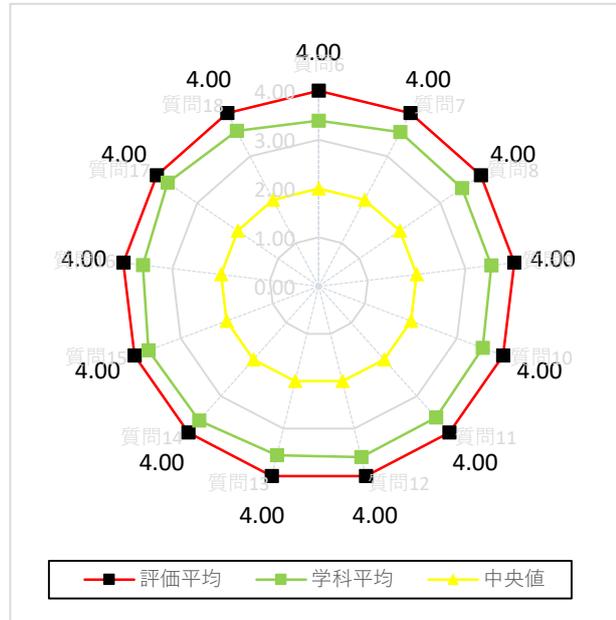
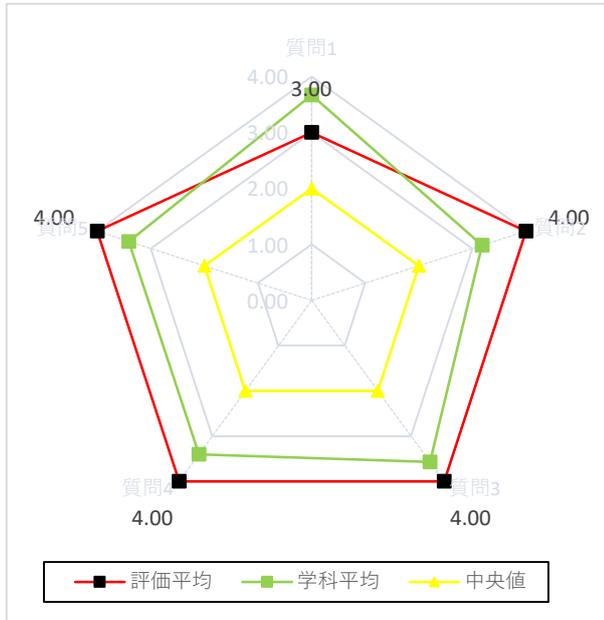
回答率が低かったのは、少人数ゼミであり、特に不満も無く、特段、提出の必要を感じなかったからではなからうか。

(3) 次年度に向けての取り組み

特定学生に「不公平感」を抱かせないような指導を心掛けたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	5名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答者1/5

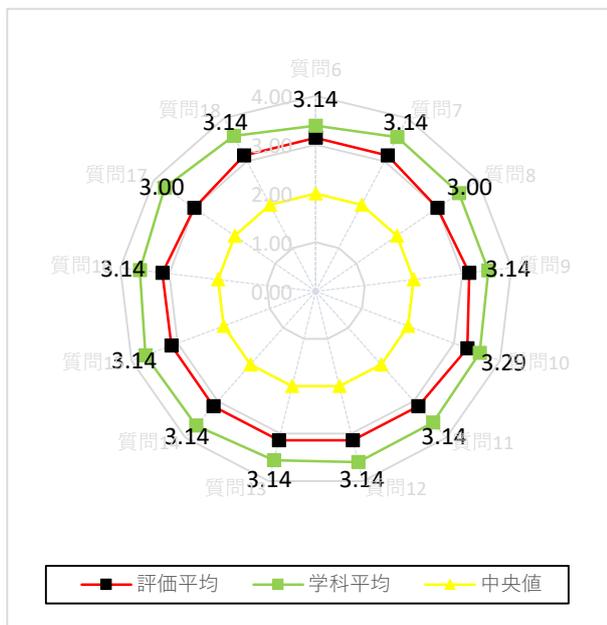
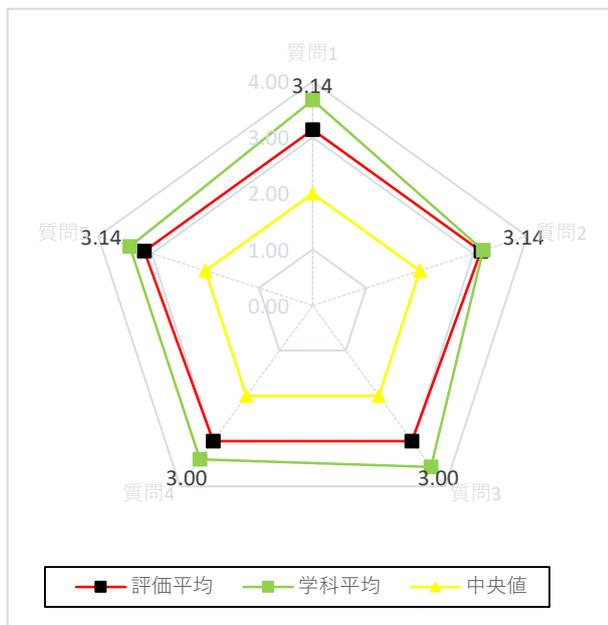
アンケートの回答数が少なかったため、評価平均値に対するコメントは差し控える。
 今年度は、コロナ禍で実施が難しかった、障害のある方とその家族との触れ合いを実施することができた。
 実際の経験を通して、多くのことを学んだのではないかと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

アンケートへの回答を、授業やメール等で催促したにもかかわらず回答率が低かった。アンケートに回答する時間を授業内で設定する必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう I 基礎 (初 年次教育含)	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

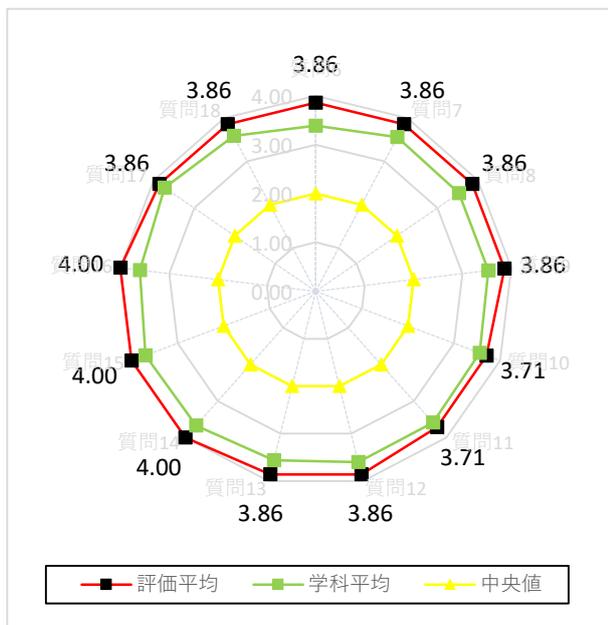
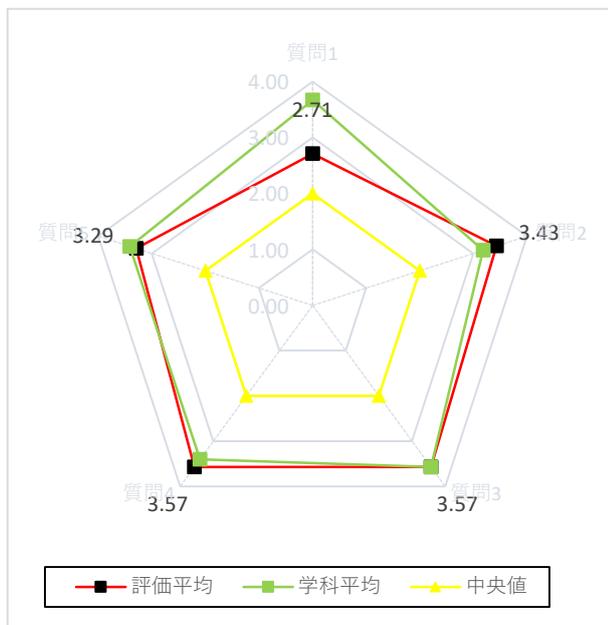
あすなろう体験活動（全学的な取り組み）と共に学科独自の内容もあり、評価は難しいところもある。しかしながら、学生の声に耳を傾けながら、改良していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度では、内容をやや変更したい。手紙の指導を取りやめて、メールの指導にするなど、変更していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう I 基礎 (初 年次教育含)	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

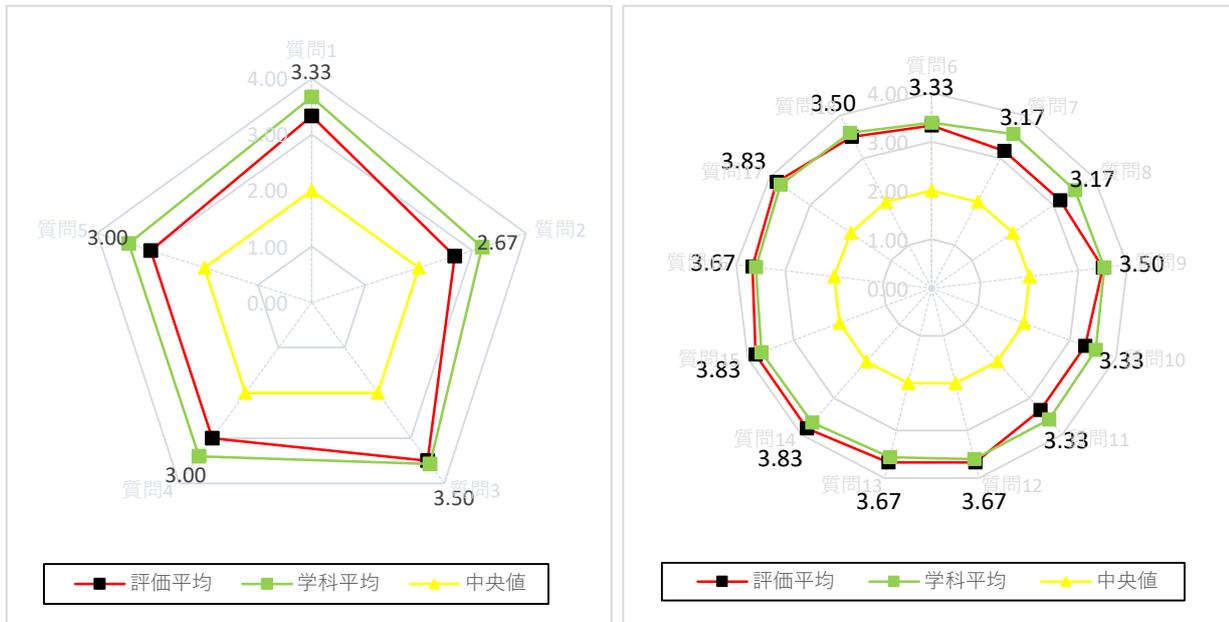
欠席者を授業参加へと結びつけることが出来なかった。連絡して話し合いをおこなったが、学生の調子が上向かず、欠席が多くなったことが質問1の結果に反映している。
授業内容は、おおむね満足できる評価を得ており、学生に本授業の意図が正確に伝わったと考えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

欠席回数を減らせるように、常に学生の動向をチェックする必要があると考える。少々手をかけすぎてしまうこともあるかもしれないが、学生によってはそれが必要なことである場合も考えられるだろう。授業内容については、次年度も同じように進めていきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう I 基礎 (初 年次教育含)	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

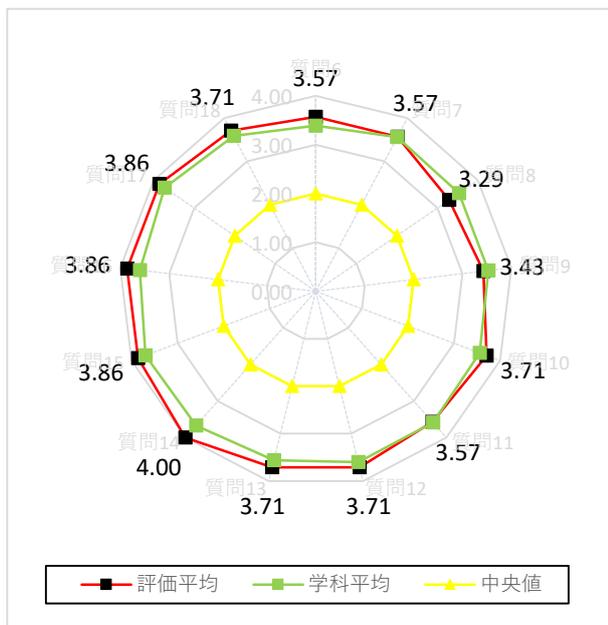
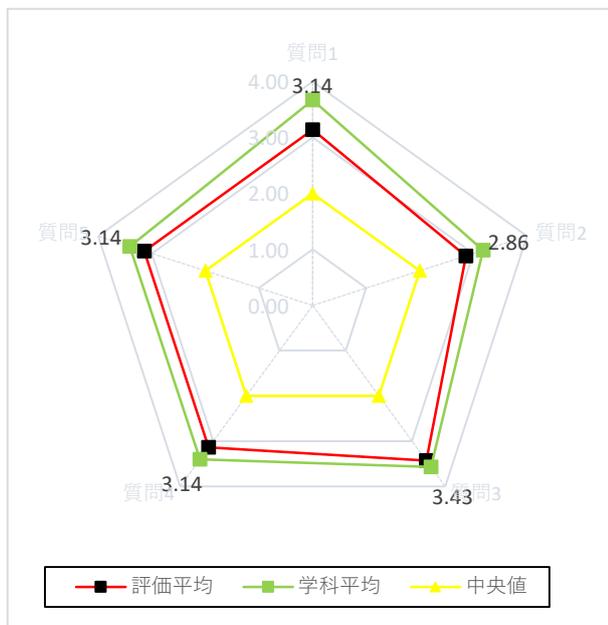
前半の項目で3.0程度の評価が見られるが、授業の設計に関わる部分と言える。これに対して後半の項目は3.6程度の評価が得られており、教員の対応が高く評価されたと考えられる。ポートフォリオになるべく遅滞なく返答するなどの点で改善ができた成果と考えたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は担当しないが、前半部分は授業設計に関わる部分と言えるので、学年全体での取り組みが求められるかもしれない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう I 基礎 (初 年次教育含)	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

受講しているゼミ生全員の解答を得た。学科平均と同程度、もしくは学科平均と比して高い評価を得た項目が多かった。

今年度は新型コロナウイルスの関係で前期はTeams双方向形式による遠隔授業が多い状況だったが、後期は対面授業を行うことができた。授業内容は学科全体で共通した内容を行い、授業形式については全体授業とゼミ別授業とが混在していたが、ゼミ別授業では、できる限り各受講生に個別的な声掛けを行い指導支援を行った。また、修学ポートフォリオも活用して学生の生活実態の把握に努め、気がかりな状況がある場合、個別に対応するよう心掛けた。

学生からは自由記述において、「またこのゼミに入りたい」との評価も得られた。各学生の理解度に合わせた指導の仕方や各学生へ公平性を期して指導を行ったことも評価されたと思われる(質問14, 15, 16, 17の評価にも表れていると考えられる)。

授業最終回は新型コロナウイルス感染拡大に伴い遠隔授業となったが、個別の指導の間に授業評価や課題に取り組ませることで、全員からの回答を得られたため、次年度以降も最終回に授業評価に取り組む時間を確保していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

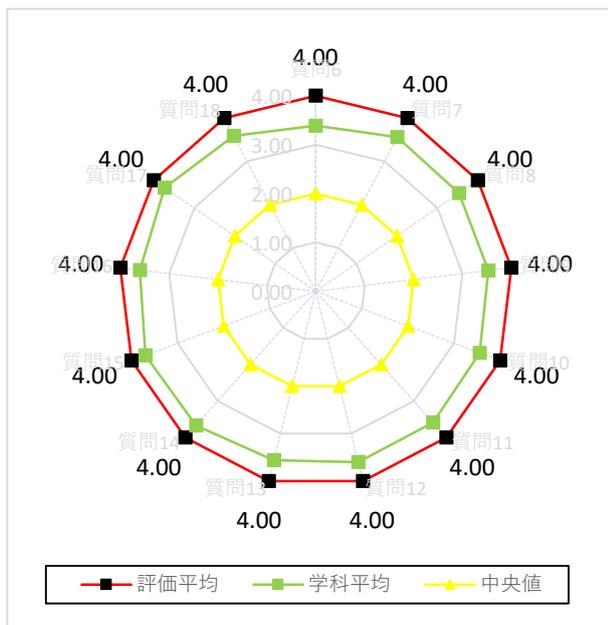
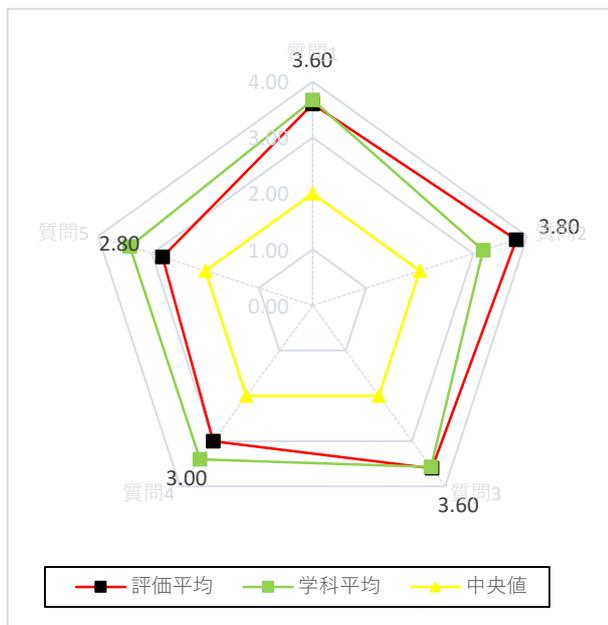
次年度においても、全体へ向けては指示の明瞭さに留意し、また学生には誠実・公平に接する姿勢を重視して、教育に取り組んでいきたい。

また、一人一人のポートフォリオも小まめに確認し、あすなろう体験実習の進捗や生活状況などを把握するなかで、気になることがあれば早めに声をかけることで、学生が大学生活を滞りなく送ることができるよう支援を行いたい。

次年度も、最終講義回で十分な授業評価回答時間を設けて回答を促していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう I 基礎 (初年次教育含)	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

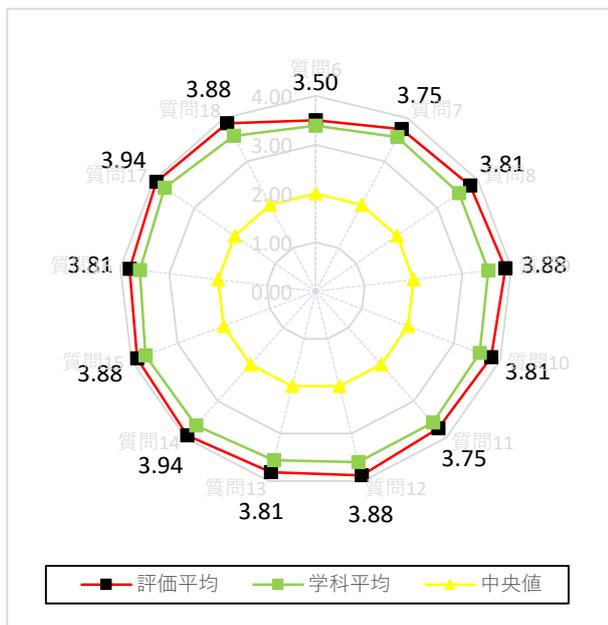
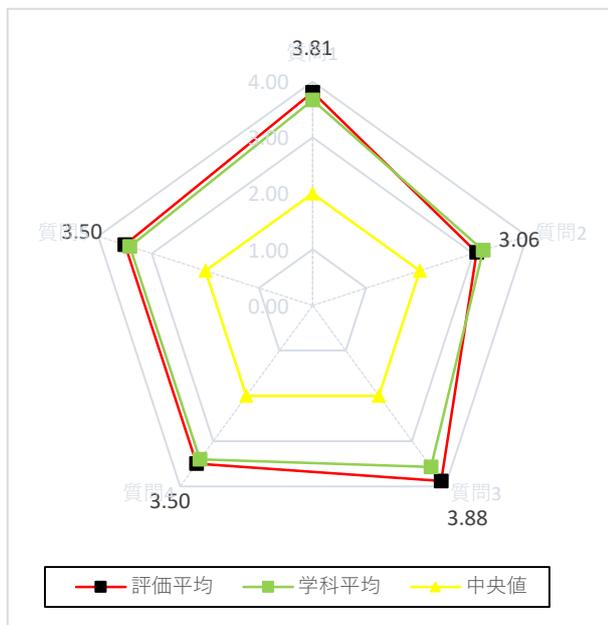
質問4、5において学科平均よりも評価が低くなっている。
 あすなろうは、あすなろう体験および発表が大きな比重となり、学生にとっては体験活動や発表に対する苦手意識を感じた結果だと思われる。
 その点について、苦手ながらも取り組んだ姿勢を評価し、今後の活動につなげていく必要が課題となった。

(3) 次年度に向けての取り組み

1年次にとっては、はじめての体験活動や発表が含まれるため、あすなろう体験の見つけ方や、実践後のフォローなどを丁寧に指導していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども心理カウンセリング		英語コミュニケーションⅡ	47名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

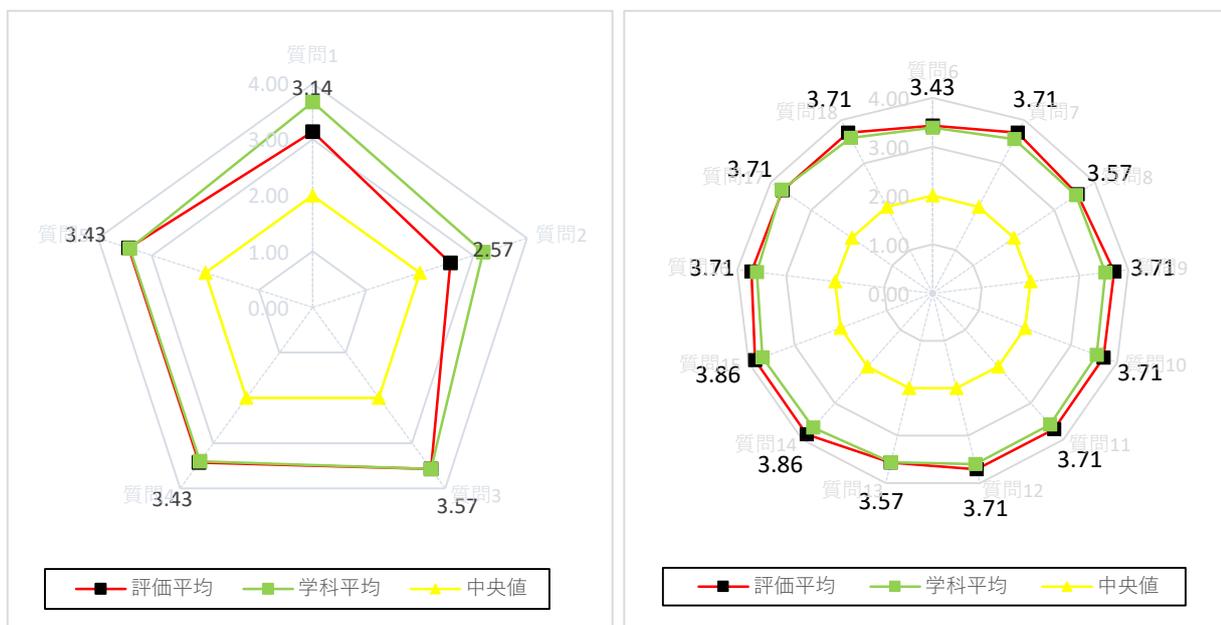
学科平均より高い評価が取れた。オンラインとはいえど学生が頑張った。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度講開無し

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		データサイエンス演習	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

ゼミ授業の最後の回に授業評価に取り組む時間を確保し、ゼミ生全員の回答を得た。

本授業は令和3年度より開始した新たな科目であり、全体授業でWordやExcelを中心としたPC操作に慣れることを目標に行った前半と、ゼミ別でデジタル化の様相を調べたり統計データから読み取ったりしたことをPowerPointを用いて発表する形式で行った後半とに分けられる。全体授業で学生が演習を行う際には授業にかかわる全教員が個別に操作の説明を行うことで、PC操作に慣れていない学生の理解を促進したことが質問14・15などの結果に表れていると考えられる。

質問2については、各回授業冒頭でシラバスよりも詳しい内容説明を行ったことから、特にシラバス活用の必要性を感じなかった学生が多かったことがうかがえる。

学生のもともとのPCスキル等にかなり差があったことで、一部学生には授業内容が平易と感じられた可能性があるため、今後グループワーク等で学生同士が教えあうような機会を増やすことも望まれる。

(3) 次年度に向けての取り組み

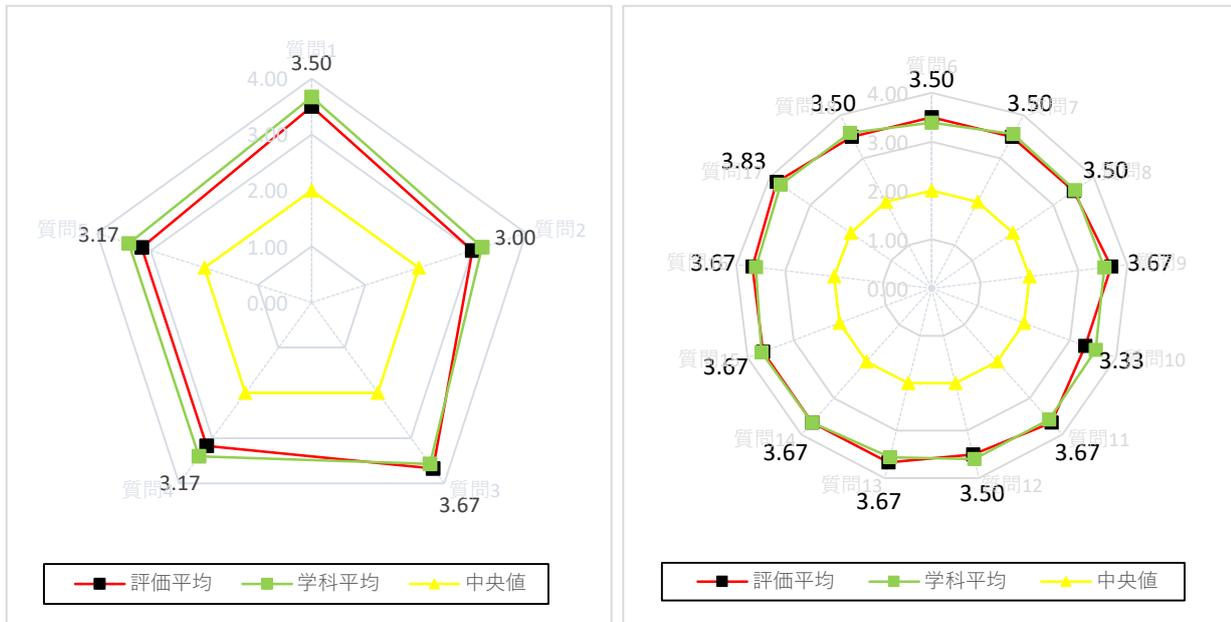
ゼミ授業の最後の回に授業評価に取り組む時間を確保し、ゼミ生全員の回答を得たことから、今後も授業時間内に回答時間を設定できるよう授業進行を行っていきたい。

学生のもともとのPCスキル等にかなり差があったことで、一部学生には授業内容が平易と感じられた可能性があるが、ゼミ別の授業内でお互いに操作を教えあうような姿も見られたことから、今後全体授業においても、グループワーク等での機会を増やすことも望まれる。

Macを利用している学生のPC操作に一部授業で指示する内容と異なる操作が必要になったことから、次年度以降の購入推奨PCについての情報伝達の際に留意する必要があると考えられる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		データサイエンス演習	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

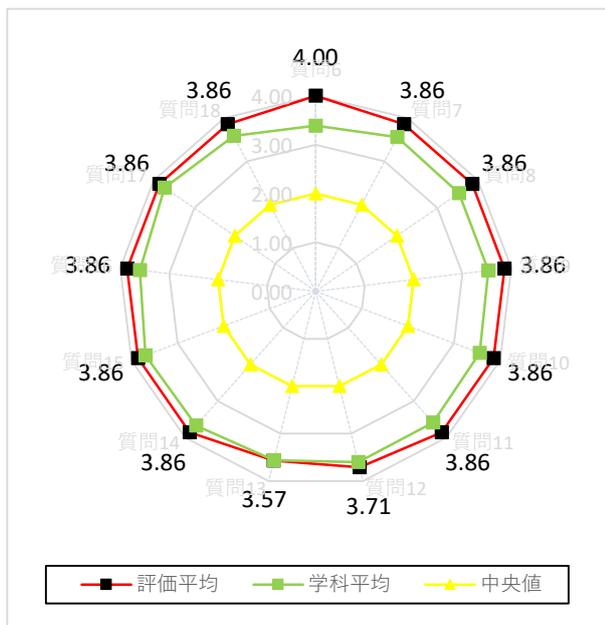
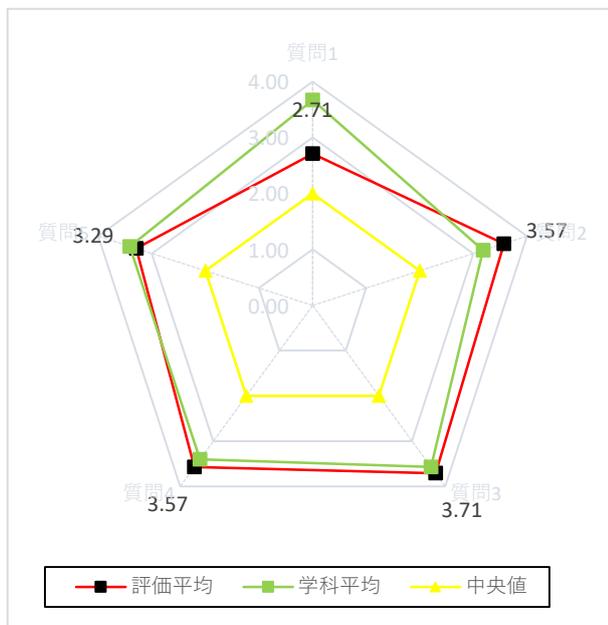
初年度の科目であったが、全般的に高い評価であったと言える。大学入学以前のICT経験が多い学生にとって、初心者向けの内容では特に工夫することがなかったという人もいるかもしれない。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は担当しないが、ICT経験が多い人が少ない人を教えるよう、働きかけることができると思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		データサイエンス演習	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

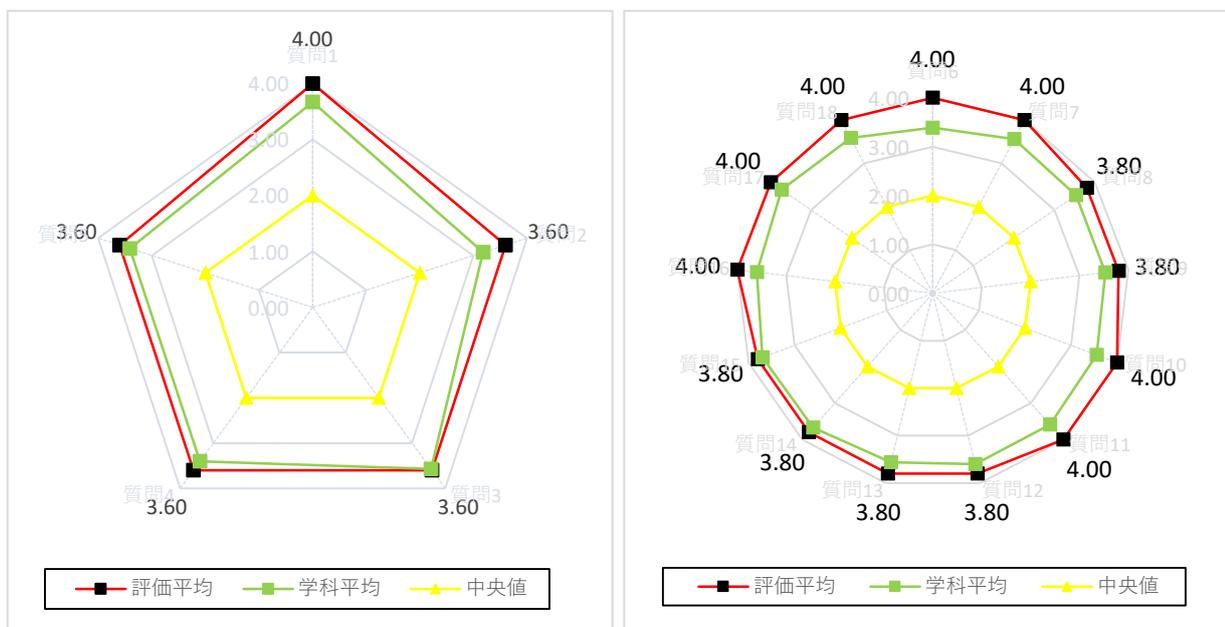
欠席した学生を適切に授業参加へと結びつけることが出来なかった。常にフィードバックを含めたコンタクトをとる必要性を感じた。授業内容が満足いくものであり、今後も丁寧に進めていくことを心掛けたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、学生の欠席を防ぐように、常にコンタクトを取りながら授業を進めていきたいと考える。結果、考察、フィードバックを怠らず、授業に対する学生の意欲を高めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		データサイエンス演習	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

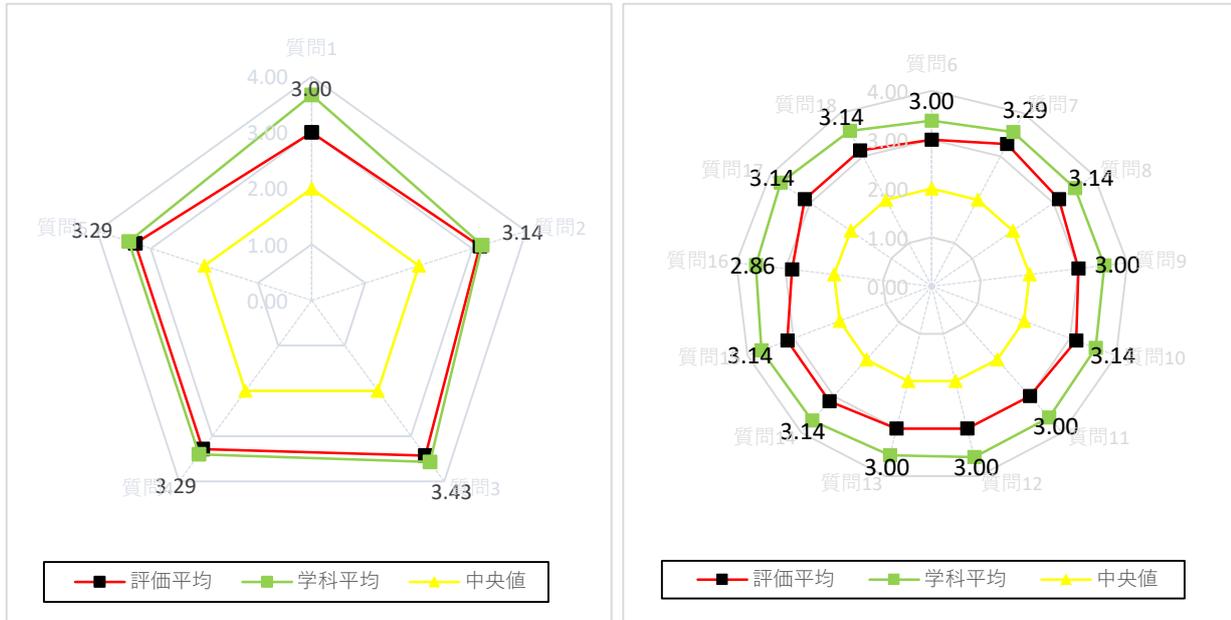
ほとんどの質問において、学科平均よりも高い評価であった。特に、ゼミ別での演習では、授業の到達目標を意識させ、自らの学びにつながるよう工夫したことにより、ゼミ別の発表では優秀な成績を残すことができたことが、評価に反映されていると思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

今後も、個人のデータサイエンスの力を伸ばすことのみならず、グループでの学びを深めて、学生が多角的な視点をもってデータを捉えて自ら考える力につなげていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		データサイエンス演習	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

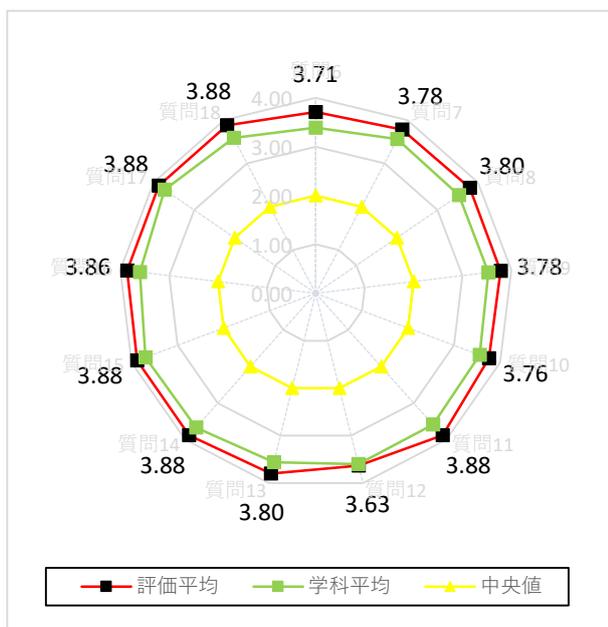
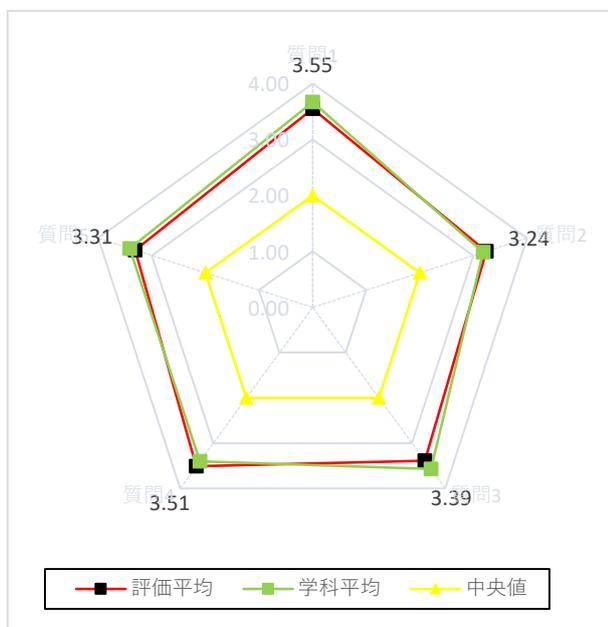
オムニバスでの演習であったため、指導の方法にやや差があったのかもしれない。また、個人の能力に差があるパソコン操作によるところも大きかったように感じる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度はグループ学習を中心に考えている。演習では、互いに教えあうことで、パソコン操作の能力差をプラスに捉える形にしたい。そうすることで、指導方法の違いも最小限にとどめることができると考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学概論 I	49名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

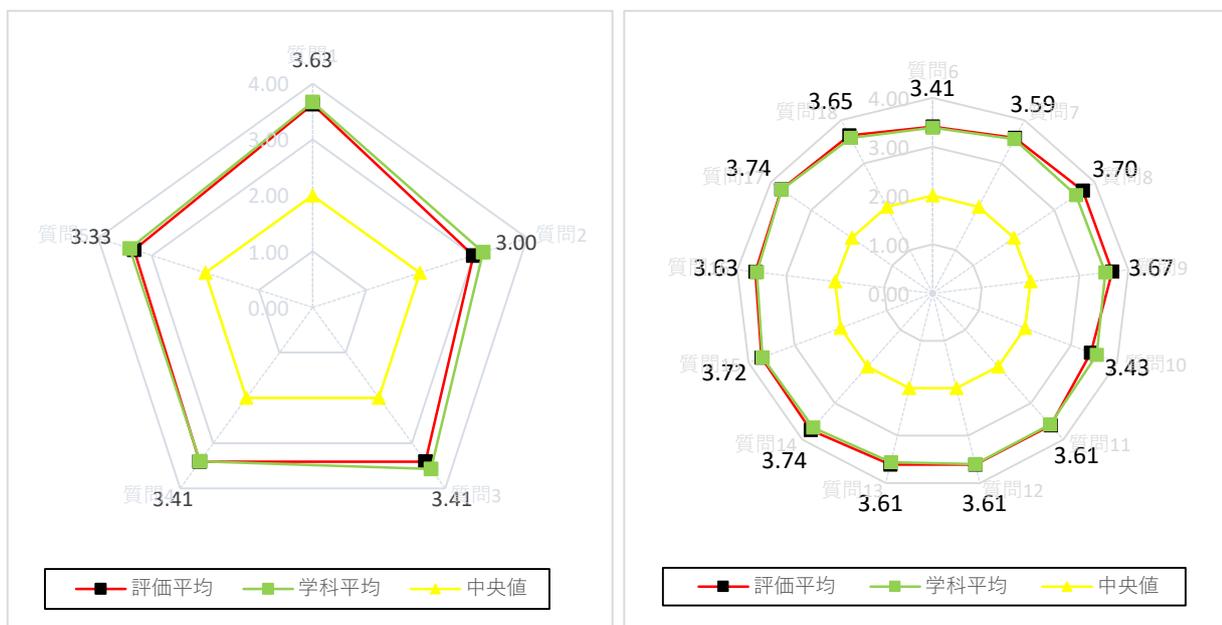
概ね高い評価を得ている。この評価を維持できるように努めていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

内容については、新しい研究成果等に改定していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学概論Ⅱ	50名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

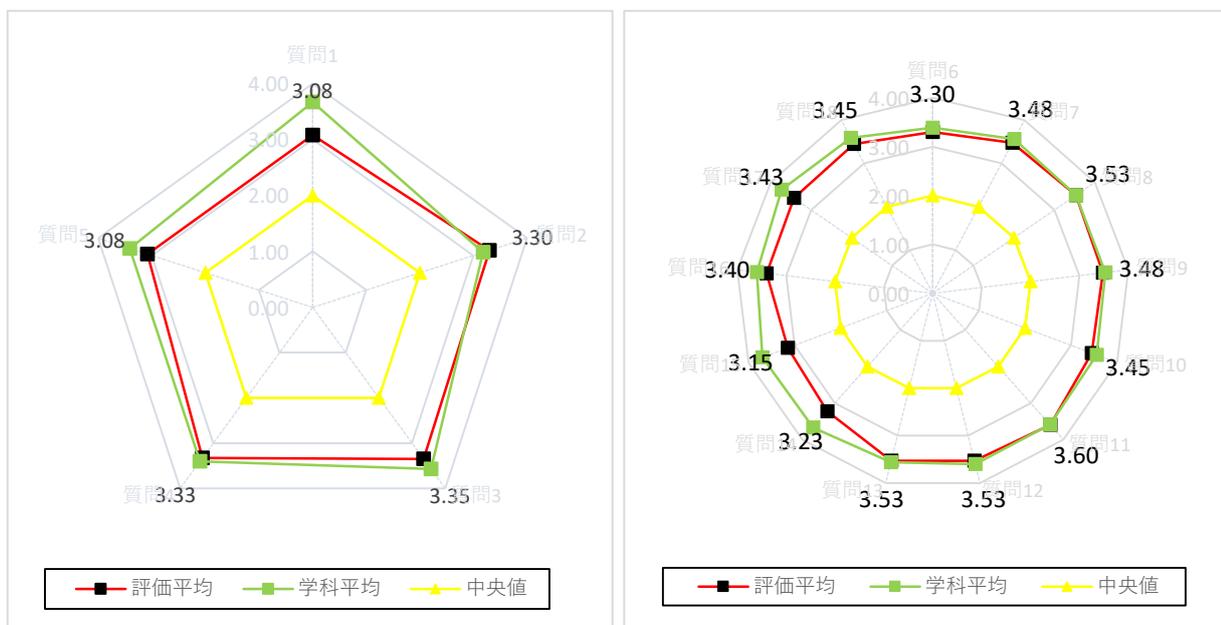
シラバス（授業計画）を明確に伝えていなかったことが反省点である。基礎的心理学を教える少ない機会であり、公認心理師資格試験に必要な基礎科目であるので、実際に出題された項目をメインにして授業を行った。その結果、まずまずの高評価を得られてと考えている。ただ、知識量が非常に多いので進度が早くなってしまったことが悔やまれる。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業計画を明確にして進めることを心掛ける。知識を伝えるだけでなく、理解度深める工夫が必要である。そのためには、小テストを取り入れた工夫が重要であるとする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理カウンセリング概論	51名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

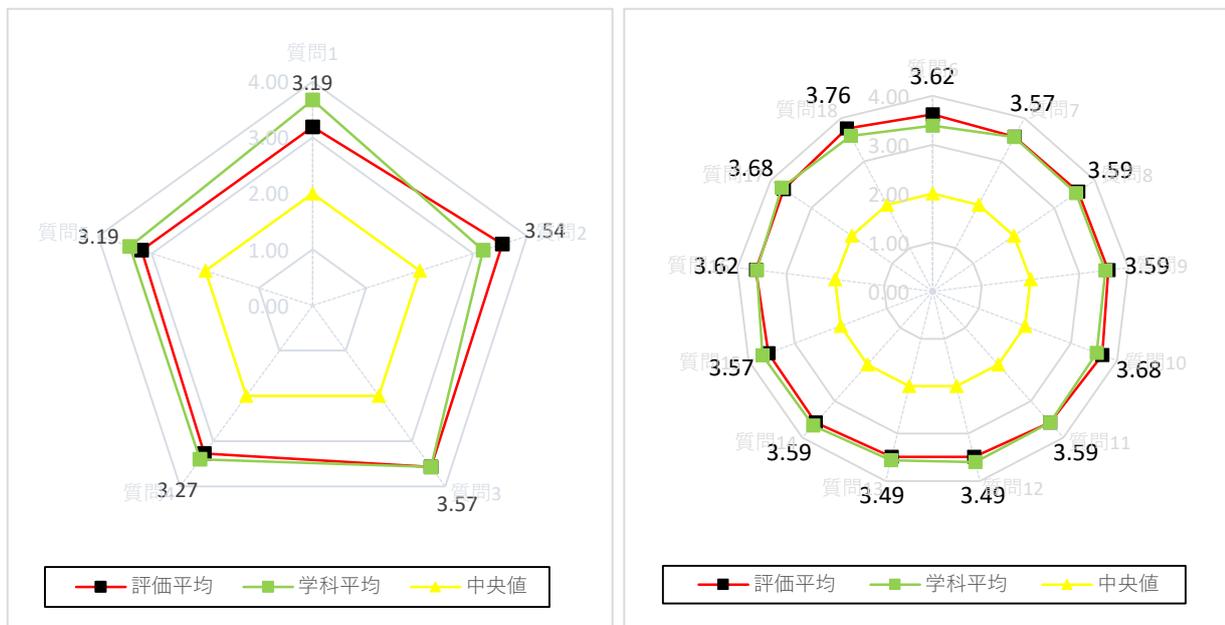
学生による評価に関して、全体的に高く評価されている。この授業では、グループ学習を中心に自分たちで興味ある領域を調べパワーポイントを用いて発表する形をとっている。グループで集まり自分たちで調べ学習している様子で学生同士のコミュニケーションの深まりにもつながっている。また、授業の最初にシラバスを用いて授業方法や目標なども明確にしているため、学生にも浸透しスムーズに授業に対して取り組んでいるものと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も同じ方法で授業を行いたいと考えている。特に質問等を出せるような工夫をして授業に臨みたいと思う。具体的には授業の最後に質問用紙を配布するなど考えてみたい。また学生への公平さであるが、どうしても座席が前にいる学生に話をしたりなどあるため、全体的に巡回をしたりしながら学生にも話をしてみたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学研究法	52名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

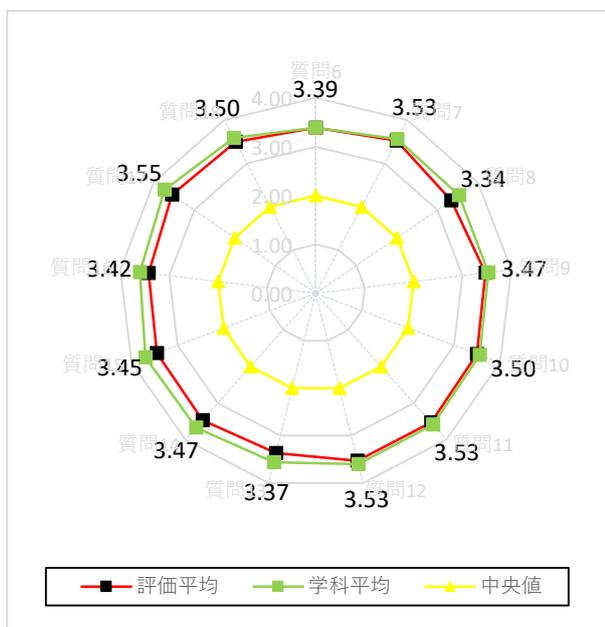
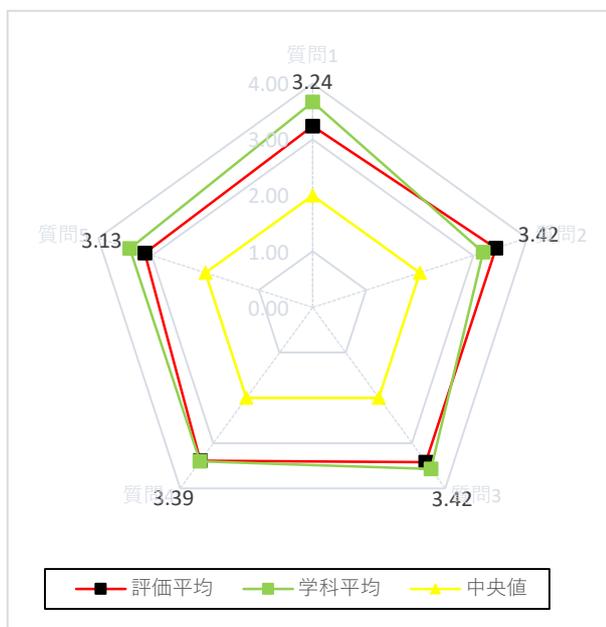
遠隔授業が中心であったが、全般的に高い評価であったと言える。特に、授業後に行われるキーワードや課題などのフォーム入力と、それに対する次回のフィードバックという双方向的やり取りが高く評価されたと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も引き続き、学修満足の伴う授業を展開できるようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学実験 I	49名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

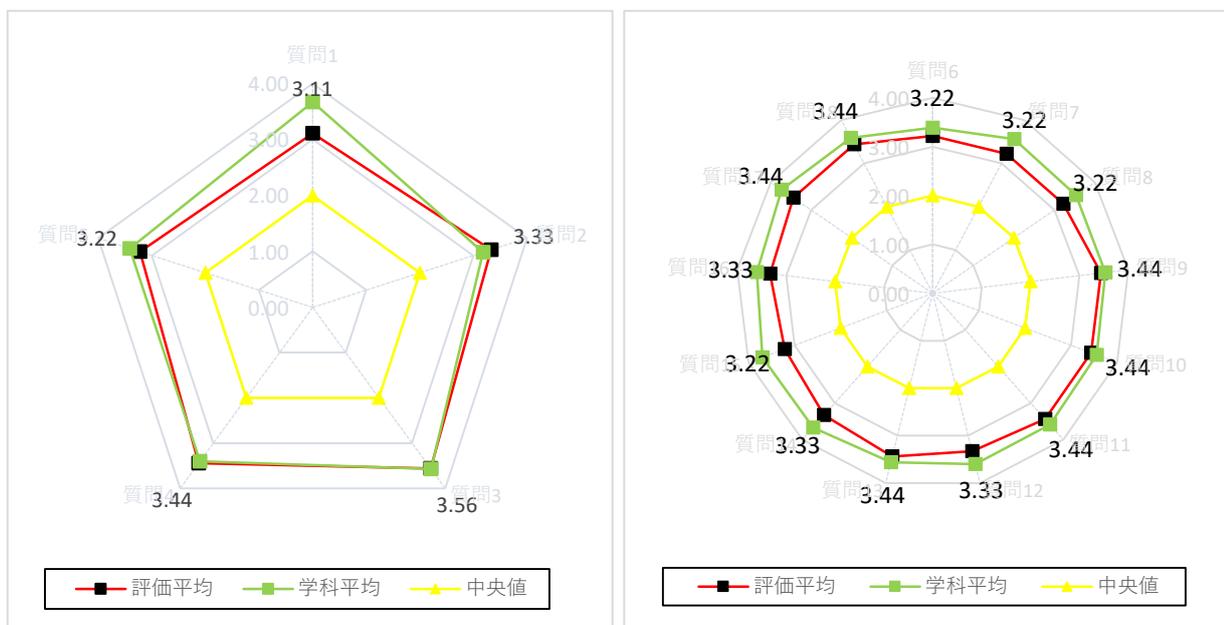
全般的に評価の高い心理カウンセリング学科の中で、レポートの数が多く不得手感を持たれやすい科目として高い評価であったと言える。

(3) 次年度に向けての取り組み

引き続き学生の学修満足が得られるよう取り組む。特記するならば、学生の進捗を確認しながら進めるようにしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学統計法	43名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

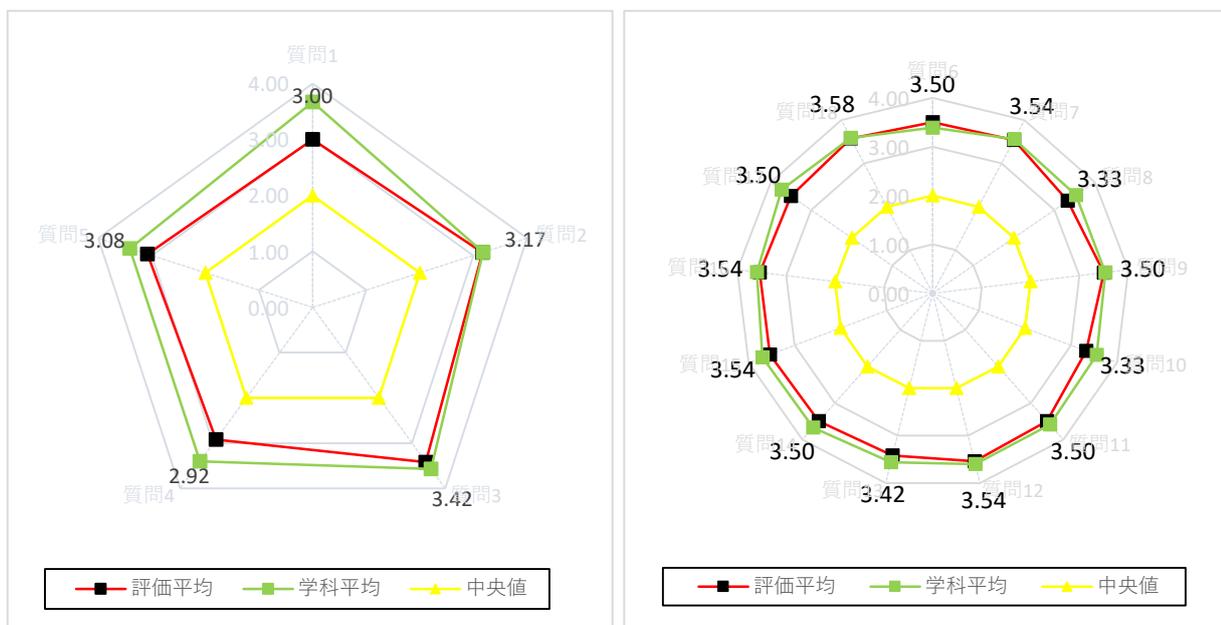
回答者が42名中9名(21%)と低率のため、全体を表しているとは言いがたい。しかし、その中において、初回で説明したシラバスの内容が授業を通して浸透していないかもしれない、また、机上巡視の際に目が届かなかった人がいたかもしれないとは考えるに至った。

(3) 次年度に向けての取り組み

全体から評価が得られるよう、授業中に評価に回答してもらうなどの工夫はしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理的アセスメント I	49名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

受講生の半数程度からの評価回答数を得て、概ね学科平均と同程度の評価となった。

令和3年度前期も新型コロナウイルス感染防止のために講義形式の授業は5月以降原則遠隔形式となったため、本講義でもTeamsによる同時双方向形式の授業が主となった。重要な点を穴埋め式にした資料を事前にTeamsの資料フォルダに提示し、講義では重要点の解説を行うことで授業に集中できる工夫を行った。また、Teamsによる同時双方向型授業の際には、チャット機能を用いその場で疑問点を確認できるようにし、授業内で学生の反応やコメントを求めるなど集中を持続させるようにした。更に授業外課題で理解度把握に努めるとともに、解説や質問の機会を設け、翌日に疑問点に答えることで、疑問を疑問のまま持ち越さないように配慮した。公認心理師国家試験過去問題の解説や、心理検査が研究等でどのように用いられているかをレポート課題とすることで臨床実践に興味を持たせる工夫も行った。

自由記述では、「授業が丁寧でメールの対応が早くありがたかった。」との評価も得たため、今後も双方向性のやり取りをや、質問等への誠実な対応を引き続いて行っていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

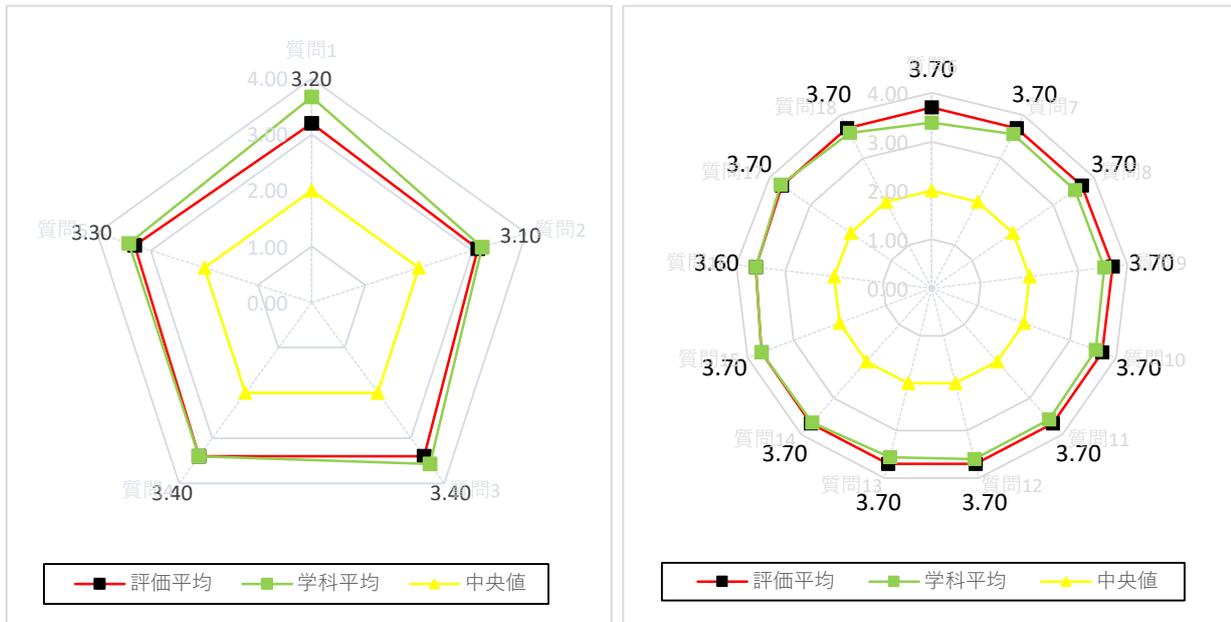
次年度においても、各回の感想・疑問を求める形式を踏襲し、授業内で生じた疑問等に適切に対応したい。資料の工夫や授業外課題等での理解度把握、公認心理師国家試験過去問題の解説や、心理検査が研究等でどのように用いられているかをレポート課題とすることで臨床実践に興味を持たせる工夫などの取り組みは次年度以降も行き、学生の理解に合わせた授業進行に留意していきたい。

令和3年度も令和2年度に引き続き遠隔授業形式で行ったため、学生同士のディスカッションの機会を設けることができなかったが、次年度以降対面授業が可能な場合は、ディスカッションの機会なども提供していきたい。

今回、遠隔形式での授業形態のために、授業評価の回答を行っていない学生も約半数いたため、次年度は講義内での授業評価回答時間を確保していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理的アセスメントⅡ	44名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

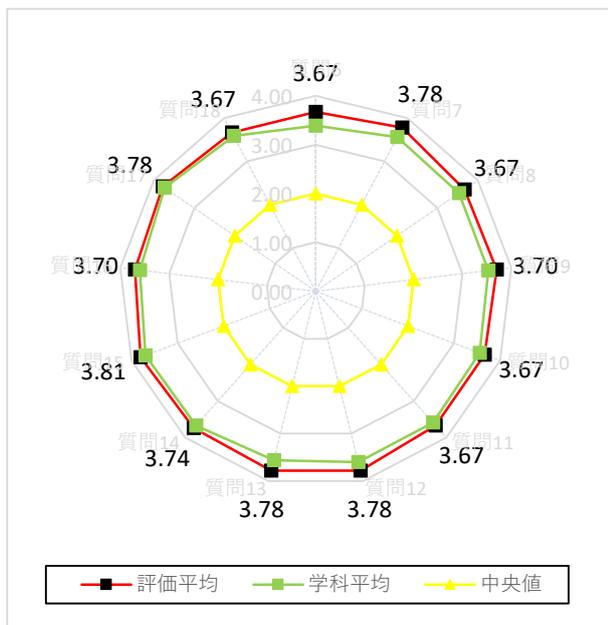
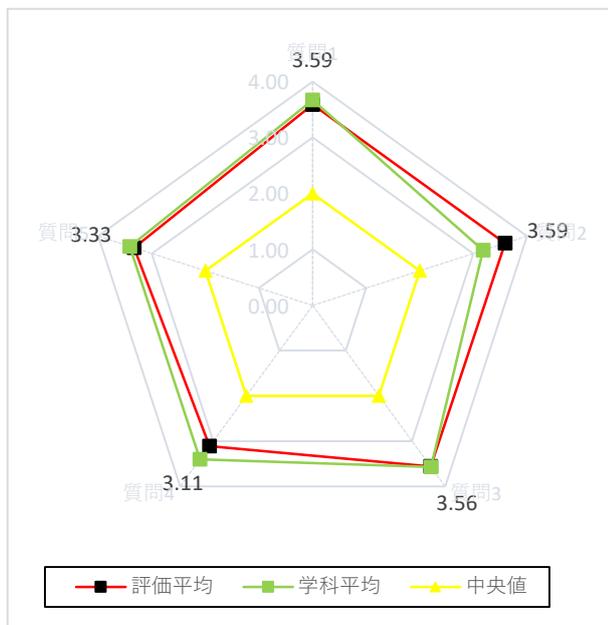
まずまずの高評価が得られたと考えている。実習を取り入れ、また実習のできない内容のものは動画を取り入れて授業を行った。いかに体験学習が学生に意欲に繋がるかが分かる評価である。授業内容で伝えられることの限界がどうしてもあるので、いかにしてリアルに理解してもらえるか、今後も考えていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

今後も実習を多く取り入れた授業内容にしていきたい。学生に心理アセスメントの重要性や面白さに如何にして気づいてもらえるかが本授業の重要なポイントなので、実践を通した授業を今後もさらに深めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング実践演習	47名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

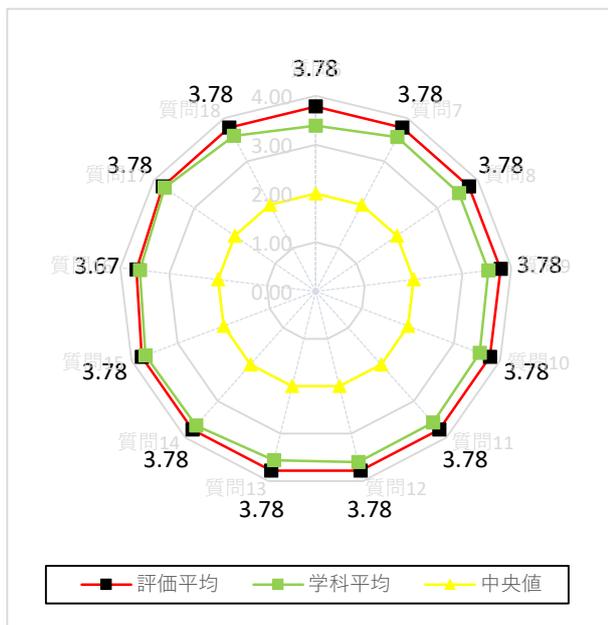
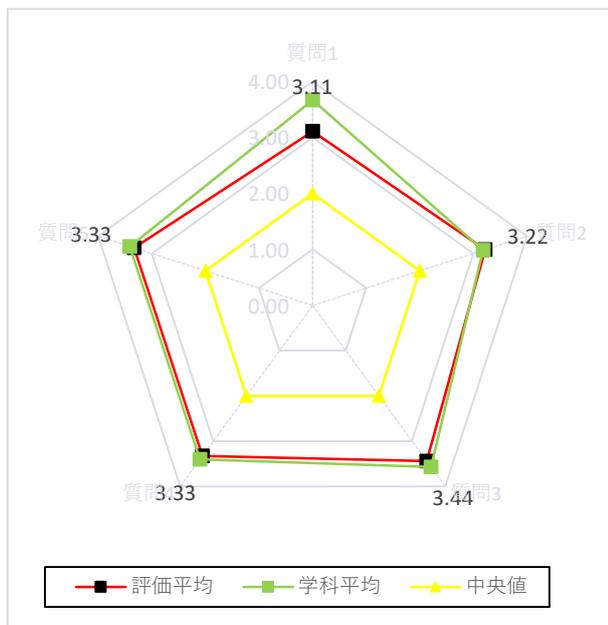
全般的に非常に高い評価であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

引き続き高い学修満足が得られるよう、評価項目に挙げられているような各点の充実に取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		公認心理師の職責	43名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

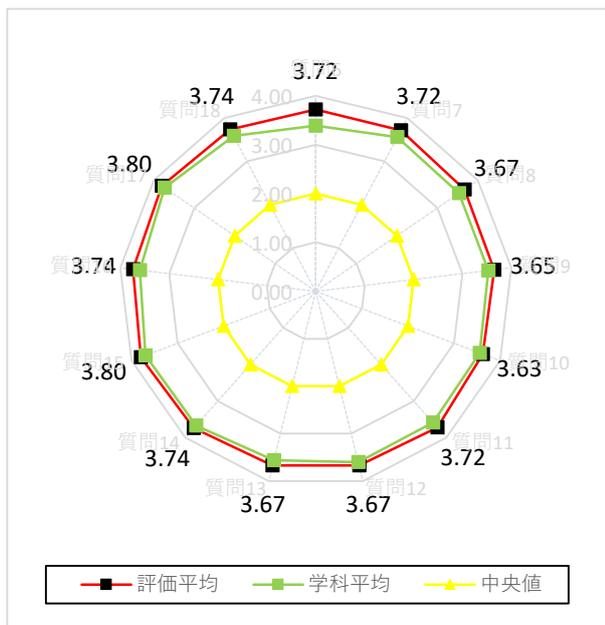
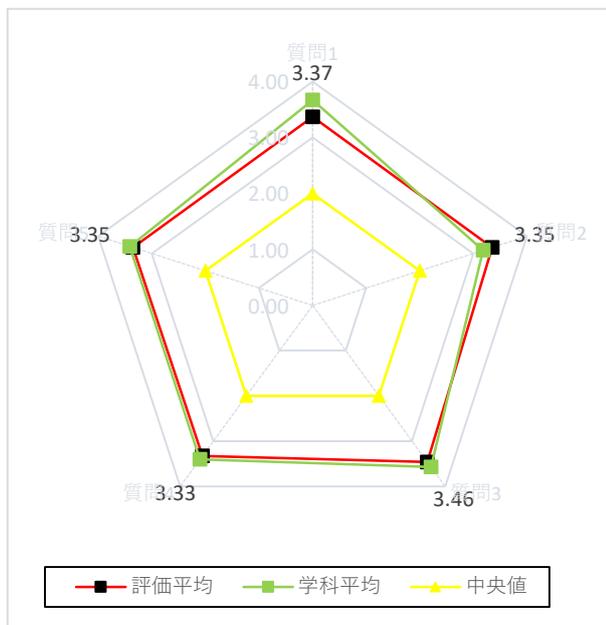
公認心理師資格取得のための重要な科目の1つである本科目について、基本となる理念をしっかりと教えることに努めた。その結果、まずまずの高評価に繋がったと考えている。課題としては、退屈しないように、また集中を途切れさせないような授業の進め方が必要になると考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、学生に理解の深度を求める授業内容にしていく必要があると考える。その為には、小テストをとり入れていくことが重要であろうと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング基礎演習	49名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

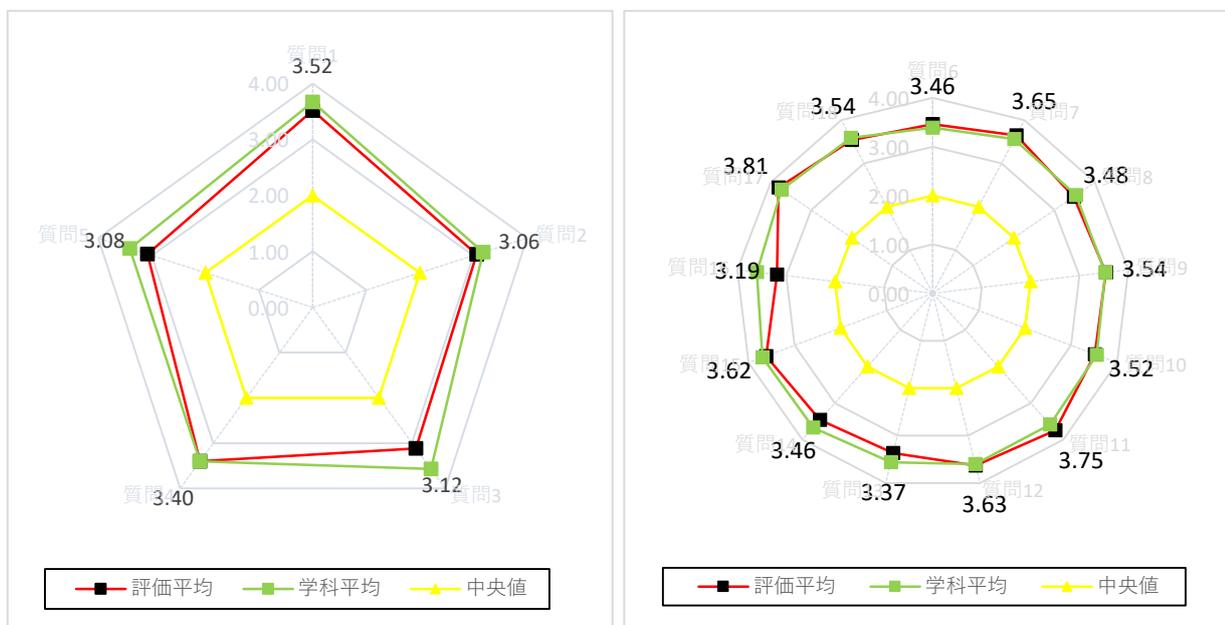
全般的に非常に高い評価であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

引き続き高い学修満足が得られるよう、評価項目に挙げられているような各点の充実に取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		発達心理学 I	52名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

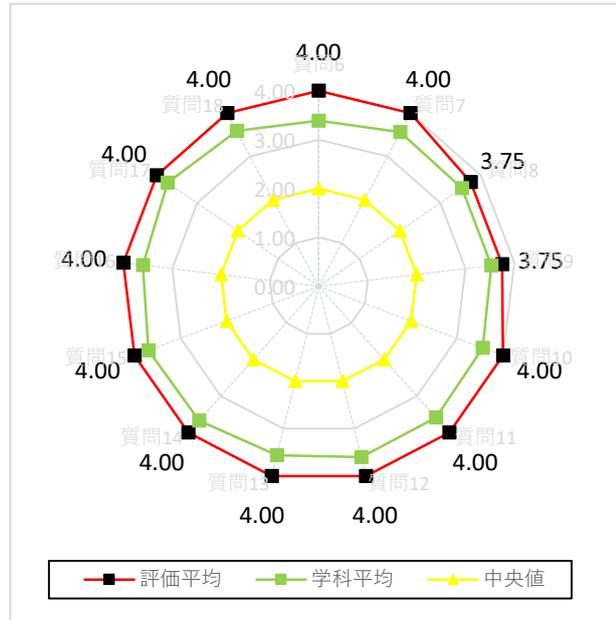
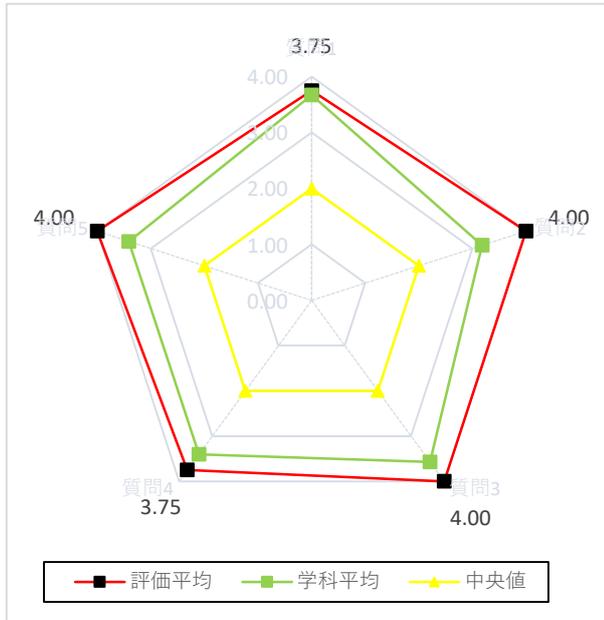
入学してからの最初の授業であり、専門的内容が多く取り入れられた授業である。そのことを考慮して、資料作成に注意を払いパワーポイントで説明をしながら実施した。特に教科書に目を通させ、その後説明を行ない、最後に小テストを行った。すなわち1回の授業で教科書を読み、パワーポイント、資料を用いて説明し、その後小テストで確認をする方法である。学生は、少しずつ授業の形にも慣れ、内容も理解するようになりテストの平均も高いものであった。やはりきめ細かな授業方法が重要であると感じた。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生には評価が高い科目であった。次年度は他の教員が担当することになり、今までの内容について教員にも説明をし継続してもらうようお願いをした。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理実習	32名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

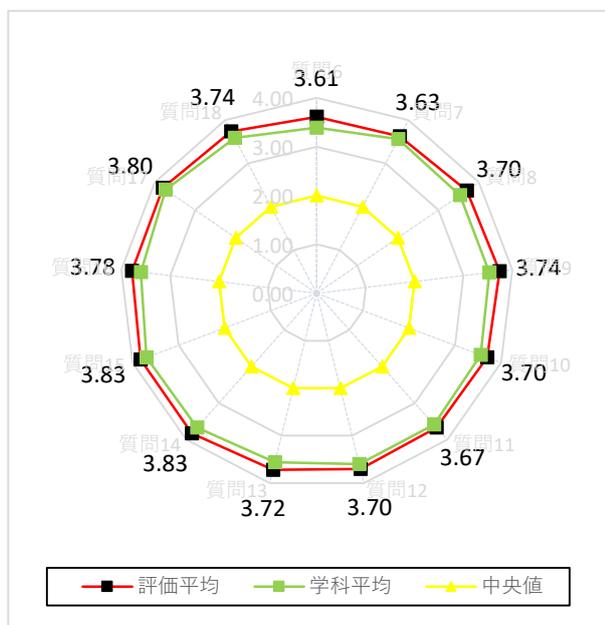
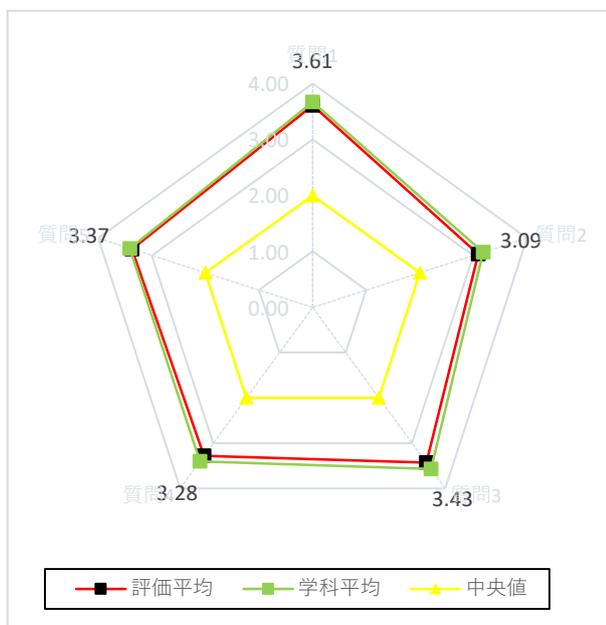
高評価を得ているため、このままの実習内容の質を維持していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

実習先の講師の都合や、コロナ禍での実習になるため、不透明なところが大きいですが、出来る限り現場に即した実習になるように工夫していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		発達心理学Ⅱ	50名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

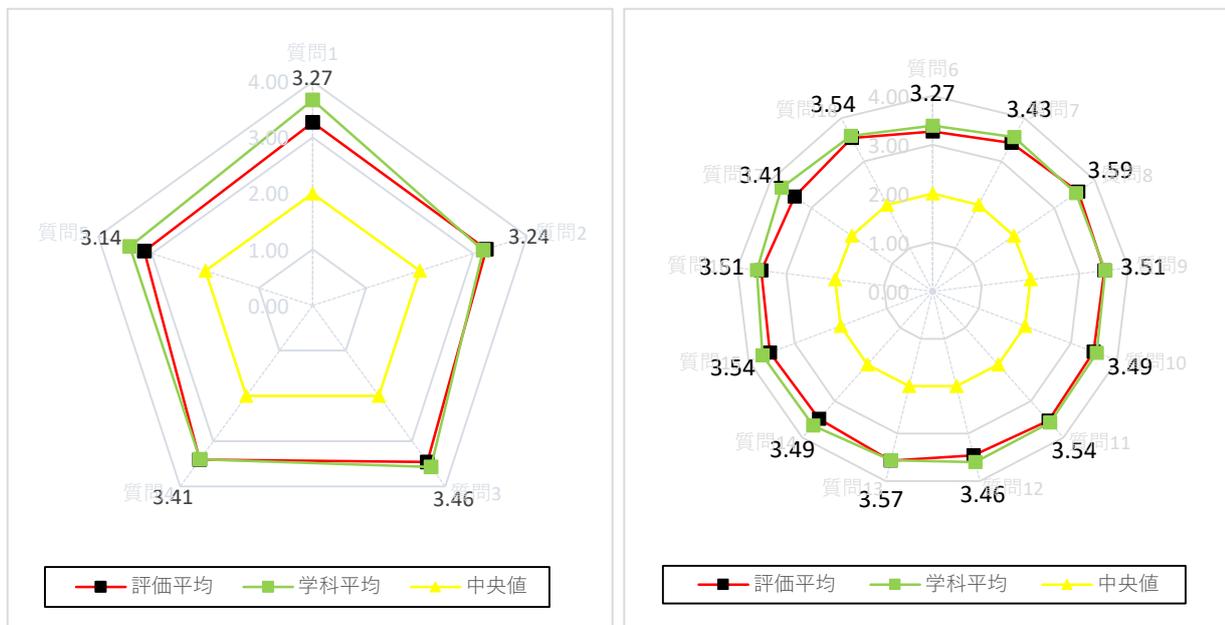
概ね高い評価を得ている。このまま継続していきたい。内容については、若干の修正を加えたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

内容に関しては、新しい研究成果等を加えながら、新しいものに改定していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		思春期・青年期心理臨床	46名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

シラバス（授業計画）についての説明を詳細には行わなかった点が反省すべき箇所の一つである。こちらの熱心さが学生に伝わっていないのも反省すべき点だが、こちらの授業の意図が伝わってなかった可能性が考えられる。内容的に難しかった所があるので、もう少し平易な表現で伝える必要がるものと考えられる。

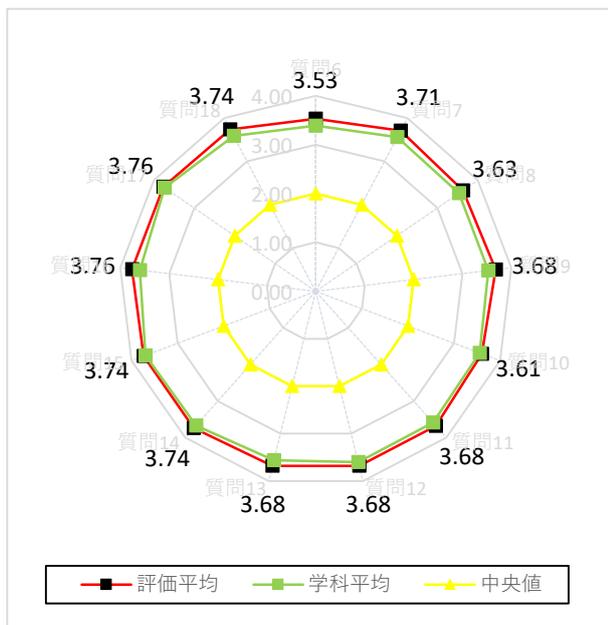
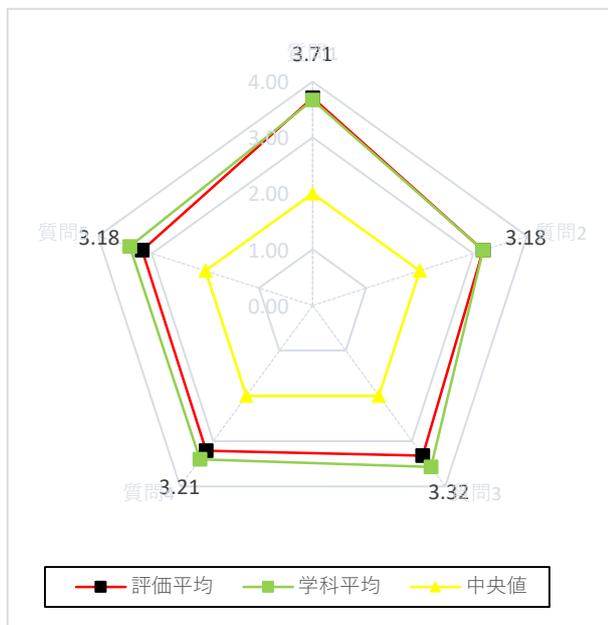
たの評価点はほぼ学科平均と同じであり、適切な授業内容であったと考えられる。しかし、とびぬけた評価がないので、特徴を出しきれなかったことが悔やまれる。もっと、体験学習を組み入れればよかったと反省している。

(3) 次年度に向けての取り組み

本科目は2021年度で終了のため、次年度に向けての取り組みはないが、他の科目に上記の反省点活かしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		乳幼児心理学	43名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

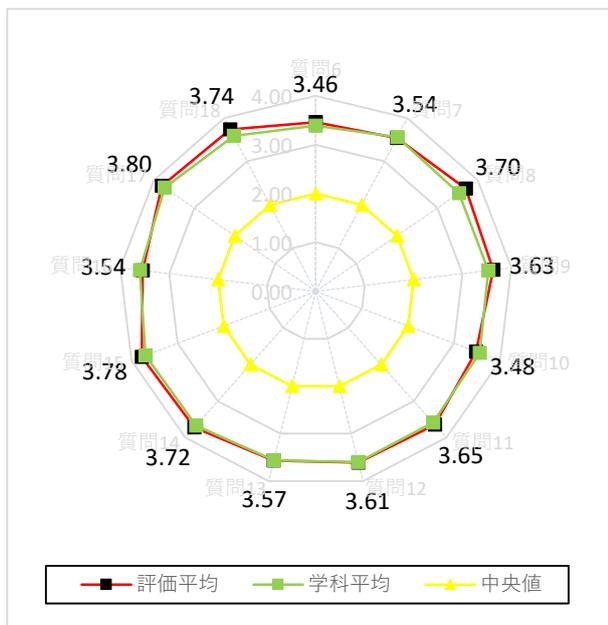
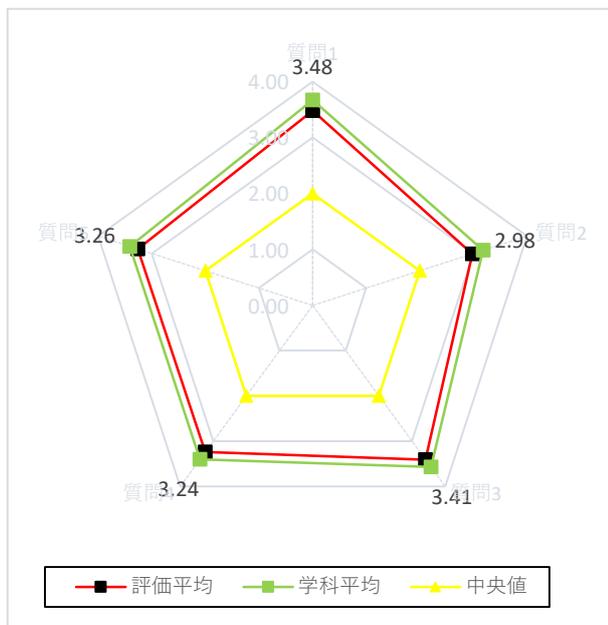
学科の平均よりも高い評価が多かった。
 しかしながら、質問3～5の学生の主体性や意欲が伸びていない結果となった。
 遠隔の授業となり、学生に対しての意識付けや自分で学ぶ力を育む工夫が必要であることが課題となった。

(3) 次年度に向けての取り組み

遠隔もしくは、対面授業において、学生が主体的に考え、発達を見る力につなげていくために、乳幼児心理学を学ぶ意義について学生と双方向のやりとりを通して一緒に考えていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		児童臨床心理学	52名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

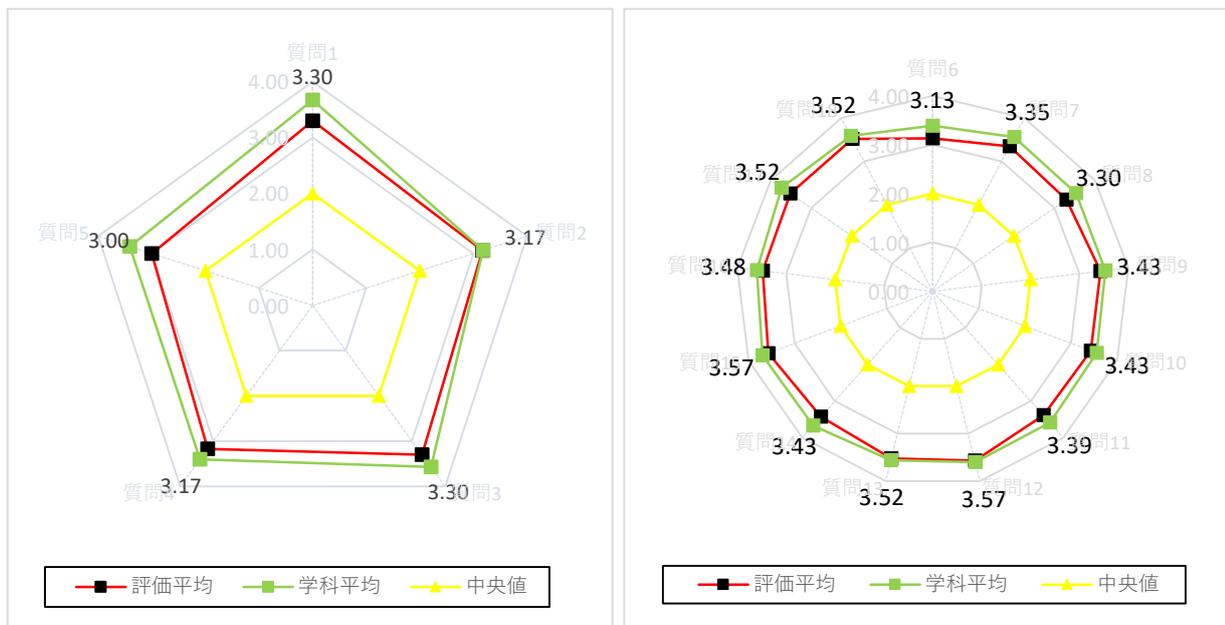
ほぼ学科平均を上回っている。学生の主体的な授業参加に繋がったとは言い難いものの、こちらが準備した内容は学生に伝わったと考えられる。視覚的な教材をを利用し、学生に考えてもらうことを意識した。ただ、この科目でもシラバス（授業計画）を詳細に説明していなかったことが、全体を通しての授業の流れを理解に不足をもたらしたのではないかと推測する。また、情報量が多く、学生に授業進度が早いことや、難解であったこと等を感じさせたかもしれない。

(3) 次年度に向けての取り組み

この科目は2021年度で担当を終了した。残念ながら、蓄積した情報・知識を次年度に行かせることができなまま終わることになった。授業進度を学生のペースに合わせながら、しっかりと理解させながら授業を進めていくを必要性があると考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		健康・医療心理学	42名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

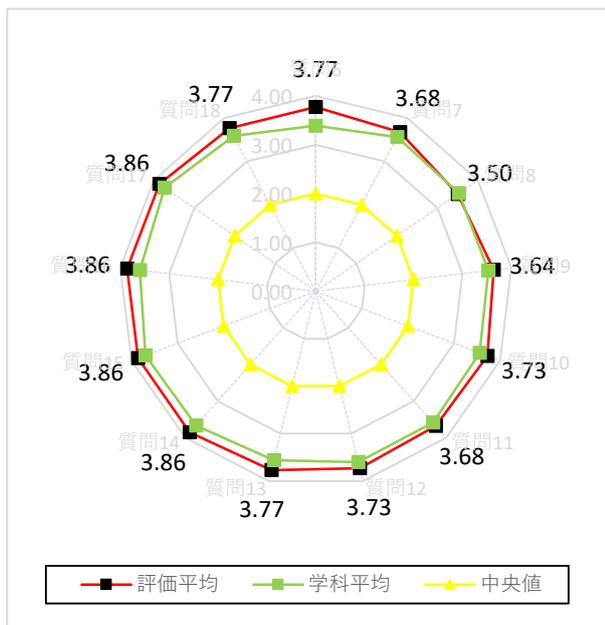
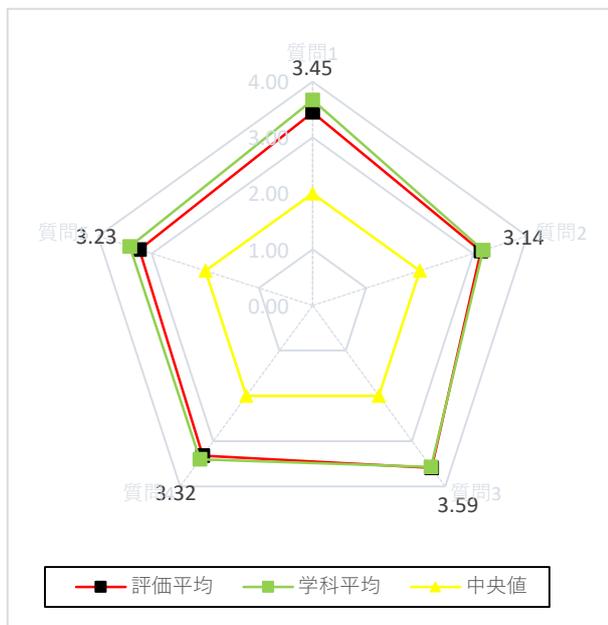
知らばs (授業計画) を詳細に話すことをしなかった点が大きな反省箇所である。授業が興味・関心を持てる工夫にかける評価になっていることも大きな反省点である。公認心理師受験科目であることから、知識を伝えることが授業の中心になってしまったためであると考えている。また熱心に授業を進めている印象を与えていないと感じられていることが気にかかる。知識伝達中心の授業になりがちで、機械的な進め方だったと反省しており、今後の課題としたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

創意工夫を行って、知識がしっかりと定着する方法を考えて導入していきたい。その為には、先ず授業計画をきっちりと学生に伝えることが先ず重要であると考え。その上で、知識定着のための工夫を取り入れていきたい。遠隔授業が中心となっていたため、対面に代わった今年度は創意工夫を凝らし、学生の興味関心を引き出していきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		学校心理学	40名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

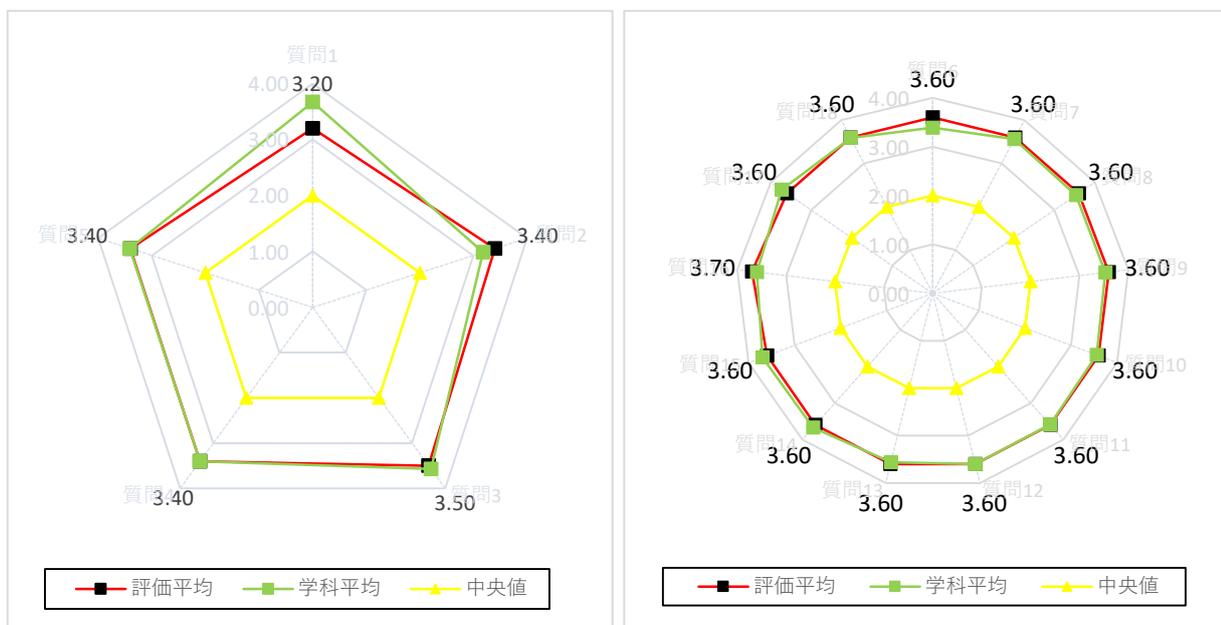
概ね高い評価を得ている。内容と質を落とさないように続けていきたい。また、関心を持てるように、資料等を工夫して提示するように考えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

資料等の工夫や刷新を考えている。より新しい資料や研究データを用いて紹介したい。また、演習等のワークも取り入れたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		社会・集団・家族心理学 Ⅱ（家族心理学）	41名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

令和3年度の回答者数が受講者の4分の1にとどまり、回答数が少なかったことは課題である。最終授業回で学生の発表後にDVD視聴を行ったため、回答時間を確保することができなかったことが要因として挙げられる。

教員への評価は全ての項目で学科平均と同程度であった。本授業は時間割や新型コロナウイルス感染拡大の関係で、授業回の3分の1程度を対面で、3分の2程度をTeamsによる同時双方向型の遠隔授業形式にて行った。

家族心理学に関する様々なテーマに関して、学生が調べたことを発表し、テーマに関連するグループディスカッションを取り入れ、教員が解説を行う形で行った。授業終了時の感想では、「グループワークで色々な意見が聞けて良かった」「自分たちで調べることでより理解できた」との感想が見られていた。昨年度課題としていた発表時間と解説時間のバランスについては、初回に発表時間の目安を周知し担当表にも記載をしたことで、今年度は特に意見は見られなかった。

(3) 次年度に向けての取り組み

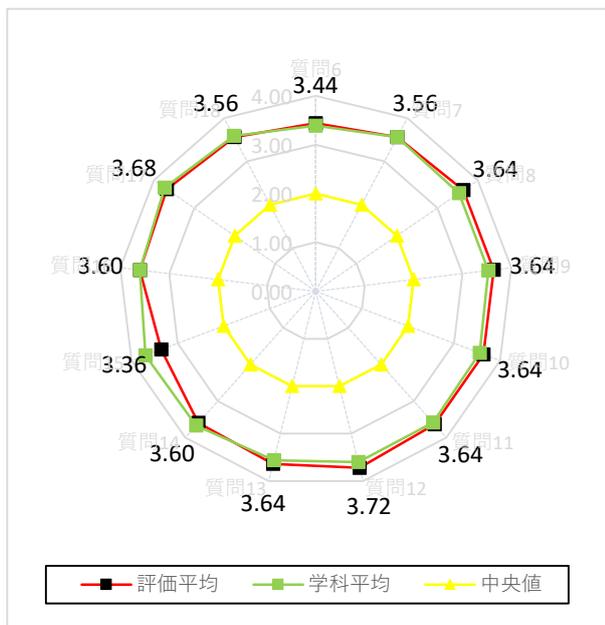
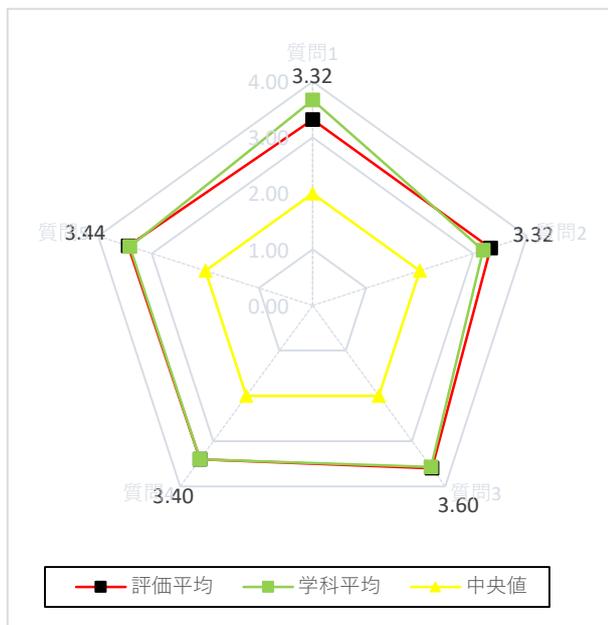
次年度以降は、授業評価への回答時間を授業最終回に十分に確保し、回答数を増やすことを意識したい。

また、学生の主体的学修推進のための授業形式であることの周知を初回時に徹底することも引き続きおこなっていききたい。可能ならば遠隔でなく対面式の授業を行い、グループワークの取組みの際に学生の主体的な取り組み状況を把握することが求められる。公認心理師資格試験の過去問解説などは、今後も継続していきたいと考える。

視聴覚教材の視聴は学内のネットワーク環境が整ったことで遠隔形式授業でも行えたため、次年度以降は対面形式・遠隔形式どちらの場合にも、必要時には視聴覚教材視聴なども行っていききたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		遊戯療法	46名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

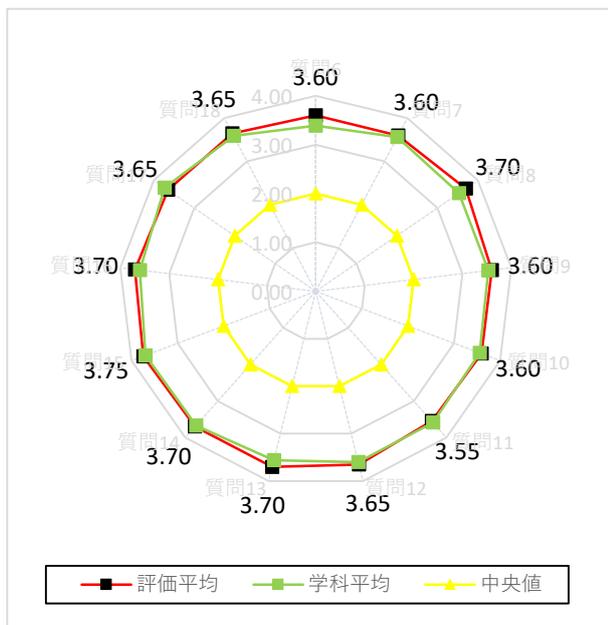
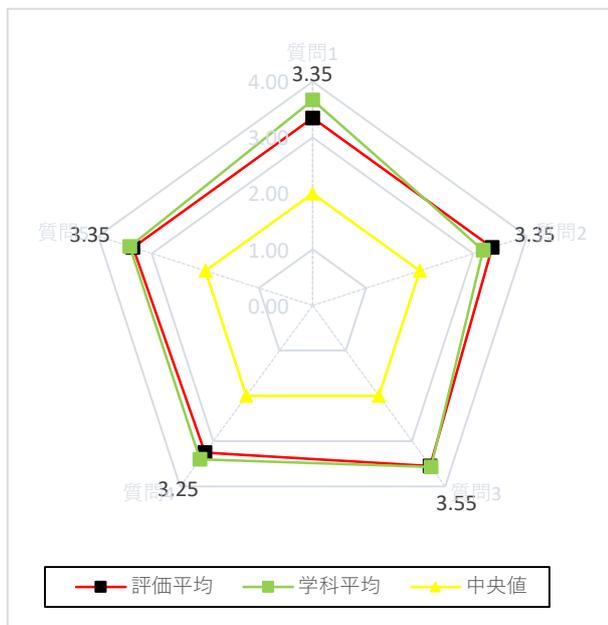
学生による評価に関して、全体的に高く評価されている。この授業では、グループ学習を中心に自分たちで興味ある領域を調べパワーポイントを用いて発表する形をとっている。グループで集まり自分たちで調べ学習している様子で学生同士のコミュニケーションの深まりにもつながっている。また、定期的に演習を入れ（描画やコラージュなどの心理療法技法）学修した内容の再確認を行っている。これも学生には好評であり今後も継続していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生からは高く評価されている科目であり、今後も継続した方法で取り組んでいきたい。コロナかであるが対面でのやり取りがとても重要であり、コロナに対する予防をきちんと取りながら行っていきたい。授業の始まりに再度シラバスに注目させ、目標や授業内容を理解させていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		芸術療法Ⅰ（基礎理論と箱庭療法・コラージュ療法）	37名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

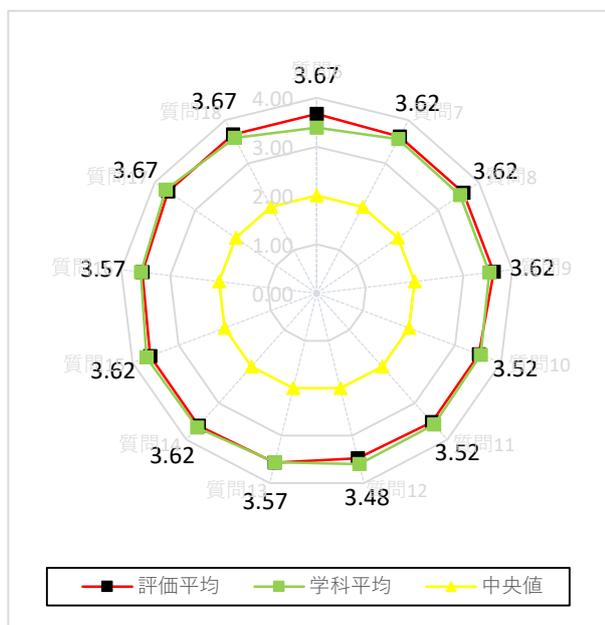
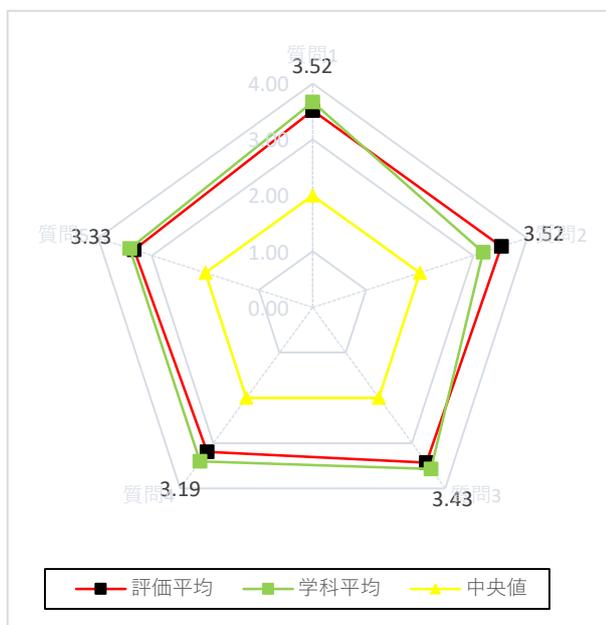
この授業は芸術療法の理論を中心に講義を行い、その後体験をしながら学んでいく方法である。特に描画療法、コラージュ療法、箱庭療法を中心に行っている。学生をほとんどの学生が興味を示して居り熱心に取り組んでくれた。また、今後の卒論や大学院進学での研究に意欲を持つ学生もみられ学習意欲の高まりも感じられた。その中でも体験を通したレポートは、自己内省ができるようになり、自己に向き合いながら学生生活を送ることの大切さを体験している学生も見られた。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も継続した方法で行いたい。この授業は大学院生のTA活動にもずいぶん助けられており、今後も継続してお願いしたいと考えている。また、時間を取って、体験学習のふりかえりを兼ねて発表会を行いたいと考えている。時間の配分が必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		芸術療法Ⅱ（心理劇の理論と実際）	40名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

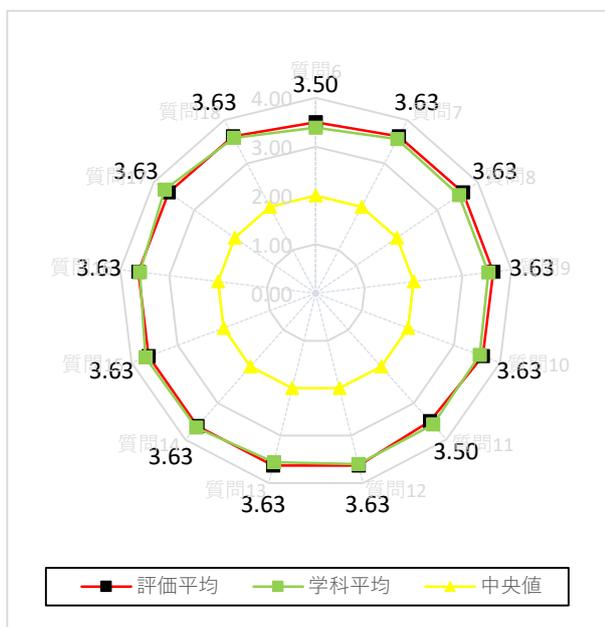
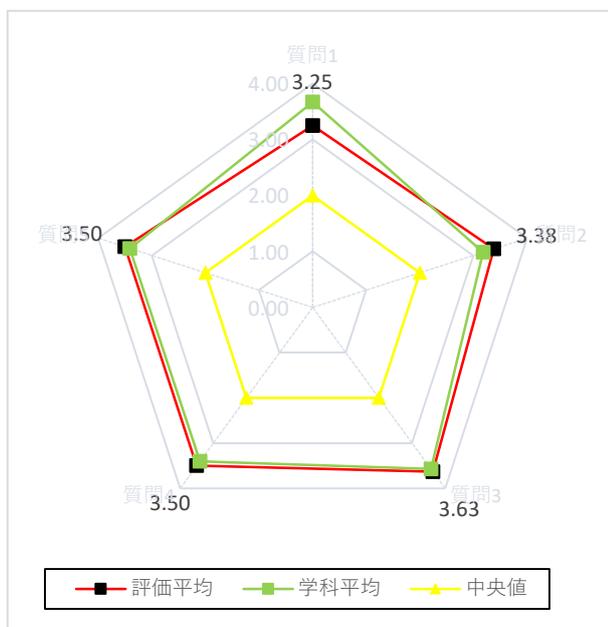
初めての授業であったが、他の当学科開講の授業と遜色なく全般的に高い評価が得られた。受講者40名を2つに分けたことで授業に参加しやすかったとの自由回答があり、適正な規模で一人一人の反応をうかがいながら授業ができたという教員の自己評価を支持していると考えられる。「シラバスを活用した」の評価は、授業準備及び事後学習において、テキストをシラバスの記載箇所にしたがって読み進める指示があったためと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度のフィードバックを参考に、次年度も引き続き、学修満足が得られる授業運営に取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		芸術療法Ⅲ（芸術療法の実際）	35名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

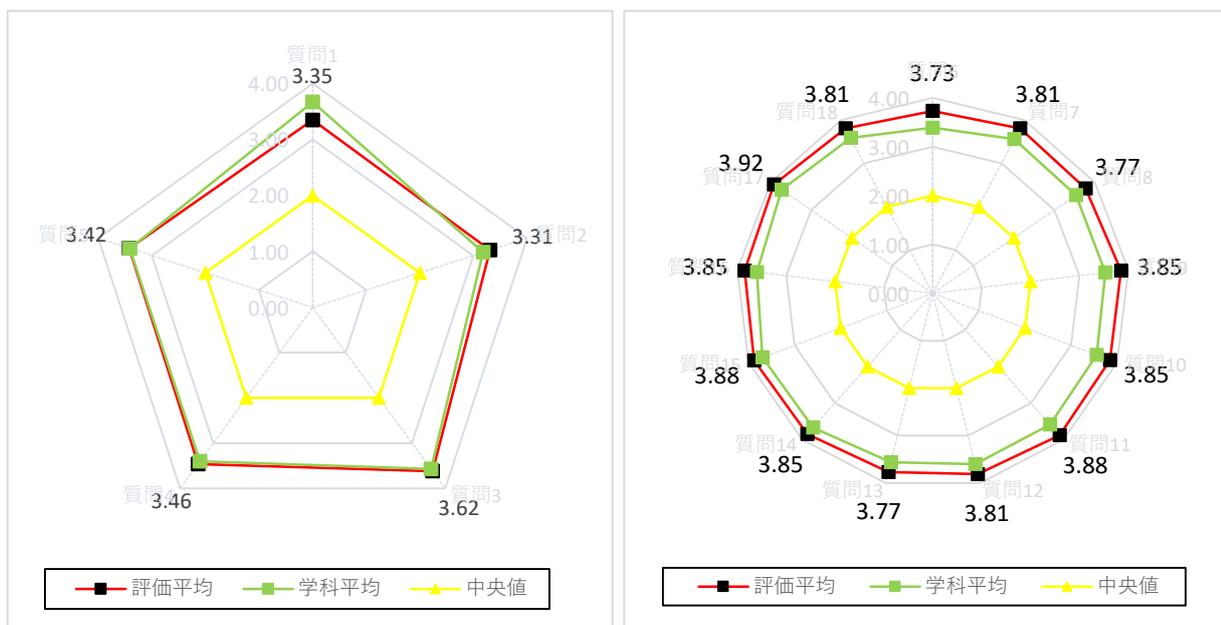
概ね高い評価を得ている。新型コロナウイルスの影響下であり、演習の実施に制限があるなど難しい面もあった。そのため、評価もわかることになったかもしれない。

(3) 次年度に向けての取り組み

新型コロナウイルスによる影響次第であるが、出来る限りの対策を講じて、実施したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		感情・人格心理学	44名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

授業評価回答数は受講生の約半数であった。全ての項目で学科平均を上回る結果となった。

令和3年度は新型コロナウイルス感染防止のために5月以降Teamsによる遠隔双方向形式での授業を行ったが、重要な点を穴埋め式にした資料を事前配付し、講義では重要点の解説を行うことで授業に集中できる工夫を行った。そのような配付資料の工夫が質問11の結果に反映されたと考えられる。同時双方向型授業の際には、チャット機能を用いその場で疑問点を確認できるようにし、更に授業外課題でも理解度把握や質問の機会を設け、翌日に疑問点に答えるなどすることで、疑問を疑問のまま持ち越さないように配慮したことが、質問14の評価につながったと思われる。

今後も授業内容や課題に対する解説を細やかにを行い、また質問等への誠実な対応を行うことで学生が理解を深められるような授業を進めていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

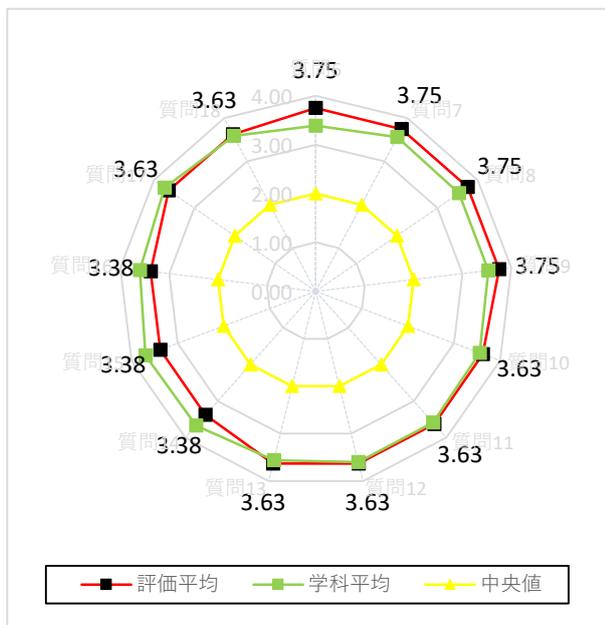
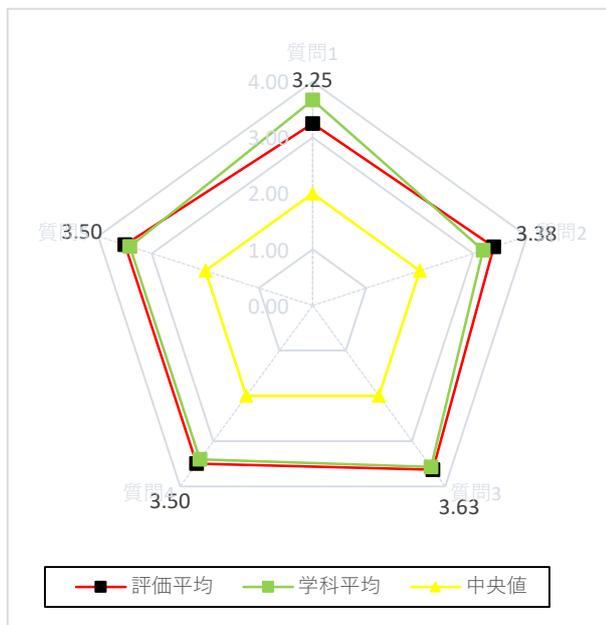
次年度においても、各回の感想・疑問を求める形式を踏襲し、授業内で生じた疑問等に適切に対応したい。配付資料の工夫や授業外課題等での理解度把握などの取組みは次年度以降も行い、学生の理解に合わせた授業進行に留意していきたい。今後も授業内容や課題に対する解説を細やかにを行い、また質問等への誠実な対応を行うことで学生が理解を深められるような授業を進めたいと考える。

令和3年度は主に遠隔授業形式で行ったため、学生同士のディスカッションの機会を設けることができなかったが、次年度以降可能であればディスカッションの機会なども提供していきたい。脳機能に関する視聴覚教材などは、引き続きより分かりやすい資料を検討していく。

今回、授業時間や遠隔形式での授業形態のために、授業評価の回答を行っていない学生が半数程度いたため、次年度は講義内での授業評価回答時間を確保していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理演習	35名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

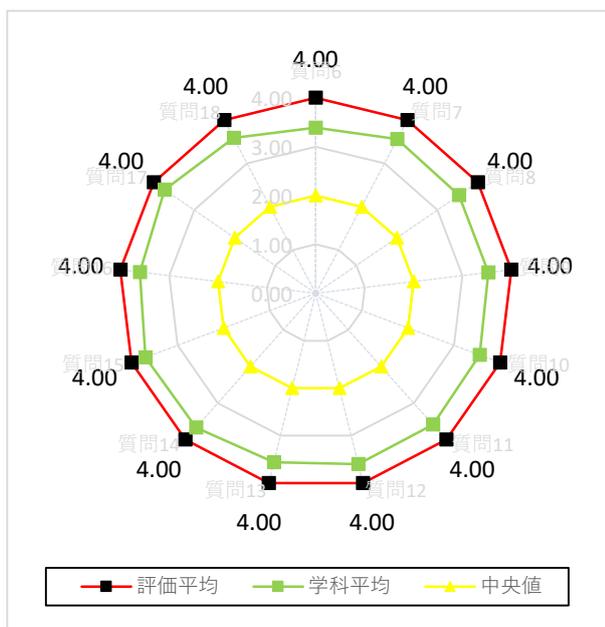
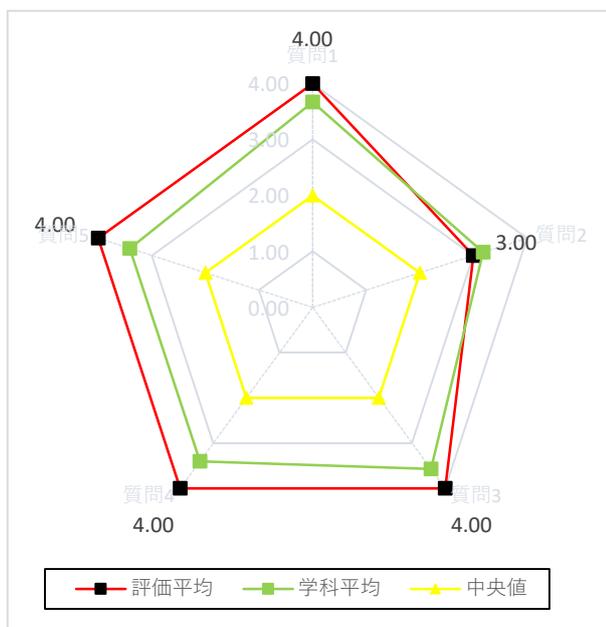
回答者数が35名中8名（23%）と低率で全体を表しているとは言いがたい。しかしその中では、前半の授業設計に関する項目は評価が特に高かったと言える。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は担当教員及び授業内容が一部変わるが、引き続き、シラバスの内容と授業目標が学生に意識し続けられるような授業展開を行いたい。
そして、授業評価の回答率を高める必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

シラバス（授業計画）を十分に利用しなかった点は反省すべき箇所である。しかしながら、各学生の論文指導においては、各自の進度が異なるので、適宜合わせていく必要性を感じ、シラバス通りには行かなかった。その他の結果は学生中心の授業なので、満足いく評価を得られたと考える。

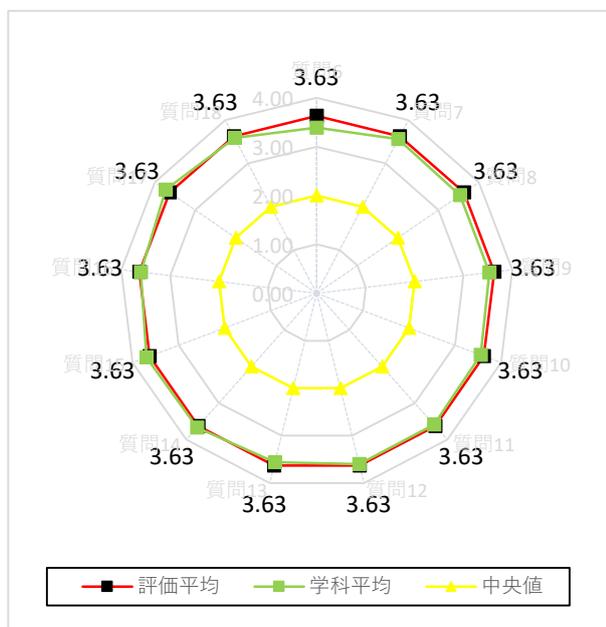
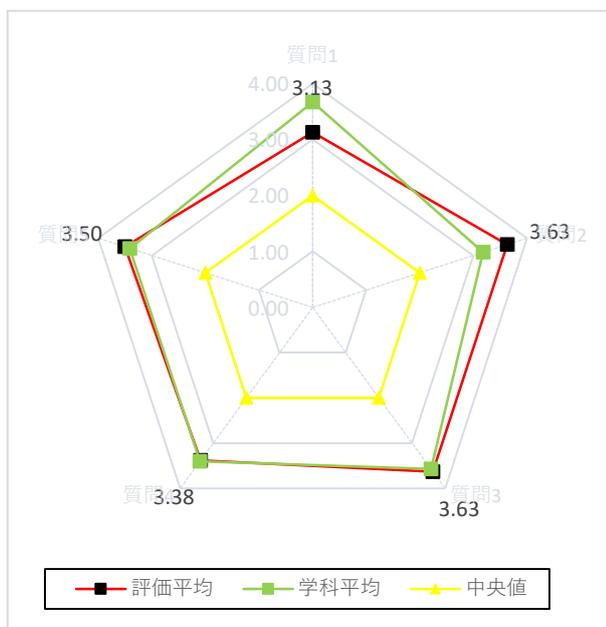
(3) 次年度に向けての取り組み

卒業研究のテーマを如何にして見つけることができるかが、次年度に向けての重要な課題となると推測する。

本授業については、次年度も力を注いで進めていきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カルチャーと心	37名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

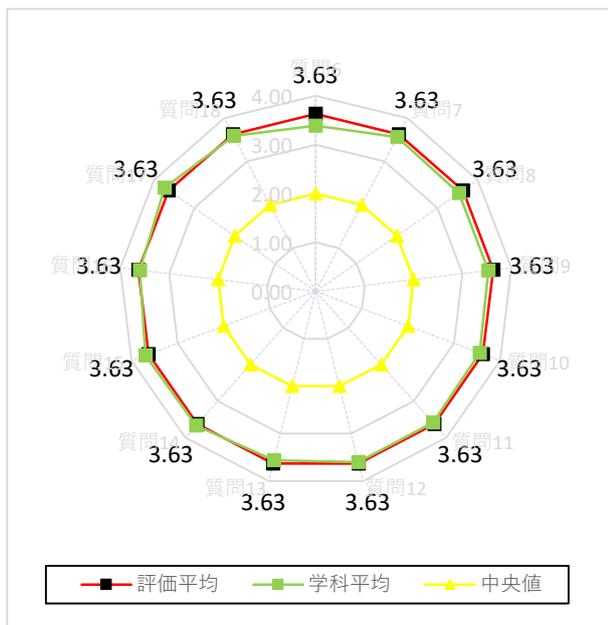
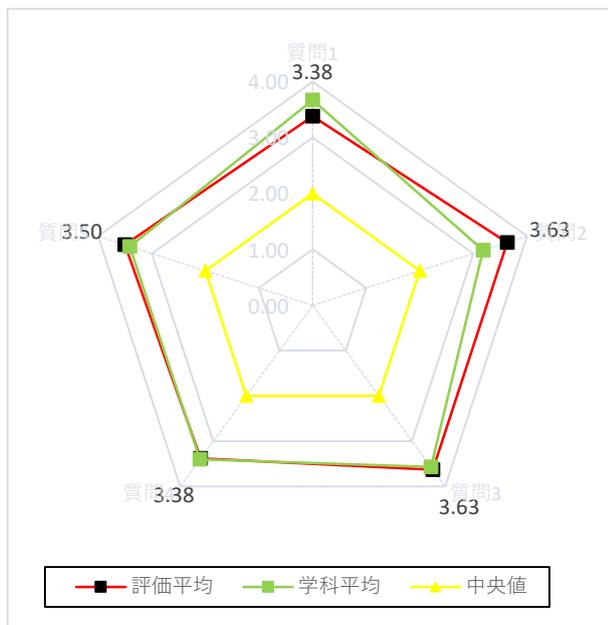
概ね高い評価を得ている。しかしながら、講義内容（取り上げるテーマ、研究内容）に偏りがあったかもしれない。一部の学生には、やや認識しにくい内容であったかもしれない。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、もう少し幅の広い内容と研究テーマに絞って、解説を加えていきたい。出来るだけ認識しやすい形に工夫して資料等を作成していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		アニメ・映画・絵本と心理学	32名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

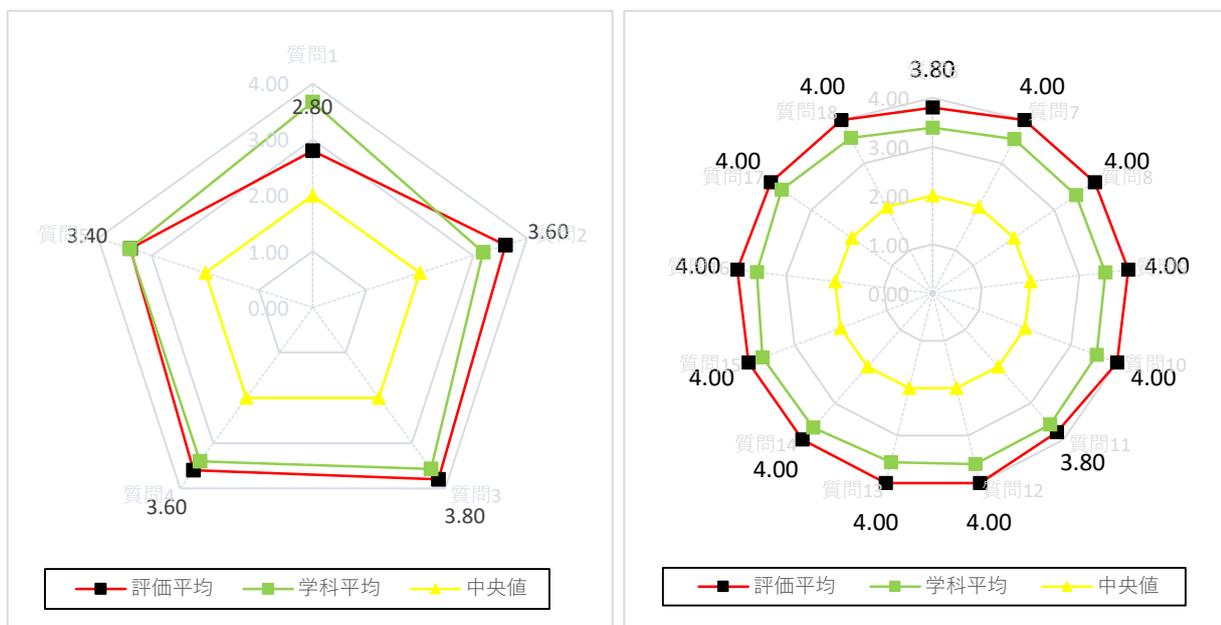
この科目は新カリキュラムになってのはじめての科目である。このような授業を行っている大学は少ない。そのため学生が興味を持てるように工夫をしながら行っている。映画の選択も年代に応じたものや青年期をテーマにしたものを選び、終了後レポートを毎回書かせている。学生は映画やアニメから自分について考えそれをまとめている。この授業も自己内省ができる科目と思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生の意見を取り入れながら作品を選び、今後も継続して行っていきたい。内容的には時間数が少なくもう少し時間が欲しいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理専門ゼミナール	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

令和3年度の回答者数8名中6名であった。授業最終回の個別指導の待ち時間に学生に回答を促したことで一定数の評価を得たと思われる。

本授業は、covid-19の影響や時間割の関係で前期後期共に遠隔にての授業となり、Teamsによる同時双方向型の遠隔形式で、個別指導や全体指導をおこなった。教員に対する評価については全ての項目で学科平均を上回り、双方向性や公平性、速やかな連絡などに留意しながら指導を行ったことが結果に反映していると考えられる。

前期前半は研究論文を書くにあたってのアカデミックライティングの復習や研究の留意点について文献購読を行った後、前期後半から後期は学生が自分の関心あるテーマについてレポートや発表資料をまとめ発表するという授業を主軸に行った。学生自身の主体的取り組みが自己評価の高さにもつながったと考えられる。学生が提出した課題や発表の際などに適切なフィードバックを行うことを意識して指導を行ったことも評価につながったと考えられる。

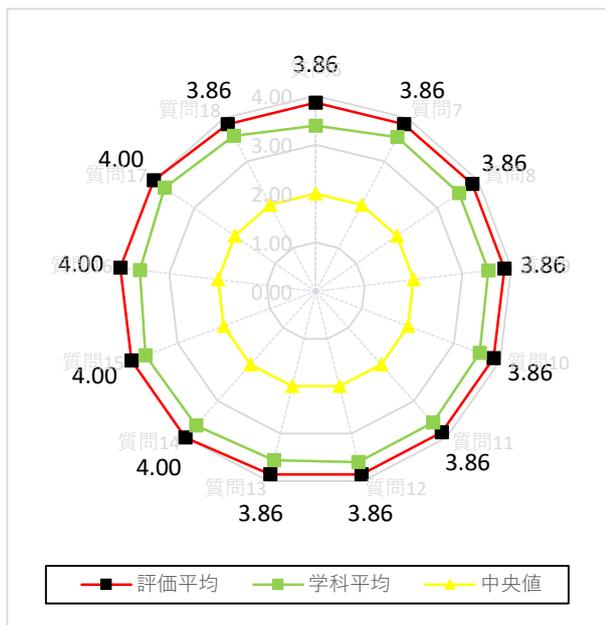
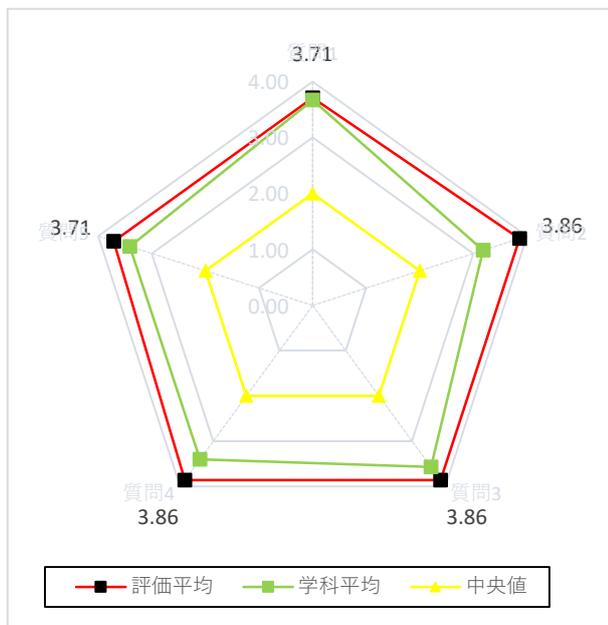
(3) 次年度に向けての取り組み

授業最終回の個別指導の待ち時間に学生に回答を促したことで一定数の評価を得たため、次年度以降も授業最終回に授業評価に取り組む時間を確保することを意識したい。

令和3年度も時間割の関係で前期後期共に遠隔授業となり、Teamsによる同時双方向型の遠隔システムで全体指導や個別指導を行ったが、次年度以降も時間割の都合上遠隔となる場合は、今年度同様に双方向性や公平性、速やかな連絡などに留意しながら指導を行っていきたい。対面での指導が行える場合は、集団指導と個別指導のバランスを取りながら、効果的な指導を行うことを意識したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナール I	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

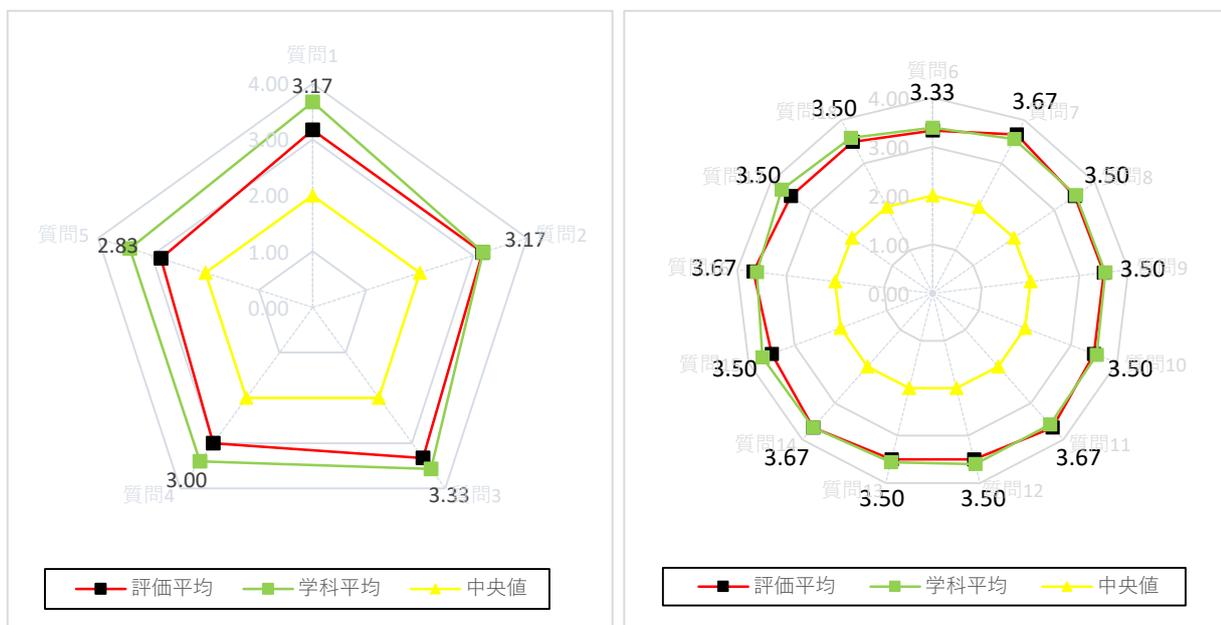
概ね高い評価を得ている。一方で学科共通して行われる内容も多いため、評価は難しいところもある。しかしながら、学生の声に耳を傾けながら、改良していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

内容については、就職支援に向けた取り組み、資格取得に向けた取り組みを充実させていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナール I	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本講義はゼミ指導・個人指導と学科全体での授業形式とが混在しており、ゼミ指導においても各教員の指導体制が揃うよう、事前に調整を行って授業が行われた。評価として、学科平均同程度であった。

ゼミ指導で使用した教材はアカデミック・スキルの向上を目指すものであったが、卒業論文とのつながりなどモチベーションを上げる言葉かけなどを意識した。質問7で評価が平均を少し上回ったのは、そのような言葉かけも影響したと思われる。

学生自身のセルフマネジメント能力を高めるための取組みとその指導や、学生自らの興味関心がある文献の収集や分析等を行う課題など、学生の主体的な取り組みとそれに対する個別指導を行う授業内容が主であったものの、前期期間の新型コロナウイルス感染拡大状況による遠隔形式授業となる回数が多かった。その影響が、学生の自己評価等は一部平均を下回ったことにつながったと考えられる。

授業評価回答数は、最終回での評価を求めたことで、欠席者以外からは回答が得られたため、次年度以降も最終回に評価のための十分な時間をとれるよう授業計画を行っていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度同様授業担当するすべての教員で授業内容や教授方法などについて十分話し合いコンセンサスを得る時間をとることで、より分かりやすい授業構成につなげたい。また、学生のためになる、より適切な教材の検討などさらなる内容の工夫を行えるよう準備を行っていきたい。

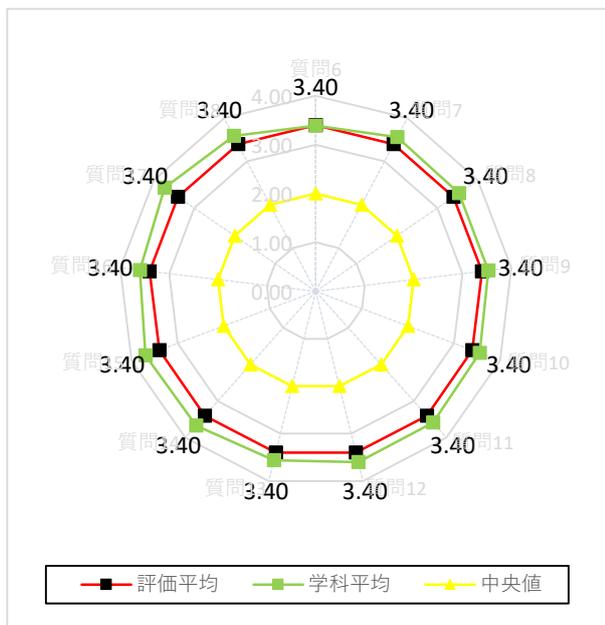
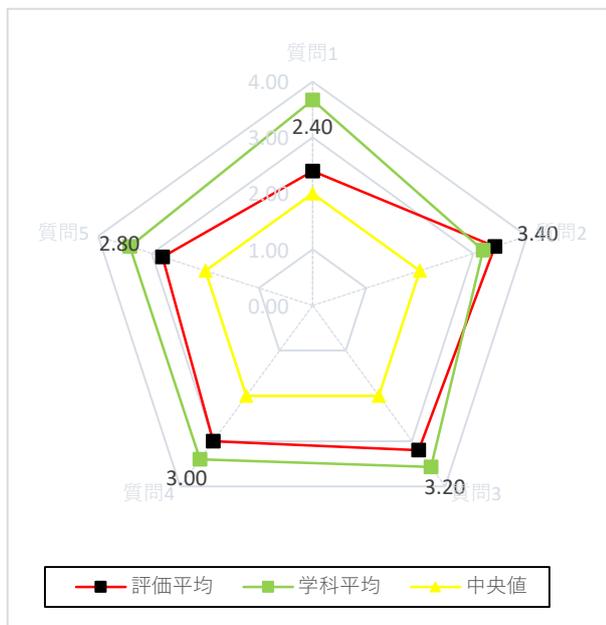
ゼミ指導内では、上記にも述べたように、個別ゼミ指導で使用した教材が卒業論文に向けてどのように関連するかなどの見通しを詳細に伝えることで、課題に取り組むモチベーションを上げるよう工夫したい。

対面授業・遠隔授業どちらにおいても、資料提示の工夫や全体指導・個別指導、授業外課題などをバランスよく行うことで学生の学修の向上につなげたいと考える。

授業評価回答数は、最終回での評価を求めたことで、欠席者以外からは回答が得られたため、次年度以降も最終回に評価のための十分な時間をとれるよう授業計画を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナール I	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

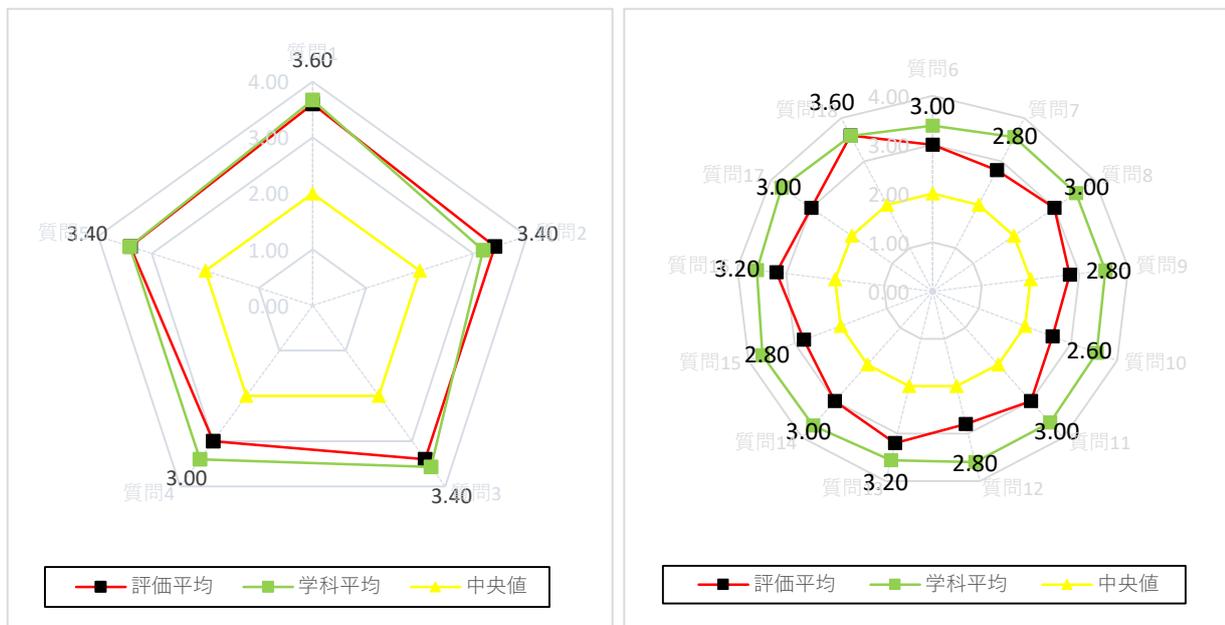
全体的に学科平均より低い。クラス全体を主体的に引っ張っていくことが出来なかったことが原因だと考えている。こちらがしっかりと授業内容を把握しないまま進めていく回もあり、学生からすると戸惑うこともあったらと推測する。しっかりと事前準備をする必要があったと反省する次第である。私自身、授業の狙いを正確に把握せずに進めていったことは大きな反省点である。今後は、しっかりと授業の狙いを理解して実施していこうと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は担当科目ではないが、今回の評価を頭に入れた授業を他のゼミで行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナール I	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

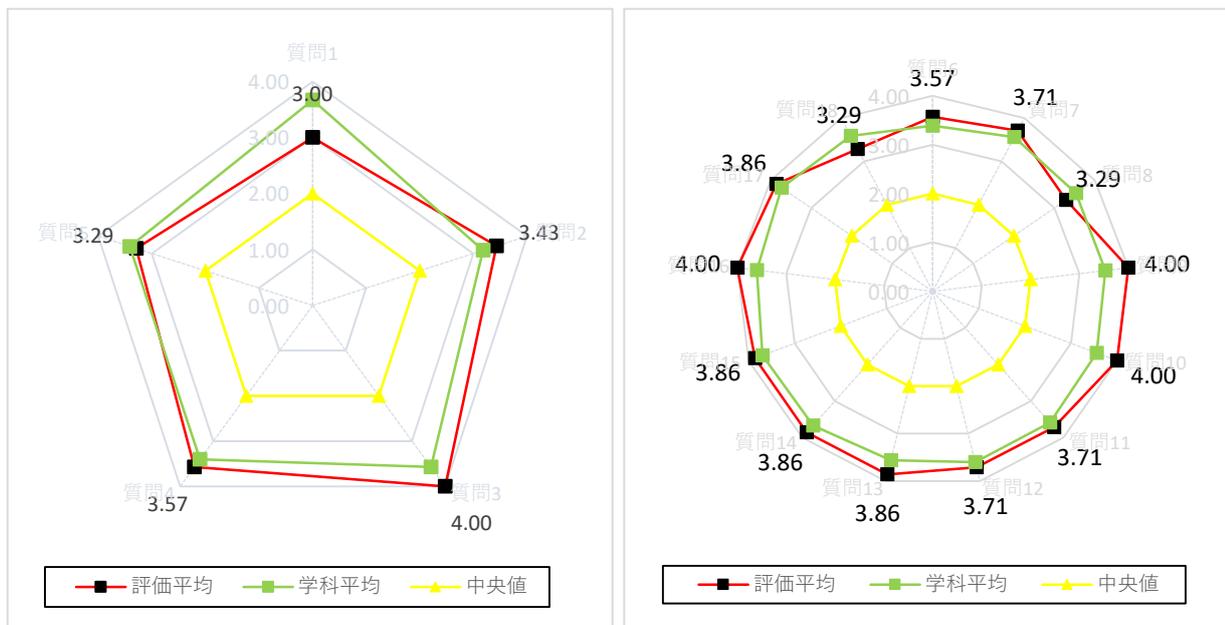
質問6～17は、学科平均よりも低い数値となっている。
 しかしながら、質問18「子の授業の評価」は学科平均とほぼ同程度の評価であった。
 この結果を踏まえ、学生に授業の理解しにくさや、課題への取り組み状況なども踏まえて確認したところ、
 授業に関する前向きな意見が多くアンケートのチェックミスの可能性が大きかった。
 それを踏まえても、学生の不注意など授業においても個別的に配慮する必要もあると考えられた。
 今後も、学生と双方向的なやりとりをしながら授業の工夫に努めたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

少人数ではあるが、学生によって課題への理解や取り組む姿勢にバラつきが見受けられるため、全体のバランスを考慮しながらも個別に応じた対応が必要となると思われる。もしくは、学生相談につなげる必要も感じている。
 個別の指導においては、指導のポイントを絞ってこれからの学生の力につなげる工夫が必要だと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナール I	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

ほとんどの項目できわめて高い評価が得られた。興味の工夫、全体評価が相対的に低く見えるものとなった。

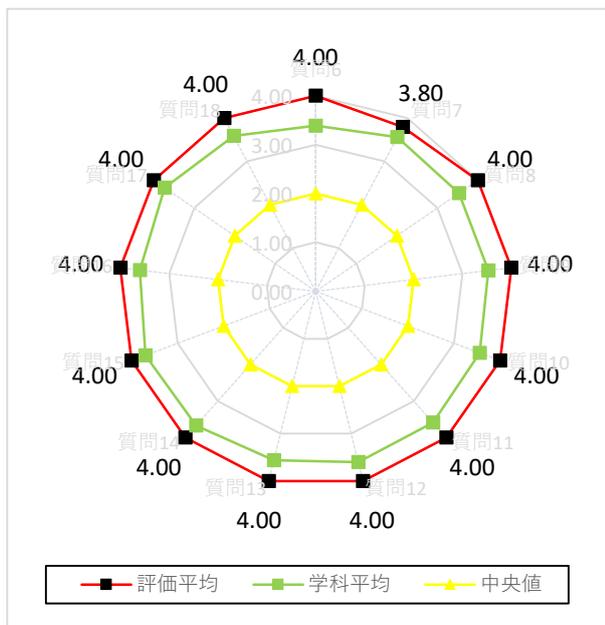
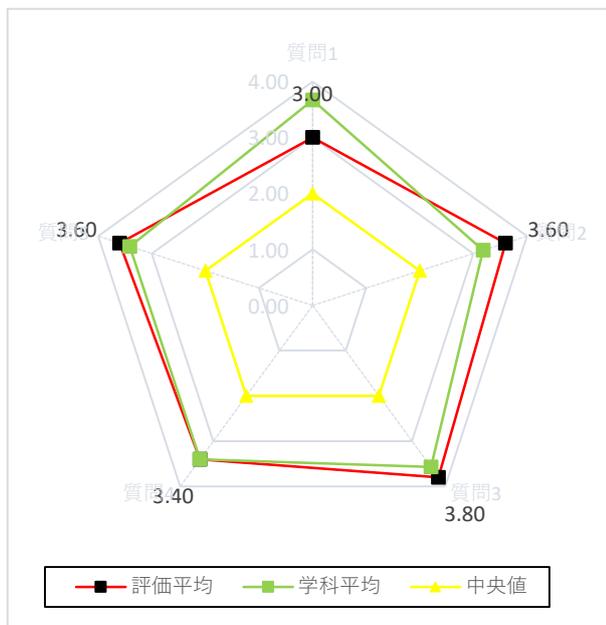
特に双方向的やりとりにおいては全員から「4」と評価された。数週にわたって書くレポートを細切れにし、少しずつ提出してもらいながらフィードバックで軌道修正する関わりが正に評価されたかもしれない。

(3) 次年度に向けての取り組み

個人でできるところは引き続き、高評価が得られるよう取り組む。
授業設計に関するところでは、学年全体で課題抽出と改善に取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

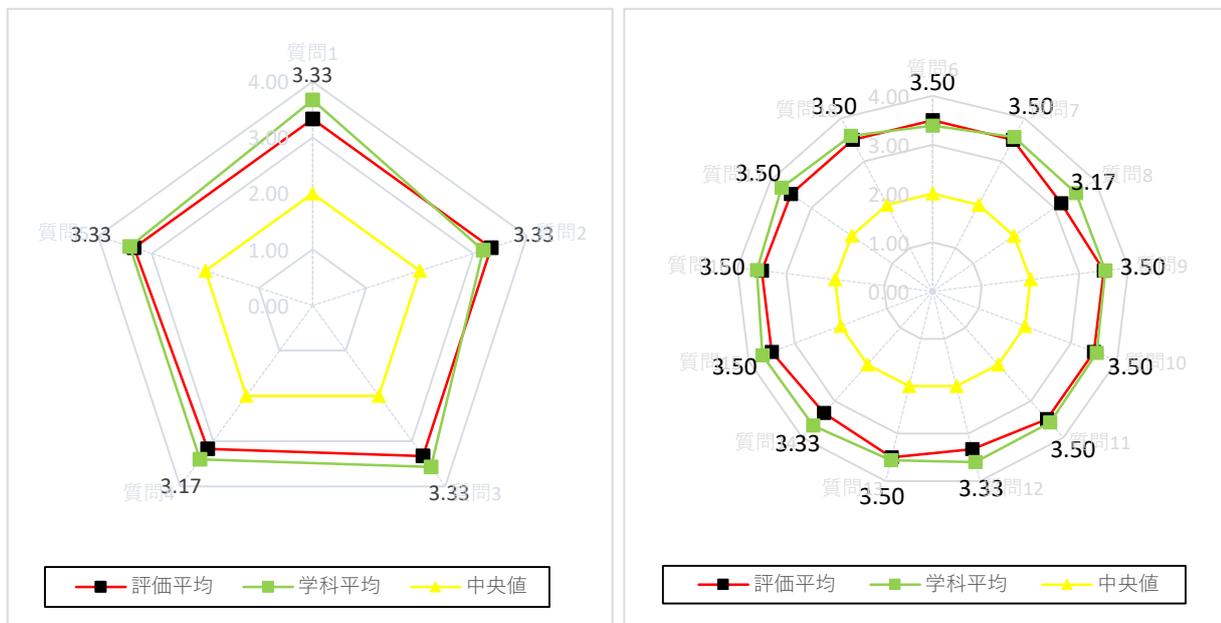
授業の狙いを明確にして取り組んだ結果が評価に表れていると考える。ただ学生の欠席が何度かあり、十分な指導が行き届かなかった点が悔やまれる。学生各自の生活面での指導も取り入れていく必要があると考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

一人一人の生活面をしっかりとチェックしていく必要があるものとする。次年度は担当ではないが、他のゼミ活動で取り入れていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナルⅡ	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本講義はゼミ指導・個人指導と学科全体での授業形式とが混在しており、ゼミ指導においても各教員の指導体制が揃うよう、事前に調整を行って授業が行われた。後期は、学生が自らの興味があるテーマについてのレポートのまとめや発表を行うための指導の時間と全体でのキャリアプランニングのための授業とが大きな柱であり、各学生の主体的な取り組みを求めることが多かったため学生自身の自己評価が高くなったと考えられる。一方で、教員が授業教材等を準備して行うような授業ではなかったため、教員に対する評価としては、一部回答しづらい項目もあったと思われる。

質問12については、情報伝達の際に時間の関係上早口になるような場面もあったため、次年度以降、伝達事項については十分な時間の余裕をもって行うよう心掛けたい。

授業評価回答数は、最終回（遠隔実施）で評価を行うよう伝達し、回答状況が即時に確認できなかったものの、個別指導の待ち時間に取り組むよう声掛けをおこなうことで、1名を除いては評価回答が得られたので、今後も授業最終回に十分な時間をとって授業評価に取り組めるよう、計画を立てていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度同様授業担当するすべての教員で授業内容や教授方法などについて十分話し合いコンセンサスを得る時間をとることで、より分かりやすい授業構成につなげたい。また、学生のためになる、より適切な教材の検討などさらなる内容の工夫を行えるよう準備を行っていききたい。

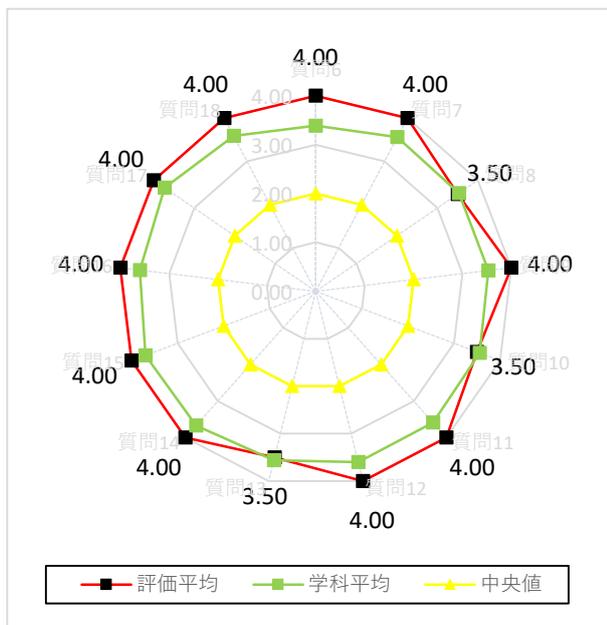
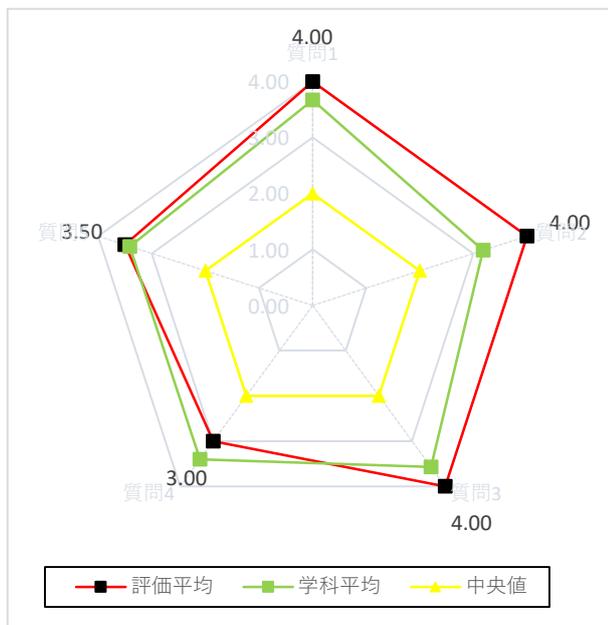
ゼミ指導内では、上記にも述べたように、個別ゼミ指導で使用した教材が卒業論文に向けてどのように関連するかなどの見通しを詳細に伝えることで、課題に取り組むモチベーションを上げるよう工夫したい。

授業内容から、なるべく対面授業で行える方が学生の理解や取り組みのために望ましいと思われるため、対面実施が行いやすい時間に開講できるよう時間割作成時に教務課とも連携を行っていききたい。資料提示の工夫や全体指導・個別指導、授業外課題などをバランスよく行うことで学生の学修の向上につなげたいと考える。

授業評価回答数は、最終回での評価を求めたことで、比較的回答数を確保できたため、次年度以降も最終回に評価のための十分な時間をとれるよう授業計画を行っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

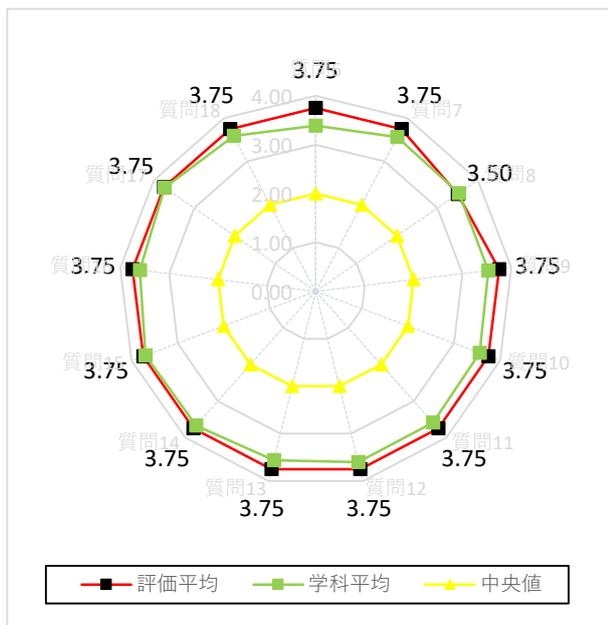
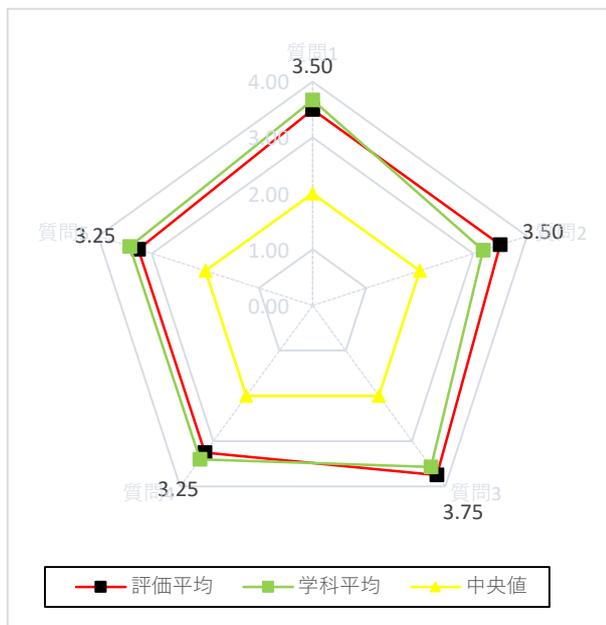
概ね高い評価を得ている。一方で学科共通して行われる内容も多いため、評価は難しいところもある。しかしながら、学生の声に耳を傾けながら、改良していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

内容については、就職支援に向けた取り組み、資格取得に向けた取り組みを充実させていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

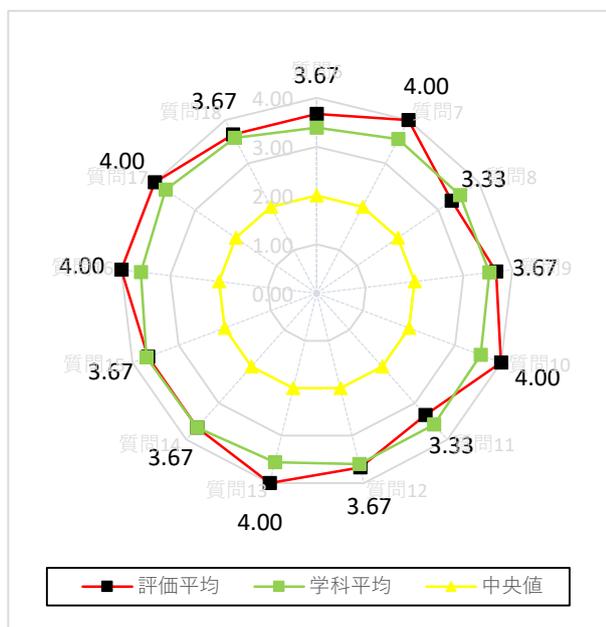
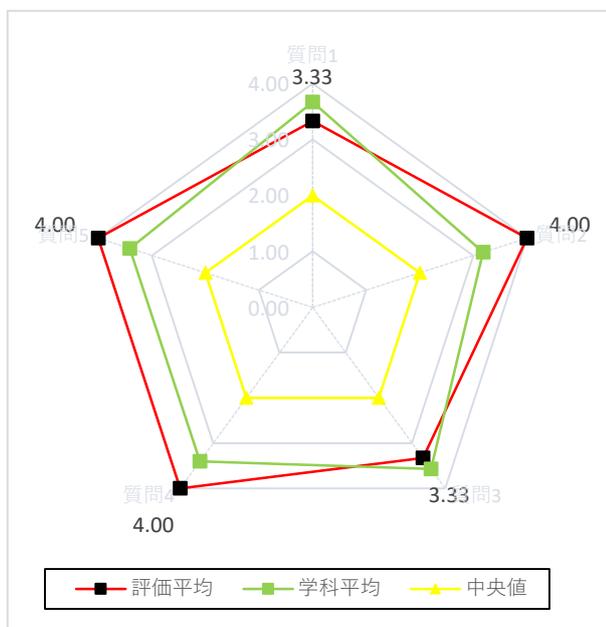
前期と比較すると、すべての項目において評価が高くなっている。一方で、全ての学生が解答しておらず、前期との比較には慎重に行う必要もある。後期では、レポート課題と発表の比重が大きく、個別的な指導の工夫が活かされた結果とも捉えられるであろう。

(3) 次年度に向けての取り組み

特に、レポートの課題に取り組む際は、理解力だけでなく、計画性を持つことも重要であった。質問6の「あなた自身の総合評価」が若干ではあるが学科平均より下回っているために、先述した理解力と計画性を促す工夫を凝らしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

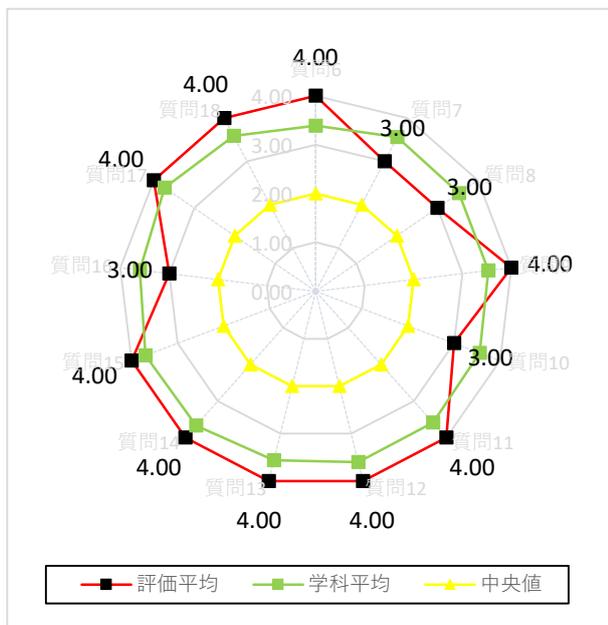
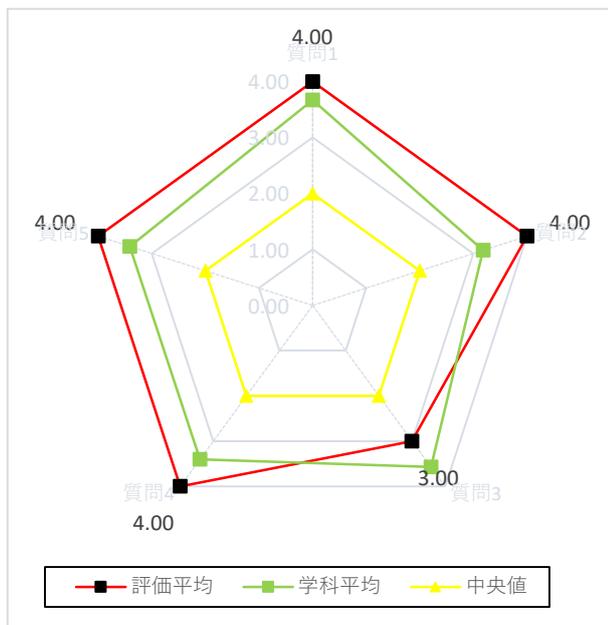
7名中3名の回答なのでやや全体を表していない節があるが、提出学生もそうでない学生も、数週間をかけて取り組むレポートと発表をよく頑張った。これも課題を細切れにして、少しずつ提出しながら軌道修正を図る取り組みが双方向性の評価に関わっていることが考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

個人でできる場所は、引き続き学修満足が得られるよう取り組む。前期の「I」も「興味関心の工夫」が相対的に低かった。学年の会議の際に共有して要因を抽出し、改善に取り組むことが考えられる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		特別支援教育実習事前事後指導	28名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

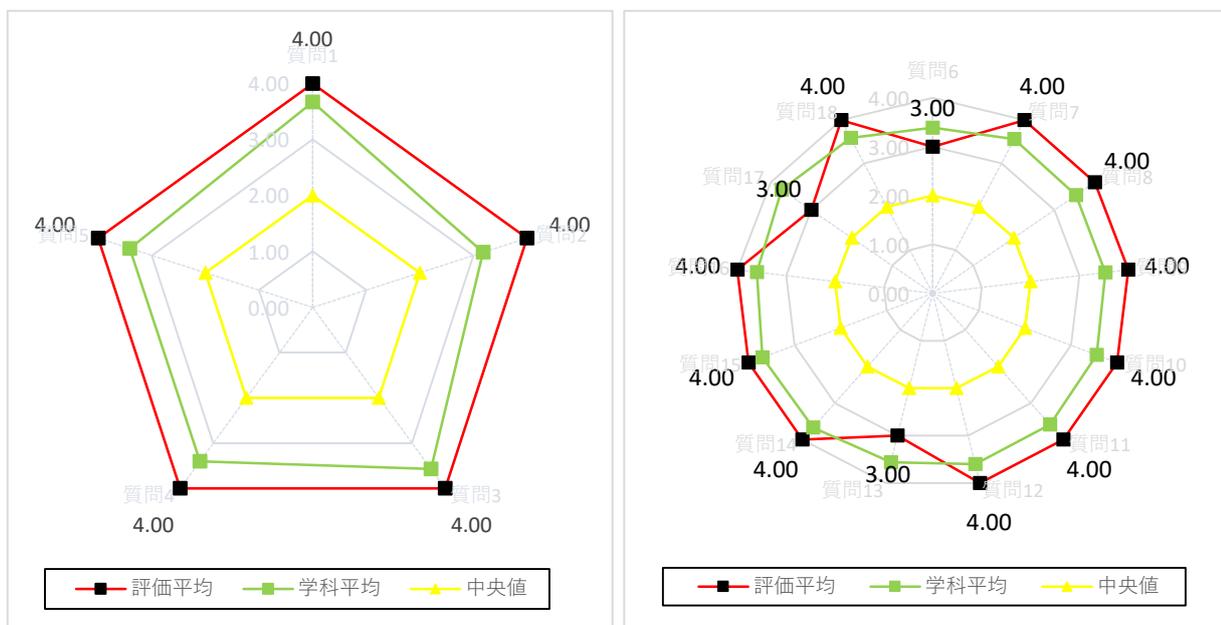
- ・アンケートの回答数が少なかったため、評価平均値に対するコメントは差し控える。
- ・年間8コマ設定しているが、教育実習の時期は学生ごとに異なっており、全体としては9月から12月までと長期間にわたるため、学習指導案の作成については、個別に時間を確保して指導している。
- ・事後指導として実習報告会をオンラインで実施した。今年度は報告会に向けたグループワークを取り入れたことにより、履修生の実習に対する振り返りが深まり、授業のよりよい成果が得られたと考えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・この授業の履修者は年々増加する傾向にあるため、次年度も増加するようであれば、時間設定に工夫を加え、学習指導案の作成指導や実習報告会等の実施について効率的に進めていく必要がある。
- ・グループワーク等のアクティブ・ラーニングを有効に行い、学修の深化に努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		特別支援教育実習	28名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

- ・ アンケートの回答数が少なかったため、評価平均値に対するコメントは差し控える。
- ・ 実習中の学習指導案の作成や、授業準備のプロセスなどについて実習校それぞれに特色があり、実習生は大学での学びと実習校での指導を結びつけることに苦労しながらも、熱心に実習に取り組むことができていた。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・ 特別支援教育実習事前事後指導において、児童生徒の実態把握のための視点を明確化するなど実習中の課題解決につながる学修を充実させるとともに、実習校の実践の特色を可能な範囲で紹介するなど情報提供の充実に努める。
- ・ 実習希望者が増加傾向にあるが、特別支援学校教員免許を取得することの意味や意義の十分な理解に努めるとともに、実習に向けた意識、意欲の高揚を図ることが必要である。